

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第8号

《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土土器についての一考察  
新屋敷 久美子

南部九州における中世瓦質土器の蛍光X線分析  
黒木 梨絵

植物質資料からみた南九州  
—天神段遺跡を中心に—  
深川 祐子

全点ドット調査の有効性と問題点  
—1970年代から1990年代の調査を中心に—  
立神 倫史

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について  
長野 眞一

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡  
中村 耕治

郷土教育と考古学  
—相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと—  
吉元 輝幸

《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き  
上床 眞

平成26年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2015.10

# 『縄文の森から』 第8号 目次

---

---

## 《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土土器についての考察

新屋敷 久美子 . . . . . 1

南部九州における中世瓦質土器の蛍光 X 線分析

黒木 梨絵 . . . . . 7

植物質資料からみた南部九州

— 天神段遺跡を中心に —

深川 祐子 . . . . . 19

全点ドット調査の有効性と問題点

— 1970年代から1990年代の調査を中心に —

立神 倫史 . . . . . 33

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野 眞一 . . . . . 47

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡

中村 耕治 . . . . . 53

郷土教育と考古学

— 相田日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと —

吉元 輝幸 . . . . . 65

## 《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き

上床 真 . . . . . 77

平成26年度年報 . . . . . 85

---

---

# 古墳時代肝属平野における 地下式横穴墓出土鉄器についての一考察

新屋敷久美子

Ironware excavated from Underground Corridor-style Brial Chambers in the Kofun jar, Kimotsuki Plain

Shinyashiki Kumiko

## 要旨

本稿では、肝属平野の地下式横穴墓から出土した副葬鉄器を対象として、その器種や出土量、分布の傾向の分析をおこなった。結果、肝属平野における鉄器の出土傾向が把握でき、高塚古墳に伴う地下式横穴墓と地下式横穴墓が主体の墓地とでは副葬品の器種・量が異なっており、前者は希少品が少量、後者は一般的な鉄器が少量だが一部では大量に出土するという傾向が見えた。

キーワード 古墳時代中期、地下式横穴墓、副葬鉄器、肝属平野

## 1 はじめに

地下式横穴墓は、古墳時代の南九州に分布した墓制である。在地性の強い墓制として注目され、古墳時代の南九州を理解する上で研究対象とされてきた。地下式横穴墓という在地的な墓制の分布域が、畿内を中心とした全国的な斉一性の象徴である高塚古墳の分布域と重複することも大きな特徴である。そもそも古墳時代は、全国的に斉一性が目立つ時代である。特に、古墳時代中期では、畿内を中心として、広域で副葬される武器・武具の種類や組み合わせが斉一的であることが知られている。これは、政治の中心である畿内から全国に大量の鉄器配布があり、首長間の交流によって鉄鍬の広域な移動と情報の共有化が政治的にこなわれた等が考えられている (e.g. 橋本 2003)。しかし、南九州では、そうした畿内的な副葬品がありつつも、広域流通していない、在地的な鉄器が出土している。代表的な例が、圭頭鍬である。圭頭鍬は弥生時代後期から存在する鉄鍬であり、古墳時代前期後半～中期前半では近畿を中心として点在するが、それ以降では南九州で大量に出土する (杉山 1988)。さらに、その形態も広域流通品とは異なる特徴をもつ (和田 2002)。このように、南九州では、在地

的な墓制・鉄器と斉一的な墓制・鉄器が共存していることが指摘され、畿内の政治的な影響を受けつつも、地域独自の社会を形成・維持していたとされている (橋本 2003)。

これまで古墳時代南九州の研究は一定の成果があるものの、特に遺物出土量の多い宮崎平野やえびの地域、薩摩・肥後南部地域のみで語られてしまうことも少なくない。そこで今回は、南九州のなかでも、地下式横穴墓と古墳の南限地域だがあまり研究対象とされてこなかった肝属平野の地下式横穴墓から出土した鉄器の出土量や出土地域の傾向を分析することで、肝属平野の古墳時代当時の様相を考察することを目的とする。

## 2 先行研究

古墳時代の副葬品の中でも、時期判断の指標となる鉄鍬の研究は古くからあるが、杉山秀宏の研究によって編年の大枠は完成にいたっている (杉山 1988)。その後、尾上元規や水野敏典によって地域性を抽出する研究がおこなわれているもの (尾上 1993, 水野 1995)、これらは古墳時代後期を対象としており、それ以前の中期では全国的には斉一性が認められている。しかし、南九州においては例外

であり、古墳時代中期の地域性を検討するための研究対象にされている。南九州で地域性がみられる理由に関して橋本達也は、

- ① 地下式横穴墓や地下式板石積石室墓という南九州に特徴的な墓は、遺存状態がよく、有力首長から広範の階層の人々まで埋葬施設が確認されやすい
  - ② 群集をなす墓制の調査がされ、少数でも鉄鏃が出土する場合があります、その結果、鉄器出土量が多い
  - ③ 元々形態的に地域性をもった鉄鏃が分布しているため
- としている（橋本 2003）。

このような南九州の地域的特色から、具体的にその地域性を見出す研究として特筆すべきなのが、和田理啓による研究である（和田 2001；2002；2007）。和田は、地下式横穴墓から最も普遍的、かつ数多く出土する圭頭鏃（高木 1981；1982，杉山 1988）をその形態差から分類し、広域流通する鉄鏃との共伴から年代を推定し編年をおこなっている（和田 2001）。そのなかで、圭頭鏃の分布の中心が西諸県地方にあることから、西諸県地方が南九州の圭頭鏃の流通の中心であった可能性を指摘している（和田 2002）。

また、南九州出土鉄鏃を、流通形態ごとに分類しその様相構造を探ったのが、秦憲二による研究である（秦 2003）。秦は、南九州を「薩摩・肥後南部地域」、「えびの地域」、「岩瀬川・大淀川上流地域」、「日向灘沿岸地域」の4つに、鉄器の型式を「生産型式」、「搬入型式」、「広域流通型式」の3つに区分し、鉄鏃の形態差や分布の中心地がどこにあるかの分析をおこなった。その結果、「一口に南九州といっても、日向灘沿岸部と内陸部では異なる様式構造である」、「在地的な型式である圭頭鏃群が直刃類と曲刃類で生産地域が異なる」、「内陸部では圭頭鏃群以外にも生産型式と認定できるものがある」ことを明らかにした（秦 2003）。

南九州の様相について徐々に明らかになってきてはいるものの、対象を南九州としつつも、肝属平野についてはあまり触れられていないのが現状としてある。それを指摘し、肝属平野を対象とした研究をおこなったのが田村和裕である（田村 1998）。田村は、地下式横穴墓の南限地域で

ある大隅地域の地下式横穴墓が、資料の蓄積があるにも関わらずこれらの分析を総合的におこなっている例がないことを指摘し、大隅地域の地下式横穴墓の分類、編年をおこなった。そのなかで、副葬鉄器について、宮崎平野部や鹿児島県内陸部と比べると量的に少ないが、それは大隅地域独自の副葬品を選択していたのではなく、種類・量ともに僅少な所有だったというネガティブな独自性が見えるとし、これを「地理的勾配 geographical cline にしたがった衰退」ととらえている。

このように、肝属平野を対象とした研究は一部あるものの、肝属平野内という小地域での分布の傾向の考察はなされていない。そこで今回は、肝属平野の地下式横穴墓を対象として、その鉄器の出土傾向や地域性について検討した。

### 3 資料と方法

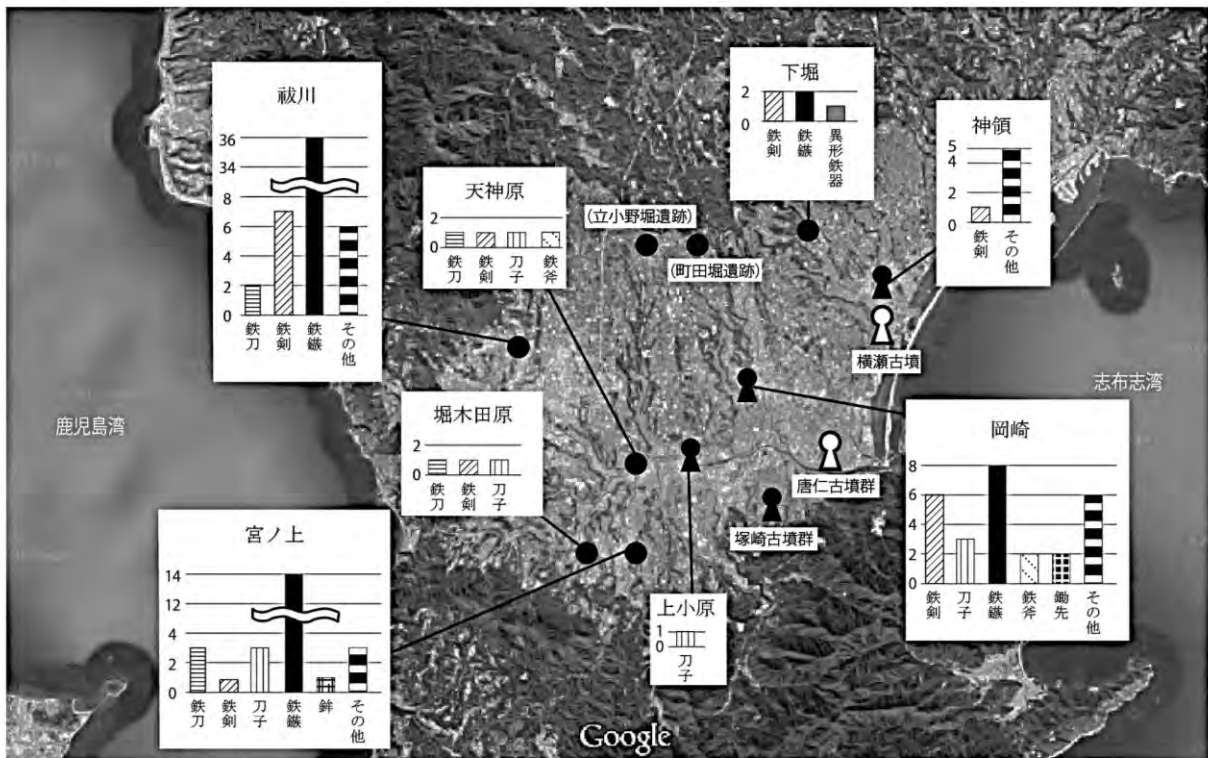
肝属平野で副葬品として鉄器が出土している地下式横穴墓を対象とした。時期差による差を排除するため、鉄器が豊富に出土する古墳時代中期を対象とし、それに伴い築造時期が判断ができない地下式横穴墓は対象外とした。時期判断については、時期が特定されている広域流通品との共伴（e. g. 杉山 1988）と、先行の研究（高木 1981；1982，和田 2001；2002 など）などを参考にした（表1）。また、図1に地下式横穴墓が伴う古墳として塚崎古墳群を挙げているが、古墳自体は古墳時代中期に該当するものの、地下式横穴墓は現在報告されている資料では時期が下るため対象外とした。

これらから、それぞれの器種とその数をカウントし、地理的傾向と比較できるようグラフによって可視化した。それを参考に、遺跡内での出土量比や、遺跡同士の位置関係、前方後円墳との位置関係から、その様相を検討する。

### 4 結果と考察

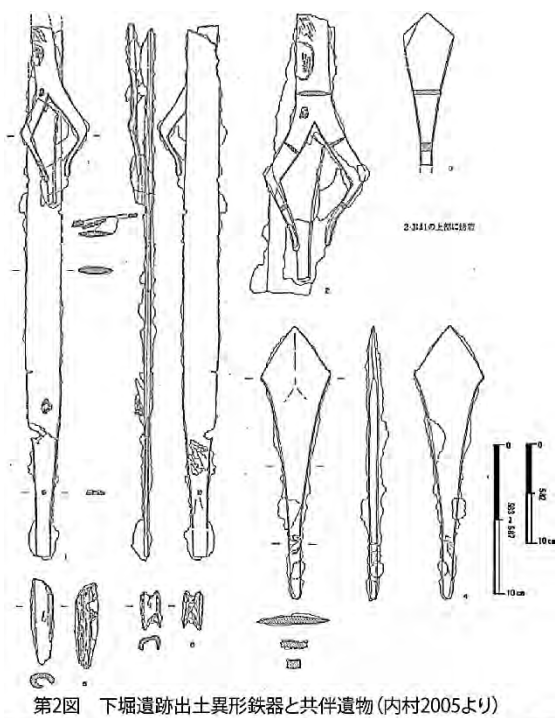
全国的に資料が豊富といわれる段階である古墳時代中期だが、鉄器が副葬されている地下式横穴墓は7遺跡となった（表1）。時期判断できない地下式横穴墓を除外しているため、あくまで下限の数字であるが、他地域と比較す

第1表 地下式横穴出土鉄器											
遺跡名	所在	号数	副葬品								
			鉄刀	鉄剣	刀子	鉄鏃	鉄斧	鉾	鋤先	その他	
下堀	曾於郡大崎町	2号		1		2				異形鉄器(15.2cm)	
		6号		1		1					
神領	曾於郡大崎町	1号		1						骨製芥1、イモガイ製貝 釧2、内向花文鏡1	
祓川	鹿屋市祓川	遺構不明	1	1						横矧板鍔留短甲、横矧 板鍔留衝角付冑	
		1号				5					
		10号		1		9					
		18号		2							
		21号	1	1		14					
		27号		1							
		28号					5				
29号		1		3				胡禄金具4			
天神原	旧肝属郡吾平町	1号		1	1						
		2号	2				1				
上小原	旧肝属郡串良町	1号			1					須恵器(蓋、甕、樽型 甕)	
岡崎	旧肝属郡串良町	1号		2	1	8				不明1 砥石1、鉋1、鑿1	
		1号		3	1		1	U字形鋤先1	鑿子状鉄製品1、鉄鋸1		
		2号		1	1		1	方形板鋤先1			
宮ノ上	旧肝属郡吾平町	4号	1			1				鐔1	
		10号	1			10		1		不明3	
		11号	1? (柄のみ)			1	3				
		12号		1(破片)							
		14号			1						
堀木原田	旧肝属郡吾平町		1	1	1						

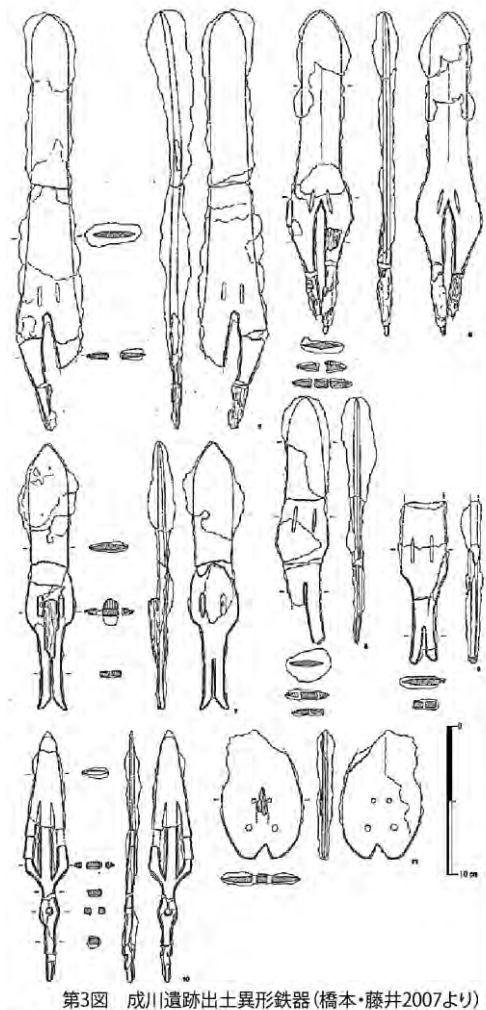


第1図 副葬鉄器出土地下式横穴墓とその出土量 ( ( ) 内は未発表資料)

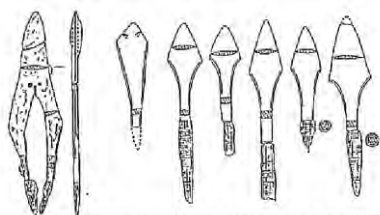
●…地下式横穴墓 ○…高塚古墳 ●…高塚古墳+地下式横穴墓



第2図 下堀遺跡出土異形鉄器と共伴遺物(内村2005より)



第3図 成川遺跡出土異形鉄器(橋本・藤井2007より)



第4図 松ノ元地下式横穴墓出土異形鉄器と共伴遺物(乙益1974より)

ると明らかに少ない。これは、単発的な調査がほとんどで、墓域全域を調査するような広範囲での発掘調査があまりおこなわれていないことも大きな原因として考えられる。しかし、祓川地下式横穴墓群のように地下式横穴墓自体は34基出土しているものの、副葬品が伴うのは7基という明らかに副葬品をもつ地下式横穴墓が少ないという傾向はある。このような出土状況に関して、田村の「地理的勾配にしたがった衰退」という要因も考えられるが(田村1998)、今後の調査による資料の増加を期待することとし、現段階での出土状況から述べることにする。

高塚古墳と地下式横穴墓との地理的な関連として、今回最も出土数の多かった祓川地下式横穴墓は、高塚古墳が集中する地域のほとんど対角線上に位置する(図1)。高塚古墳と共存する地下式横穴墓3遺跡で、比較的鉄器が多いのは岡崎古墳群に伴う地下式横穴墓である。注目すべきはその種類で、鉄鋌や鍬子状鉄製品などこの地域で出土がほとんどない希少なものを含んでおり、地下式横穴墓が主体の墓地とは様相が異なることを示している。神領古墳群に伴う地下式横穴墓でも、出土量は目立って多くないものの、鹿児島県内の地下式横穴墓で唯一、鏡が出土している。上

小原古墳に伴う地下式横穴墓は、副葬鉄器は刀子1点だが、須恵器が副葬されている。こちらもまた他の地下式横穴墓にはほとんど例がなく、質が異なる。また、今回対象とした遺跡で最も鉄鏃が多く出土しているのは祓川地下式横穴墓である。さらに、未発表であるものの、鹿屋市串良町細山田所在の立小野堀遺跡や町田堀遺跡で数多くの鉄器が出土しているとの報告がある。この3遺跡は地下式横穴墓が主体の墓地である。よって、高塚古墳と共存する地下式横穴墓は、明らかに地下式横穴墓が主体の墓地とは副葬品の質が異なり、古墳の影響下にある。逆に、地下式横穴墓が主体の墓地は、多くが量・質ともに劣るものの、祓川地下式横穴墓などのような一部の地下式横穴墓では、刀剣類・鉄鏃が主体だが数を豊富にもっている、という所有の違いが見えてくる。つまり、古墳にともなう地下式横穴墓は量より質、一部の地下式横穴墓が主体の墓地では質より量という傾向があり、副葬品の面からも、両者の権力の違いが表れている。

また、下堀遺跡の2号墓で出土している異形鉄器(図2)は、地域色が強いといわれる南九州のなかでも、かなり限定的な出土をしている。まず、指宿市山川町所在の成川遺

跡で6点出土している(図3)(田村(編)1974, 橋本2003, 橋本・藤井2007)。副葬品ではないものの、その数の多さや重厚なつくりから他遺跡出土のものより先行するとされている(橋本2003, 橋本・藤井2007)。その他では、宮崎県小林市真方所在の松之元地下式横穴墓で1点出土しているのみで(図4)(乙益1974), 3遺跡でしか出土していないのが現状である。

この異形鉄器が、立小野堀遺跡や町田堀遺跡でも出土しているとの報告がある(注)。時期的にも地理的にも近いこれらの遺跡からの異形鉄器出土は、分類や編年、共伴遺物からの組み合わせの問題、その性質など、これまで資料数の少なさから言及できなかった部分の進展が期待できる。

さらに、近年の調査によって、鹿屋市串良町細山田所在の川久保遺跡で鍛冶関連建物跡の発見が報告されている。異形鉄器が出土している上記の遺跡から時期は下るため、直接の関連はないものの、肝属平野で鍛冶がおこなわれていたことを示す重要な遺跡である。異形鉄器の分布の中心は、肝属平野の北側である。あくまで、現段階でという条件が付くが、この地で鉄器が製作されていた可能性を少なからず示すものである。

これに関連して、立小野堀遺跡では鉄鐸の出土が報告されている(註)。鉄鐸は、全国的には鍛冶具とともに副葬されており、渡来系鍛冶工人と関連して理解されていることが多い(e.g. 早野2008)。ただし、同じく南九州で鉄鐸の副葬例がある宮崎県内では、鍛冶関連遺構が出土しているにも関わらず、鍛冶具が副葬している例はなく、地域で性質が異なる可能性を示している(甲斐2010)。立小野堀遺跡出土の鉄鐸も、直接的に同時期にこの地で鉄器が製作されていたと言えるものではないものの、根拠の一つになる可能性はある。今後の調査による資料の増加に期待したい。

## 5 おわりに

以上、本論では、肝属平野の鉄器の出土傾向の現状の整理と把握ができ、今後の解決すべき課題が見えてきた。今後は、高塚古墳出土の副葬鉄器も対象とし、高塚古墳と地下式横穴墓との比較や、当時の肝属平野の武器所有の様相、その他の南九州地域との比較などについても検討したい。

また、刀剣類に関しても、刃部幅が広く薄手で実用性に欠ける形態をした在地生産が考えられるものが出土している。明確な分類基準がないため今回は時間の都合上対象外としたが、これについても、広域流通品との形態の違いなどから分類基準を設定し、その分布を分析することで、さらに肝属平野での様相に迫ることができるとであろう。今後の課題としたい。

【註】発掘調査報告書は未刊行だが、現地説明会等で報告されている

### 【発掘調査報告書】

- 近沢恒典(編)2005『高取原地下式横穴墓』高城町文化財調査報告書19, 高城町教育委員会。  
鹿屋市教育委員会2007『薬師堂の古墳 祓川地下式横穴墓群』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書83, 鹿屋市教育委員会。  
長野真一・中村耕治(編)(1983)『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書25, 鹿児島県教育委員会。  
中村耕治(編)1989『天神原地下式横穴群』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書5, 吾平町教育委員会。  
中村耕治(編)1990『岡崎古墳群』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書3, 串良町教育委員会。  
中村耕治・湯之前尚(編)1992『神領地下式横穴6号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書2, 大崎町教育委員会。  
立神次郎・中村耕治(編)1980『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書13, 鹿児島県教育委員会。  
田村晃一(編)(1974)『成川遺跡』, 文化庁埋蔵文化財発掘調査報告7, 文化庁。  
戸崎勝洋・東和幸(編)1988『神領地下式横穴群5号』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書1, 大崎町教育委員会。  
戸崎勝洋・井ノ上秀文・吉井政広1987『宮ノ上地下式横穴群』『宮ノ上地下式横穴群一附 松ノ下城跡・大牟礼遺跡一』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書2, 吾平町教育委員会。  
内村憲和(編)2005『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書5, 大崎町教育委員会。  
吉永正史・中村耕治(編)『岡崎4号墳・1号地下式横穴墓』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書1, 串良町教育委員会。

### 【引用・参考文献】

- 第4回九州前方後円墳研究会実行委員会2004『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会第II分冊, 九州前方後円墳研究会  
藤井大祐2003『南九州古墳時代鉄鏃集成』『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』, 第6回九州前方後円墳研究会, 九州前方後円墳研究会  
橋本達也2003『副葬鉄器からみる南九州の古墳時代』『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』, 第6回九州前方後円墳研究会, 九州前方後円墳研究会  
橋本達也・藤井大祐2007『古墳以外の墓制による古墳時代墓制の研究』, 鹿児島大学総合研究博物館  
早野浩二2008『古墳時代の鉄鐸について』『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』9, 愛知県埋蔵文化財センター

- 甲斐貴充 2010「古墳時代宮崎県内出土の鉄鐸資料」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』6, 宮崎県立西都原考古博物館
- 水野敏典 1995「東日本における古墳時代鉄鍬の地域性」『古代探叢』IV, 早稲田大学出版部
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鍬の地域性—長頸式鉄鍬出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』40-1
- 乙益重隆 1974「成川遺跡の鉄器・鉄製品について」『成川遺跡』文化庁埋蔵文化財発掘調査報告 7, 文化庁
- 秦 憲二 2003「南九州における古墳時代鉄鍬の様式構造」『先史学・考古学論究』4, 龍立考古会
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鍬について」『橿原考古学研究所論集』8, 吉川弘文館
- 鈴木一有 2002「九州における古墳時代の鉄鍬」『考古学ジャーナル』496
- 高木恭二 1981「4. 圭頭斧箭式鉄鍬について」『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書 3, 城二号墳発掘調査団, 熊本県宇土市教育委員会
- 高木恭二 1982「圭頭斧箭式鉄鍬再考」『肥後考古』2, 肥後考古学会
- 田村和裕 1999「大隅地域における地下式横穴—分類・編年と基礎的位置づけ—」『人類史研究』11, 人類史研究会.
- 和田理啓 2001「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第 4 回九州前方後円墳研究会第 I 分冊, 九州前方後円墳研究会
- 和田理啓 2002「宮崎の鉄鍬—その分布と流通について—」『考古学ジャーナル』496
- 和田理啓 2007「九州における古墳時代中期の鉄鍬」『九州島における中期古墳の再検討』第 10 回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集, 九州前方後円墳研究会

# 南部九州における中世瓦質土器の蛍光 X 線分析

黒木 梨絵

X-ray fluorescence analysis of Medieval pottery in Southern Kyushu, Japan

Kuroki Rie

## 要旨

南部九州における中世瓦質土器の生産・流通の解明に向けて、多器種の瓦質土器が出土している鹿児島県さつま町宮之城所在の虎居城跡出土瓦質土器について蛍光 X 線分析による胎土分析を実施した。その結果、在地生産の可能性が高い土師器と瓦質土器の化学特性に類似するものがあること、また搬入を示唆する個体があることなどが確認できた。さらに、大和系瓦質土器には在地産のものが含まれる可能性があり、生産地の様式的判断と胎土による識別とが一致しない場合があるとの見通しが得られた。今後の研究では、型式学的観察と胎土分析の併用が有効である。

キーワード 中世、瓦質土器、蛍光 X 線分析、虎居城跡、南部九州

## 1 はじめに

中世遺跡では、貿易陶磁器という広域流通品はもとより、中世須恵器、国産陶器等の列島内の広域流通品が出土する。それらは貯蔵具（甕・壺・鉢）や調理用具（播鉢・捏鉢）、暖房用具（火鉢）、喫茶用具（風炉・茶釜）などの多器種にわたる。特に備前や常滑などの国産陶器は、窯跡等生産地の調査・研究が進んでおり、形態的特徴・技法・色調・胎土などから、消費地遺跡でも産地や時期をかなりの程度判断することが可能である。

対して、奈良火鉢に代表される瓦質土器は、中世後期には全国的に展開するとともに多様な器種があり、地域的な特色も強いいため、各地域で実態把握が進められており、九州でも同様である（e.g. 菅原 1989; 徳永 1990; 山本 1990; 山本・山村 1997; 佐藤 2001, 2006; 佐藤 2001; 瀬戸 2004a・b, 2008, 2009）。しかしながら、生産地が未発見で、共伴資料などの良好な資料が不十分といった制約のため課題も多い。また、各地で出土する奈良火鉢とされるものを含め、在地生産か他地域の生産かの客観的判断は困難な場合が多く、生産体制や流通の実態解明には至っていない。

そこで本論では、南部九州の瓦質土器の蛍光 X 線分析を用いた胎土分析を実施し、本地域の中世瓦質土器の生産・流通の問題解明への足掛かりとしたい。

## 2 南部九州における瓦質土器

南部九州における中世土器研究では、供膳具（岩元 2011, 2012a・b）、煮炊具（上床 2004）、瓦質土器（佐藤 2001）などが行われ、型式学的変遷や地域性の把握がなされている。中世の南部九州は、鉄製鍋・土製鍋の出土例が他地域と比べて少ないといった独自の地域性をもつ（e.g. 山本・山村 1997; 上床 *ibid*）が、在地生産品と搬入の在り方など

いまだ不明な点が多い。

南部九州の瓦質土器の検討を行った佐藤重聖（2001）は、その特質として、①器種が風炉形土器、浅鉢形、深鉢形、釜に限られ、小型製品がほとんどみられない、②浅鉢形の数量や種類が相対的に少ない、③深鉢形は突帯とスタンプ文をもつものが圧倒的に多い、④在地の瓦質土器は、大和系瓦質土器の特徴であるイブシや器面調整のヘラミガキをもたない土師質のものが多く、⑤在地産のものとは大和系瓦質土器との間に技術的に差異が大きく、積極的に模倣しようとする意識や技術交流が少ない、⑥城郭からの出土が圧倒的に多い、⑦15～16世紀が生産時期、という特徴を指摘している。

さらに、大和系瓦質土器と比較からみた南部九州の特徴として、①胎土が土師質で燻不良なものが多い、②ヘラミガキを施さないものが多い、③突帯貼り付け前の割り付け線を持つものがない、④スタンプに規則性が乏しい・胎土が土師質で燻不良なものが多い、という点を挙げ、これらの特徴を有する瓦質土器を在地系瓦質土器として位置づけている（佐藤 *ibid*）。

大和系瓦質土器と在地系瓦質土器の比較によって見出された特質は南部九州の地域性であり、南部九州における瓦質土器の在り方を示すものである。現在のところ、南部九州における瓦質土器研究は佐藤の論文のみであり、資料が増加した今日、再整理が必要な現状にあるといえよう。

佐藤の指摘どおり、南部九州の瓦質土器には灰白色の胎土で硬質なもの、焼成不良で橙色系の色調をもついわゆる土師質のものが存在し、後者が多い傾向にある。中には一見、土師質でありながら硬質なものも存在する。調整技法もミガキ、ナデ、ハケメと多様である。器種は、風炉形土器、火鉢（浅鉢形・深鉢形）、羽釜、播鉢、捏鉢、焜炉な

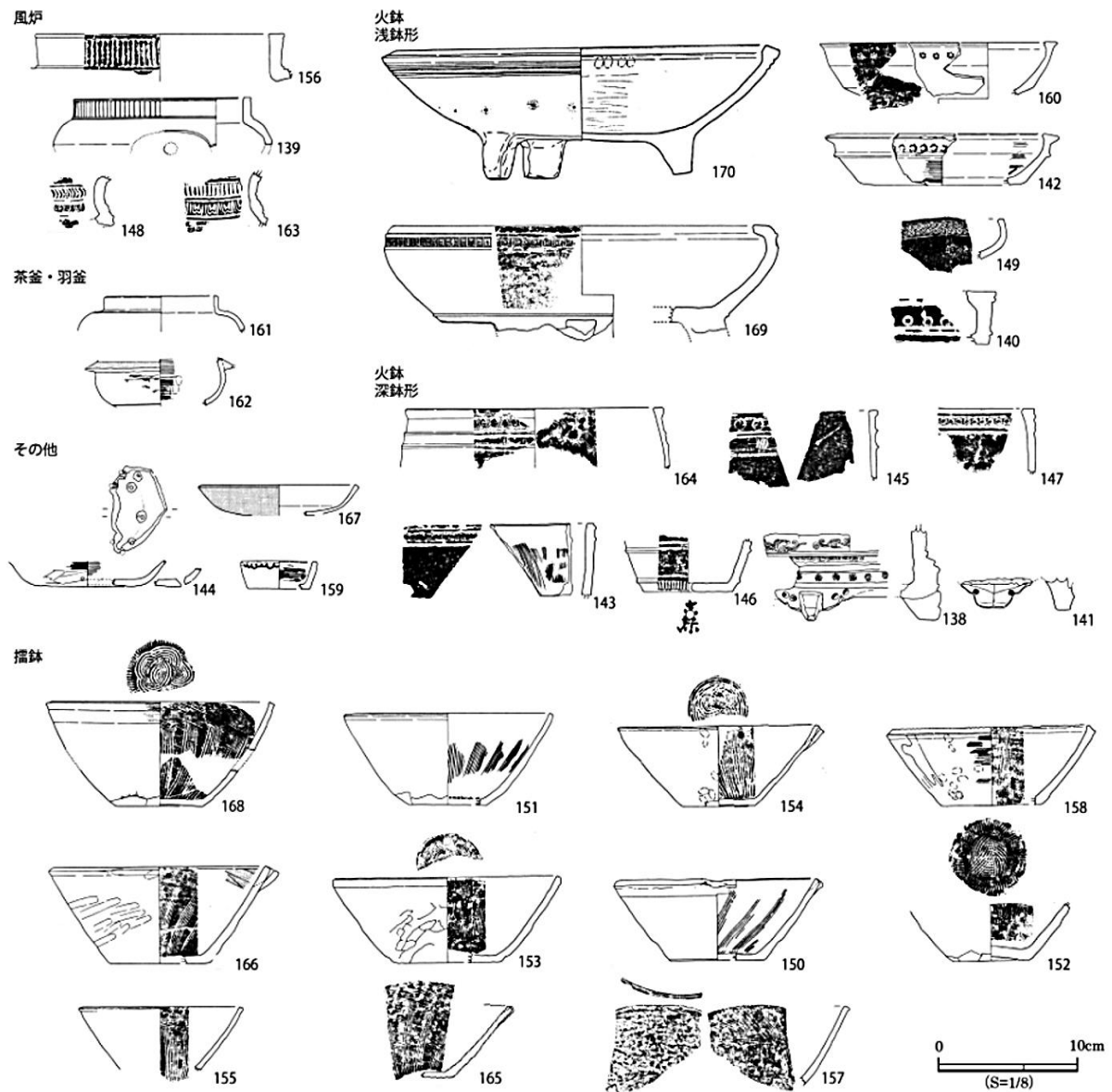


図1 虎居城跡出土瓦質土器（鹿児島埋セ2011）

どがある。風炉や火鉢のような奢侈品とみられるものは城館や寺院での出土が多いことが指摘されているが（水澤1999；佐藤2001・2006），南部九州でも同様な傾向がみられる。なお，大和系瓦質土器について，花菱文スタンプ文をもつ風炉の胎土分析による産地推定が実施されており，鹿児島県中尾田遺跡（鹿児島県教委1981）出土の風炉・火鉢が奈良産の可能性が高く，畿内からの搬入品である可能性が指摘されている（菅原1989）。これは，南部九州における瓦質土器の希少な胎土分析例であるが，未だ分析試料数が少なく，基礎データの格段の増加が必要である。

一方，他の器種に関しては整理が進んでいるとはいえ，瓦質土器全体の把握までには至っていない。特に，搦鉢・

捏鉢は出土量が多い割には検討不十分であった器種であり，全体的な様相を把握するためにも，器種ごとの整理を行っていく必要があると思われる。このように，南部九州の瓦質土器は，不明瞭な点が多く，器種間の関係や搬入品／在地生産品の判断，瓦質土器の在り方など解決すべき課題が多いといえる。このことから，基礎的な整理が急務で，その重要な作業の一つとして，型式学的検討を踏まえて科学的手法，すなわち胎土分析を実施し，データの質・量ともに飛躍的に増大させることで，諸問題を解決する有効な情報を見出すことが可能になると考えられる。

### 3 対象試

本論で分析対象とした試料は、虎居城跡出土の瓦質土器である。虎居城跡は、鹿児島県さつま町宮之城に所在する中世後期の山城である。三方を川内川に囲まれた天然の要塞といえる立地であり、文献資料に記載されていた「松社城」「中の城」「塩の城」「小城」「おきたの城」と呼ばれる曲輪跡が、調査によって確認されている。調査では15～16世紀の遺構や遺物が多く発見されており、この時期が虎居城跡の主体といえる(鹿埋セ 2011)。特に、南部九州内において瓦質土器の出土量が比較的多い遺跡であり、器種・器形のバリエーションも豊富である(図1)。

虎居城跡の瓦質土器は、風炉や火鉢などのほか、播鉢、捏鉢、茶釜、羽釜などの多器種が揃っており、瓦質土器の在り方を示す上で良例であるといえる。風炉・火鉢は花文(菊花・蓮花・梅花・桜花文など)、草花文、菱文、格子文、雷文などスタンプ文をもつ。浅鉢形火鉢は口縁部が逆L字形、L字形、台形を呈するものがあり、口縁部は数条の沈線もしくは突帯をもつものがある。播鉢・捏鉢は、胴部がやや丸みを帯びるものと直線的なものがある。胎土も灰白色で精緻なものから、橙・赤橙色で白礫を多く含むものなど様々である。このような個体は他遺跡でも確認できるが、1遺跡内で様々なバリエーションが揃う例は少ない。したがって、虎居城跡出土の瓦質土器を検討することは、1遺跡内において瓦質土器を網羅的に把握することができる点で重要である。

大和系瓦質土器と在地系瓦質土器の関係や、城郭という性格から、喫茶文化を示す風炉や茶釜などステイタスシンボルとしての瓦質土器の在り方(e.g. 近江 1997; 佐藤 2001; 水澤 1999)、在地系土器の生産など、瓦質土器を取り巻く諸問題についても適切に迫りうる遺跡でさえある、といえよう。

以上の観点から、虎居城跡の資料を対象に蛍光X線分析を用いた胎土分析を実施し、非視覚的な情報としての胎土の化学特性等を把握し、有効な情報を得ることが重要であるといえよう。国内の他地域に目を向ければ、瓦質土器の胎土分析により一定の成果が得られている(菅原 1989; 鋤柄 1989; 白石 2008)が、一般的ないし精力的に行われているとはいえず、未発達な現状にある。胎土分析は生産地・生産単位の特定や流通の解明などに有効であり、何らかの意義ある貢献ができることは疑いない。少なくとも、以下ではそのための基礎的として、1つの遺跡の資料のデータを提示し、若干の考察を付加する。なお、データの質を高めるために、型式学的検討も併せて実施した。

#### 4 蛍光X線分析による胎土分析

##### (1) 試料

虎居城跡で出土した資料170点を分析とした(表1)。内訳は、瓦質土器109点(火鉢54点、風炉23点、火鉢もしくは風炉3点、播鉢・捏鉢23点、茶釜(羽釜)3点、壺2

点、焙烙1点、蒸籠1点)、土師器60点、陶器1点である。うち、報告書掲載遺物は33点である。いずれも15～16世紀代のものである。

瓦質土器のほか土師器を試料としたのは、在地生産品の可能性がより高い土師器を分析することで、在地の化学特性について検討するためである。先述のとおり、瓦質土器は搬入品としての大和系瓦質土器と在地生産品の両者の存在が推定されており、その差異をデータ上で適切に把握するためにも必須である。なお、黄橙色系のいわゆる土師質のものも瓦質土器に包括して扱った。

特に瓦質土器は、商品としての流通品という性格をもつとされるため、複数の産地から搬入された可能性も考慮し、虎居城跡出土品の中から存在する器種、器種内における多様なバリエーションを網羅するため、未報告分も含めてサンプリングを実施した。なお、これらは基本的にすべて形態・器種等がわかる個体である。

##### (2) 方法

分析に先立って、表面の微細痕跡(調整痕等)を含む各資料の肉眼的特徴の型式学的観察、写真撮影、肉眼及び実体顕微鏡による胎土観察を行ったほか、必要に応じて実測などを行った。

サンプリングにあたっては、接着剤や補修材を避けつつ、破断面や内面などから採取するよう努め、可能な限り形態を損なわないよう留意しつつ、適量の試料をサンプリングした。

分析は三辻利一の方法を基本とし(三辻 1983, 2013; 三辻ほか 2013)、以下の手順で実施した。適量の試料表面をミニターで研削し、付着物や汚染を除去した。試料は定温乾燥器を使用し、105℃で2時間乾燥させた。分析は粉末法で実施した。試料をタングステンカーバイド乳鉢で微粉砕し、リング法(内径20mm、厚さ5mmのPVCリング)で加圧成形(約130kN)した。装置は、鹿児島国際大学考古学実験室に設置されている波長分散型蛍光X線分析装置(リガク製ZSX100e)を使用し、Rh管球(管球出力3.0kW)、分光結晶RX25、LiF1、真空条件下で、X線出力(50kV、50mA)でNa、Mg、K、Ca、Ti、Fe、Rb、Srの8元素について各元素60秒間測定した。

ここでは、各元素のX線強度(Net強度)を、同時に測定した岩石標準試料JG-1のそれで割った標準化値を分析値として示す。分析値の読み取りは、実績あるK-Ca分布図、Rb-Sr分布図、両図の視察を基本とした。

#### 5 分析結果と考察

##### (1) K-Ca、Rb-Sr 分布図

分析値は、表1に示した。K-Ca、Rb-Sr両分布図を示す(図2・3)。

本遺跡では、概ねKが0.7以下、Caが0.7以下に分布

する。全体としてやや散漫にも見えるが一定のまとまりがあり、顕著な外れ値をとるものは少ない。微量元素の Rb-Sr ではやや右上がりのまとまりであり、全体としては Rb, Sr 間に正相関がみられる。やはり、Rb-Sr においても、ある程度の分散はあるが、概ね傾向が出ているといえよう。また、両図ともに土師器と瓦質土器の分布範囲には重複がみられることも注意される。このような重複域があることから、一見大差がないようであるが、仔細に見れば、K-Ca で右、あるいは右上に布置される瓦質土器のように、土師器の布置とずれるものが一定量含まれている。また、器種ごとのプロット図 (図 3) をみると、器種ごとに布置に多少の違いも看取される。

まず土師器に着目すると、K 値が 0.5 以下、Rb が 0.5 以下、Sr が 0.7 以下に布置されるまとまりがみられるもの (A 群) と Rb・Sr 値がより高いもの (B・C 群) がある。土師器 A 群は、全体の中で最多である。これらは、本遺跡に隣接する川内川下流域に位置する薩摩川内市上新田遺跡の弥生土器の分析結果 (富山・中園 2013) と比較すると、近似した布置を示すことから、川内川流域の地質を背景とした胎土の特性を示していると考えられる。なお、上新田遺跡で平安期の土師器坏とみられる試料も 1 点分析されており、やはり土師器 A 群に重なる。少なくとも、この A 群は在地生産品の可能性が高いと考える。

土師器 A 群と比べて、K, Rb 値がやや高めめの B 群は、赤褐色・緑色の金属溶解物が付着した土師器皿の埴輪転用品が多い。糸切り底で、形態的には土師器皿と同様だが、硬質で灰色を呈している。分析値は A 群とやや外れるが、B 群も A 群に近似していることから、形態的特徴などから判断すると在地産とも考えられる。しかしながら、A 群との重複がみられないため、在地産にしても A 群と素材の採取地が異なった、もしくは近接地からの搬入品とも考えられる。

C 群は、A 群とは分布範囲の重複が認められず、また、Rb-Sr 図では A 群よりも Rb・Sr 値が大きい方向にずれており、A 群と C 群の間には化学特性に差があることを示している。C 群は胎土が細かく、 $\phi 1\text{ mm}$  以下の黒色粒を多く含み、粉っぽく、硬質であり、A 群とは胎土の肉眼的特徴が異なる。また中には、A 群とは形態的に異なり、体部下位を横方向のケズリで面取りする坏・皿がある。よって、胎土や形態・技法が A 群とは異なるものが多く、C 群は時期差または搬入品の可能性も考えられる。

次に瓦質土器をみると、土師器と比べばらつきが大きく、値がやや外れる個体も散見される (図 2・3)。図 3 をみると、器種間で分布範囲に重複があるが、その分布範囲に微差がみられた。また土師器、特に A 群との分布範囲と重複するものが過半数あるいは一定数あるため、在地生産のものを少なくとも一定量含んでいる可能性が十分考えられ

る。その一方で、土師器の布置と外れる個体も一定数あることが確認された。

火鉢は Rb 値が 0.3~0.7 の範囲でまとまりがみられるが、Sr 値で広範囲に分布する。浅鉢形と深鉢形の比較では、浅鉢形のほうが Sr 値が高い個体が多い傾向にある。土師器との比較でも、分布範囲が重複するが全体的に重心がずれる。土師器と値が近似するものは土師質であることが多く、それらは在地生産品もしくは近接地での製作品と考えられる。値が大きく外れる個体は、大和系瓦質土器の特徴でもあるイブシやミガキがみられることから、搬入品である可能性が高い。

164 の深鉢形の火鉢は、口縁部下部に 2 条突帯を施し、口縁部と突帯間に密に斜格子文スタンプ、突帯間に格子スタンプを間隔的に施すが、胎土が赤橙色を呈し、小礫を多く含み粗く、他の個体とは異なる胎土をもつ。値をみても大きく外れており、搬入品の可能性が非常に高い。

風炉は、火鉢とある程度類似した布置を示すが Rb・Sr 値ともにやや低く、ずれが看取される。大和系瓦質土器の範疇に入る個体も、土師器との重複域に布置され、化学特性が近似するといえる。そのため、胎土分析からは在地産である可能性が考えられるが、胎土、色調、焼成・製作技法等を考慮すると、搬入である可能性を完全に排除するにはいたらない。そのため、今後、産地試料を含むさらなる分析が必要である。

掬鉢・播鉢は、Rb・Sr 値ともに Rb 値がやや高めめで、火鉢との重複が大きい。土師器とは多少重複はするが、特に A 群とは異なる分布を示す。Rb-Sr ともに 0.5 以下を示す 2 個体は、両者ともにぶい橙色を呈す土師質のもので、硬質で胎土に角閃石を多く含む。うち 1 個体は、5 条の播目をもち、時期差の可能性もある。Sr 値が 1.0 付近の個体は、赤橙色を呈し、胎土は粗く、石英や白色の小礫を多く含む特徴がある。

また、播鉢の中にはにぶい橙色系で、154, 158, 168, 214 のような体部下位に横方向のケズリがある個体があるも非常に類似しているうえ、土師器 A 群とも重なっている (図 1)。ケズリに加え、外面に指押さえ (指頭圧痕) を明瞭に残すものも多い。これらは、集中して布置されており、ため、在地産である可能性が考えられる。なお、このような様式的特徴をもつ個体は、すべて実見しているわけではないが流通品の可能性も考えられ、鹿児島県内でも上水流遺跡や楯城跡、上ノ城跡、荘貝塚、中郡遺跡群など、薩摩半島西部で多く確認されており、肥後や博多遺跡群でも出土例がある。今後このような様式的特徴をもつ個体には複数の産地を考える必要があるうえ、さらに微細な地域差等を抽出できるかなど、留意していく必要がある。

茶釜・羽釜については、布置位置は風炉や火鉢の一部と重複する。いずれもイブシでミガキをもつことから、同様

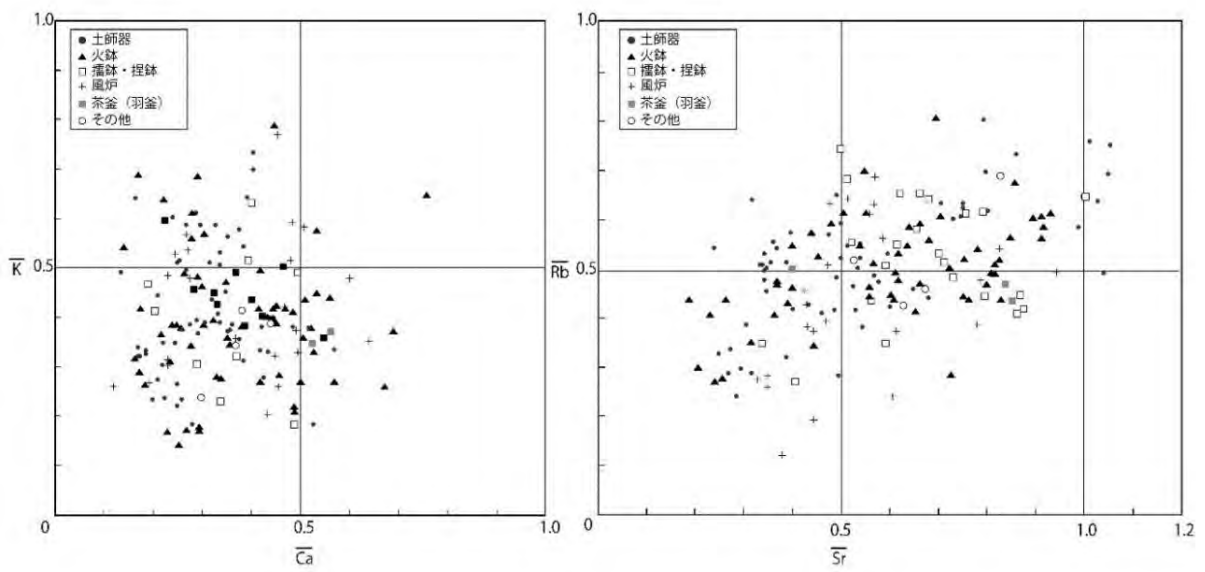


図2 分析結果 (K-Ca, Rb-Sr b分布図)

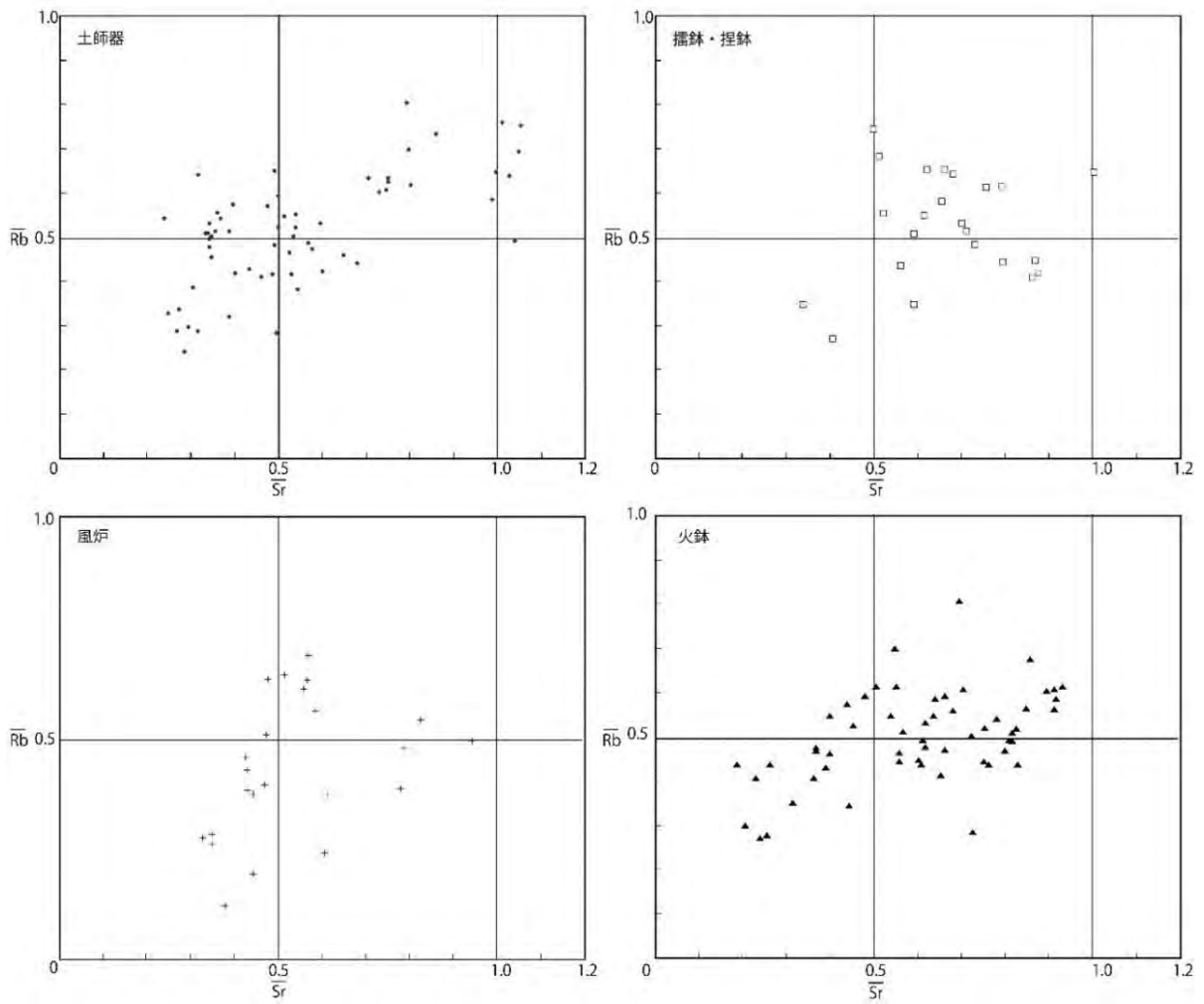


図3 分析結果：器種別 (Rb-Sr)

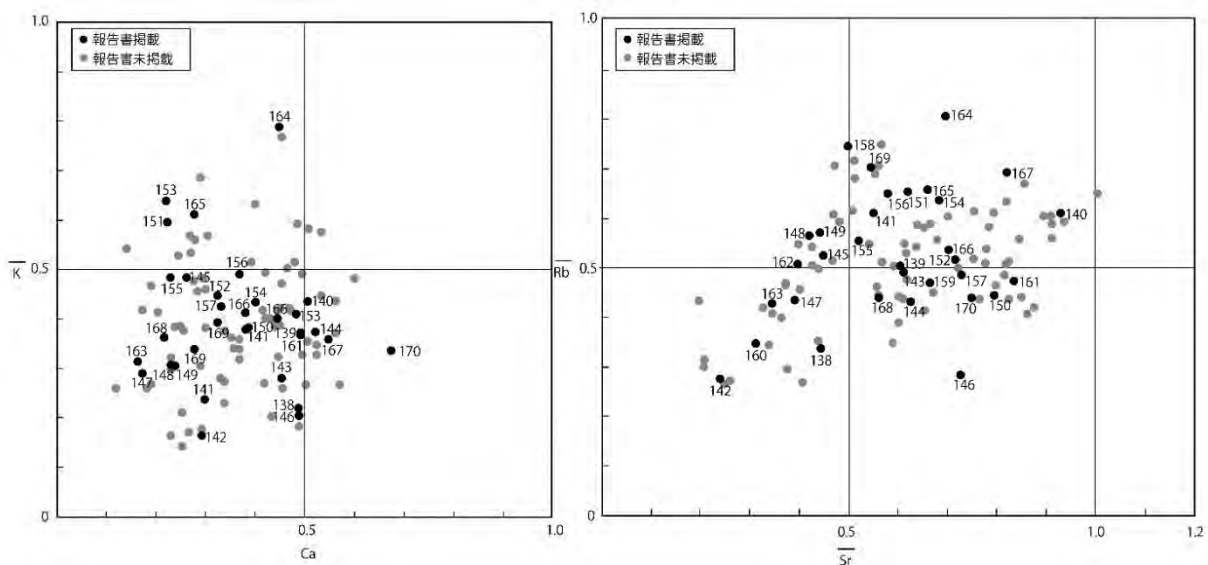


図4 分析結果（瓦質土器のみ）

な生産地で製作された可能性も考えられる。これらは、土師器A群とは重複しておらず、搬入品の可能性が考えられる。

深鉢形の147も163と近似する。147はイブシはないが、両者とも胎土が精緻で灰白色を呈している点で類似がみられる。ただし、イブシ工程を含めた焼成法が異なることから、積極的に同一産地とは言い難く、今後このような事例を詳細に検討する必要がある。

139の火鉢・風炉の脚部と143の底面に墨書と穿孔をもつ火鉢転用品も分析値が近似している。このように瓦質と土師質のもので、胎土がかなり近似する例がみられる。このような例について、現段階で同一産地とは安易には言い難いが、その可能性は十分考えておく必要がある。

以上のように、異なる器種、異なる様式的特徴をもつ個体間で分析値が近似する例があることは興味深い。今後、他遺跡・他地域の瓦質土器の胎土分析を行い、遺跡間、地域間の比較検討を行う必要がある。

以上の結果を踏まえると、土師器と瓦質土器では、化学特性が類似するものが意外に多かった。それらは在地産の可能性が考えられる。ただし、その中には、調達された素材の採取箇所や層位などによる微差や、胎土調整時の混合比率等によるばらつきも含まれているとみられる。

土師器は、一定のまとまり（A群）の範疇に入るものは、少なくとも在地生産品と考えられる。そこから外れる個体も散見されたが、これらは搬入品・時期差の可能性があるので、土師器＝すべて在地産、という考えを再考する必要がある。

瓦質土器は、土師器より分析値のばらつきが大きい傾向がある。このばらつきは、上述の土師器の在地生産品内での微差と同様、在地生産品自体のもつ変異を含みつつ、それに加えて複数の他所の生産地から持ち込まれた可能性

が考えられる。ここでの一つの成果としては、大和系瓦質土器とされるものに在地産のものが含まれている可能性を指摘できたことである。これは、技法を含む外見的特徴だけでの歴史復元には一定の限界があり、胎土と併せて考えることに大きな意義があることを教えている。少なくとも、中世土器に関する鑑識眼を検証し、さらに鍛えていくという意味からも、胎土分析を実施していく必要があることは確かといえよう。

また、瓦質土器の中には、大和系瓦質土器とも在地系のものとも異なる技法（体部下位のケズリや、内面に横位のハケメなど）や胎土をもつ個体も多い。それらについては、複数地域からの搬入のほか、製作者の移動や技術交流など複雑な要因が絡んでいる可能性を指摘しておきたい。

## 6 おわりに

本論での分析結果では、複数遺跡での比較ができなかったため、在地産瓦質土器の化学特性の明確な定義には至らず、土師器の分析値を援用するしかなかった。しかしながら、胎土分析の重要性の一端を示すことができ、今後につながる基礎データは提示できたと考えている。また、在地製作という解釈が常識的ではある土師器の中にも搬入品が一定量含まれる可能性も指摘できた。該期の南部九州の生産・流通システムについては今後さらに検討し、解明に取り組んでいく必要がある。

以上、中世山城である虎居城跡の胎土分析を実施したが、1つの城館跡の瓦質土器・土師器を可能な限り網羅的に分析した。本論で使用した分析方法は再現性の高さと迅速性に特徴があり、それを活かして多数のデータを提示したことにも意義があると考えられる。中世の生産・流通は従来の認識通り重要な課題であるため、今後さらに計画的な分析を

高密度で実施し、積極的にデータを充実させることが重要である。

#### 【謝辞】

執筆にあたり、鹿児島県立埋蔵文化財センターならびに関明恵氏、鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター中村和美氏をはじめとする諸氏の深いご理解を賜り、様々な配慮とご教示をいただいた。また、胎土分析の実施にあたり、鹿児島国際大学の中園聡先生にはデータ解析等について多大なご教示をいただいた。分析には新屋敷久美子氏、平川ひろみ氏の協力を得た。深く感謝いたします。

#### 【文献】

出水市教育委員会 1979『荘貝塚』出水市文化財調査報告書 1  
岩元康成 2011「鹿児島における中世の遺跡間の遺物組成」『鹿児島考古』42, 鹿児島県考古学会  
岩元康成 2012a「鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相—川内平野の資料を中心に—」『縄文の森から』5, 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
岩元康成 2012b「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24, 日本中世土器研究会  
上床 真 2004「鹿児島県における中世煮炊具の様相」『縄文の森から』2, 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
近江俊秀 1997「広域に流通した中世大和の土器—大和・大和系瓦質土器の分布について—」『中近世土器の基礎研究』12, 日本中世土器研究会  
鹿児島県加世田市教育委員会 1980『上ノ城遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)  
鹿児島県教育委員会 1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2009『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(136)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2010『榕城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『虎居城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(162)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)  
(公財) 鹿児島県埋蔵文化財調査センター・鹿児島県教育三辻利一 1983『古代土器の産地推定法』ニュー・サイエンス社  
三辻利一 2013『新しい土器の考古学』同成社  
三辻利一・中園 聡・平川ひろみ 2013「土器遺物の考古学的研究」『分析化学』62 (2), 日本分析化学会

委員会 2014『中郡遺跡群』(公財) 鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 1  
佐藤浩司 2006「スタンプ文を有する瓦質土器の展開—旧豊前国大興寺の荘善具・調度品として」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』, 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会  
佐藤亜聖 2001「南九州における瓦質土器の特質—鹿児島県出土資料を通じて—」『鹿児島考古』35, 鹿児島県考古学会  
佐藤亜聖 2006「瓦質土器の需要」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』, 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会  
佐藤亜聖 2011「中世後期の流通と瓦質土器」『考古学と室町・戦国期の流通—瀬戸内海とアジアを結ぶ道—』, 高志書院  
菅原正明 1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19, 国立歴史民俗博物館.  
鋤柄俊夫 1989「大阪府南部の瓦質土器生産 (2)」『中近世土器の基礎研究』15, 日本中世土器研究会  
瀬戸哲也 2008「南の境界・琉球の瓦質土器」『第27回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着—瓦質土器を考える(後編)—』, 日本中世土器研究会  
瀬戸哲也 2004a「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会  
瀬戸哲也 2004b「本土系瓦質土器の産地についての補論—北部九州の瓦質土器と比較して—」『紀要沖縄埋文研究』2, 沖縄県立埋蔵文化財センター  
瀬戸哲也 2009「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22, 日本中世土器研究会  
白石 純 2012「沖手遺跡出土瓦質土器の胎土分析」『自然科学研究所研究報告』岡山理科大学  
徳永貞徳 1990「肥前における中世後期の在り土器」『中近世土器の基礎研究』6, 日本中世土器研究会.  
富山孝一・中園 聡 2013「鹿児島県薩摩川内市上新田遺跡出土弥生土器の蛍光 X 線分析」『縄文の森から』6, 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
水澤幸一 1999「瓦器, その城館的なるもの」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』9, 帝京大学山梨文化財研究所  
山本信榮 (1990)「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』6, 日本中世土器研究会  
山本信夫・山本信榮 (1997)「中世食器の地域性 10—九州・南西諸島—」『国立歴史民俗博物館研究報告』71, 国立歴史民俗博物館

表1 分析データ一覧

分析番号	No.	報告書No	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
IUK15-0086	1	未掲載	瓦質土器	風炉	0.564	0.267	1.29	0.713	0.511	0.321	0.646	3.31	
IUK15-0087	2	未掲載	瓦質土器	風炉	0.257	0.455	2.60	0.353	0.439	0.157	0.406	3.02	
IUK15-0088	3	未掲載	瓦質土器	風炉	0.320	0.448	2.52	0.497	0.440	0.142	0.443	2.77	
IUK15-0089	4	未掲載	瓦質土器	風炉	0.327	0.493	2.55	0.514	0.466	0.160	0.479	2.93	
IUK15-0090	5	未掲載	瓦質土器	風炉	0.479	0.275	1.16	0.689	0.554	0.307	0.651	3.29	
IUK15-0091	6	未掲載	瓦質土器	風炉	0.535	0.270	3.47	0.605	0.470	0.217	1.727	4.69	
IUK15-0092	7	未掲載	瓦質土器	風炉	0.590	0.482	1.88	0.581	0.784	0.389	0.794	2.98	
IUK15-0093	8	未掲載	瓦質土器	風炉	0.349	0.641	2.53	0.391	0.602	0.372	0.510	2.50	
IUK15-0094	9	未掲載	瓦質土器	風炉	0.201	0.434	3.70	0.296	0.376	0.141	0.588	4.49	
IUK15-0095	10	未掲載	瓦質土器	風炉	0.357	0.367	1.23	0.705	0.563	0.347	0.431	2.29	
IUK15-0096	11	未掲載	瓦質土器	風炉	0.579	0.509	1.83	0.631	0.821	0.414	0.815	2.89	
IUK15-0097	12	未掲載	瓦質土器	風炉	0.307	0.231	1.62	0.506	0.427	0.258	0.428	2.85	
IUK15-0098	13	未掲載	瓦質土器	風炉	0.298	0.229	1.55	0.542	0.425	0.265	0.397	2.78	
IUK15-0099	14	未掲載	瓦質土器	風炉	0.256	0.118	2.29	0.418	0.326	0.085	0.612	4.35	
IUK15-0100	15	未掲載	瓦質土器	風炉	0.264	0.192	2.22	0.408	0.345	0.086	0.630	4.42	
IUK15-0101	16	未掲載	瓦質土器	風炉	0.511	0.479	0.98	0.749	0.567	0.200	0.693	2.45	
IUK15-0102	17	未掲載	瓦質土器	風炉	0.767	0.452	2.86	0.706	0.473	0.327	1.733	4.65	
IUK15-0103	18	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.465	0.348	1.59	0.434	0.827	0.334	0.699	2.84	浅鉢形
IUK15-0104	19	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.681	0.288	2.21	0.499	0.719	0.383	0.643	2.88	浅鉢形
IUK15-0105	20	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.685	0.168	1.90	0.591	0.481	0.190	1.344	2.75	浅鉢形
IUK15-0106	21	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.571	0.532	1.83	0.669	0.858	0.397	0.802	3.03	浅鉢形
IUK15-0107	22	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.446	0.533	1.85	0.557	0.847	0.389	0.830	2.96	浅鉢形
IUK15-0108	23	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.164	0.291	3.45	0.267	0.248	0.094	0.436	5.45	浅鉢形
IUK15-0109	24	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.641	0.756	1.86	0.605	0.702	0.375	0.647	2.48	浅鉢形
IUK15-0110	25	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.265	0.497	1.01	0.446	0.562	0.221	0.598	2.47	深鉢形
IUK15-0111	26	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.478	0.288	1.80	0.585	0.667	0.387	1.022	3.63	深鉢形
IUK15-0112	27	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.461	0.296	1.86	0.556	0.680	0.363	0.982	3.69	深鉢形
IUK15-0113	28	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.564	0.301	2.13	0.540	0.636	0.313	0.832	3.46	深鉢形
IUK15-0114	29	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.381	0.238	1.86	0.613	0.509	0.248	0.612	3.66	深鉢形
IUK15-0115	30	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.414	0.466	1.95	0.511	0.825	0.379	0.694	2.91	深鉢形
IUK15-0116	31	未掲載	瓦質土器	風炉?	0.476	0.601	3.28	0.507	0.776	0.376	1.743	2.90	
IUK15-0117	32	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.380	0.301	2.65	0.546	0.399	0.185	0.958	3.93	深鉢形
IUK15-0118	33	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.275	0.330	2.64	0.466	0.372	0.139	0.664	4.00	深鉢形
IUK15-0119	34	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.138	0.253	4.36	0.301	0.208	0.064	0.412	6.11	深鉢形
IUK15-0120	35	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.348	0.257	1.88	0.546	0.543	0.252	0.758	3.71	深鉢形
IUK15-0121	36	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.391	0.440	1.94	0.486	0.817	0.357	0.646	2.91	深鉢形
IUK15-0122	37	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.253	0.670	1.45	0.412	0.654	0.265	0.641	3.14	深鉢形
IUK15-0123	38	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.164	0.229	4.30	0.311	0.207	0.079	0.464	6.48	深鉢形
IUK15-0124	39	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.274	0.336	2.54	0.470	0.371	0.133	0.638	3.90	浅鉢形
IUK15-0125	40	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.353	0.348	1.86	0.434	0.764	0.272	1.018	4.20	深鉢形
IUK15-0126	41	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.553	0.278	2.19	0.530	0.617	0.284	0.861	3.54	深鉢形
IUK15-0127	42	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.367	0.690	2.59	0.437	0.612	0.288	0.569	2.44	深鉢形
IUK15-0128	43	未掲載	瓦質土器	風炉	0.417	0.467	1.81	0.592	0.938	0.425	0.856	2.71	
IUK15-0129	44	未掲載	瓦質土器	火鉢 or 風炉	0.380	0.247	2.29	0.462	0.558	0.250	0.493	3.90	深鉢形?

分析番号	No.	報告書No	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
IUK15-0130	45	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.536	0.137	3.95	0.433	0.195	0.076	0.788	3.81	深鉢形?
IUK15-0131	46	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.492	0.415	2.68	0.583	0.641	0.258	1.567	4.73	深鉢形
IUK15-0132	47	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.344	0.354	1.78	0.466	0.800	0.260	0.947	4.06	深鉢形
IUK15-0133	48	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.326	0.527	1.89	0.538	0.779	0.348	0.746	3.16	深鉢形
IUK15-0134	49	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.413	0.171	2.13	0.457	0.401	0.213	0.660	4.18	深鉢形
IUK15-0135	50	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.395	0.431	1.97	0.488	0.815	0.356	0.628	2.94	深鉢形
IUK15-0136	51	未掲載	瓦質土器	壺?	0.343	0.362	1.93	0.453	0.671	0.276	0.920	3.95	
IUK15-0137	52	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.333	0.275	1.97	0.476	0.619	0.262	0.671	3.79	深鉢形
IUK15-0138	53	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.438	0.426	1.85	0.601	0.909	0.432	0.863	2.80	浅鉢形
IUK15-0139	54	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.265	0.569	1.12	0.441	0.605	0.226	0.560	2.54	深鉢形?
IUK15-0140	55	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.265	0.416	1.09	0.509	0.570	0.220	0.643	2.52	深鉢形?
IUK15-0141	56	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.260	0.181	2.24	0.400	0.363	0.090	0.635	4.41	浅鉢形?
IUK15-0142	57	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.432	0.561	1.90	0.602	0.896	0.379	0.921	2.91	浅鉢形?
IUK15-0143	58	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.418	0.450	1.84	0.589	0.915	0.428	0.932	2.80	浅鉢形
IUK15-0144	59	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.165	0.268	3.52	0.272	0.255	0.105	0.425	5.47	深鉢形
IUK15-0145	60	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.411	0.413	1.85	0.601	0.897	0.432	0.871	2.81	浅鉢形?
IUK15-0146	61	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.414	0.441	1.83	0.558	0.912	0.431	0.822	2.74	浅鉢形?
IUK15-0147	62	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.356	0.505	1.99	0.517	0.751	0.331	0.816	2.92	脚部(方形)
IUK15-0148	63	未掲載	瓦質土器	火鉢	0.394	0.444	1.95	0.505	0.819	0.386	0.760	2.96	脚部
IUK15-0149	64	未掲載	瓦質土器	捏鉢	0.503	0.468	2.24	0.611	0.756	0.279	1.593	4.73	
IUK15-0150	65	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.489	0.491	2.18	0.580	0.655	0.420	1.126	3.88	
IUK15-0151	66	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.305	0.290	2.72	0.346	0.591	0.171	1.051	4.02	
IUK15-0152	67	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.627	0.402	1.73	0.612	0.793	0.198	0.896	3.83	
IUK15-0153	68	未掲載	瓦質土器	捏鉢	0.227	0.335	2.81	0.346	0.340	0.145	0.583	3.66	
IUK15-0154	69	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.323	0.371	1.75	0.418	0.875	0.268	0.605	3.83	
IUK15-0155	70	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.404	0.420	1.88	0.406	0.863	0.409	0.832	2.69	
IUK15-0156	71	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.453	0.278	2.08	0.548	0.615	0.304	1.089	3.14	
IUK15-0157	72	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.516	0.391	1.86	0.646	1.002	0.883	1.028	2.83	
IUK15-0158	73	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.181	0.485	3.15	0.269	0.407	0.171	0.672	4.44	
IUK15-0159	74	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.465	0.191	1.70	0.682	0.514	0.212	1.121	2.93	
IUK15-0160	75	未掲載	瓦質土器	播鉢	0.412	0.199	1.96	0.504	0.593	0.228	0.773	3.26	
IUK15-0161	76	未掲載	瓦質土器	茶釜	0.370	0.558	1.87	0.439	0.851	0.394	0.636	3.01	
IUK15-0162	77	未掲載	土師器	皿	0.585	0.327	2.20	0.626	0.751	0.665	1.266	2.43	
IUK15-0163	78	未掲載	土師器	皿	0.232	0.198	2.58	0.287	0.264	0.152	0.522	3.97	
IUK15-0164	79	未掲載	土師器	皿	0.576	0.375	1.89	0.732	0.860	0.569	0.873	2.40	
IUK15-0165	80	未掲載	土師器	皿	0.732	0.402	1.91	0.758	1.012	1.081	1.768	2.27	
IUK15-0166	81	未掲載	土師器	坏	0.389	0.334	1.70	0.519	0.498	0.266	0.673	3.04	
IUK15-0167	82	未掲載	土師器	皿	0.372	0.258	1.33	0.571	0.474	0.329	0.550	2.54	
IUK15-0168	83	未掲載	土師器	坏	0.505	0.335	1.74	0.752	1.056	0.511	0.918	2.53	
IUK15-0169	84	未掲載	土師器	皿	0.323	0.173	1.73	0.498	0.341	0.207	0.403	2.98	
IUK15-0170	85	未掲載	土師器	皿	0.600	0.237	2.42	0.574	0.395	0.143	0.549	3.42	
IUK15-0171	86	未掲載	土師器	坏	0.181	0.278	3.65	0.241	0.284	0.141	0.367	4.11	
IUK15-0172	87	未掲載	土師器	皿	0.329	0.415	1.80	0.459	0.648	0.353	0.575	3.08	
IUK15-0173	88	未掲載	土師器	皿	0.320	0.167	1.70	0.508	0.332	0.198	0.429	2.98	
IUK15-0174	89	未掲載	土師器	皿	0.562	0.350	2.16	0.583	0.989	0.551	1.009	2.45	
IUK15-0175	90	未掲載	土師器	坏	0.333	0.567	2.45	0.440	0.680	0.366	0.746	3.26	

分析番号	No.	報告書No	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
IUK15-0176	91	未掲載	土師器	皿	0.269	0.207	3.11	0.285	0.312	0.202	0.752	3.92	
IUK15-0177	92	未掲載	土師器	皿	0.367	0.290	1.33	0.548	0.512	0.341	0.489	2.45	
IUK15-0178	93	未掲載	土師器	皿	0.514	0.251	1.73	0.491	1.043	0.571	0.690	2.64	
IUK15-0179	94	未掲載	土師器	皿	0.541	0.382	1.90	0.692	1.053	0.521	1.029	2.47	
IUK15-0180	95	未掲載	土師器	皿	0.389	0.303	2.38	0.552	0.538	0.347	0.649	2.31	
IUK15-0181	96	未掲載	土師器	皿	0.317	0.172	1.68	0.452	0.345	0.210	0.380	2.87	
IUK15-0182	97	未掲載	土師器	皿	0.345	0.219	1.82	0.513	0.352	0.224	0.478	2.96	
IUK15-0183	98	未掲載	土師器	皿	0.331	0.180	1.72	0.531	0.342	0.208	0.435	2.98	
IUK15-0184	99	未掲載	土師器	皿	0.231	0.256	2.87	0.385	0.304	0.163	0.427	3.61	
IUK15-0185	100	未掲載	土師器	皿	0.392	0.289	2.40	0.592	0.496	0.317	0.664	2.39	
IUK15-0186	101	未掲載	土師器	坏	0.530	0.336	1.95	0.636	1.026	0.510	0.838	2.47	
IUK15-0187	102	未掲載	土師器	皿	0.265	0.246	2.45	0.479	0.341	0.196	0.423	3.34	
IUK15-0188	103	未掲載	土師器	皿	0.218	0.247	3.67	0.329	0.247	0.135	0.428	3.70	
IUK15-0189	104	未掲載	土師器	皿	0.382	0.357	1.83	0.523	0.538	0.298	0.456	2.98	赤色顔料
IUK15-0190	105	未掲載	土師器	皿	0.309	0.382	2.08	0.417	0.399	0.287	0.357	2.26	
IUK15-0191	106	未掲載	土師器	坏	0.490	0.134	3.03	0.542	0.239	0.131	0.605	3.67	
IUK15-0192	107	未掲載	土師器	皿	0.182	0.524	2.21	0.282	0.494	0.243	0.512	3.46	
IUK15-0193	108	未掲載	土師器	坏	0.378	0.420	2.01	0.466	0.525	0.328	0.743	3.34	
IUK15-0194	109	未掲載	土師器	皿?	0.696	0.400	1.64	0.650	0.492	0.271	0.522	1.92	
IUK15-0195	110	未掲載	土師器	皿	0.494	0.264	2.53	0.531	0.595	0.503	0.857	2.63	
IUK15-0196	111	未掲載	土師器	皿	0.406	0.330	2.03	0.483	0.492	0.384	0.510	2.99	
IUK15-0197	112	未掲載	土師器	皿	0.382	0.274	2.47	0.499	0.534	0.283	0.471	2.52	
IUK15-0198	113	未掲載	土師器	皿	0.234	0.222	2.40	0.295	0.294	0.179	0.599	3.92	
IUK15-0199	114	未掲載	土師器	皿	0.444	0.207	2.43	0.542	0.368	0.262	0.694	2.74	
IUK15-0200	115	未掲載	土師器	坏	0.583	0.295	2.54	0.697	0.799	0.413	1.557	2.49	
IUK15-0201	116	未掲載	土師器	皿	0.434	0.318	1.94	0.602	0.729	0.444	0.779	2.35	
IUK15-0202	117	未掲載	土師器	皿	0.327	0.431	4.20	0.318	0.388	0.272	0.899	2.83	
IUK15-0203	118	未掲載	土師器	皿	0.381	0.385	1.77	0.416	0.485	0.401	0.602	2.65	
IUK15-0204	119	未掲載	土師器	皿	0.584	0.264	2.21	0.804	0.793	0.459	1.517	2.63	
IUK15-0205	120	未掲載	土師器	皿	0.344	0.243	1.49	0.515	0.383	0.285	0.495	2.58	
IUK15-0206	121	未掲載	土師器	皿	0.356	0.375	2.44	0.382	0.544	0.549	0.710	2.97	
IUK15-0207	122	未掲載	土師器	坏	0.275	0.424	1.68	0.415	0.529	0.262	0.414	3.80	
IUK15-0208	123	未掲載	土師器	坏	0.319	0.168	1.70	0.510	0.337	0.189	0.428	2.95	
IUK15-0209	124	未掲載	土師器	坏	0.228	0.253	3.60	0.335	0.270	0.140	0.412	3.92	
IUK15-0210	125	未掲載	土師器	皿	0.338	0.167	1.56	0.554	0.359	0.207	0.449	2.83	
IUK15-0211	126	未掲載	土師器	皿	0.372	0.350	2.15	0.412	0.459	0.412	0.651	2.48	
IUK15-0212	127	未掲載	土師器	皿	0.303	0.218	2.57	0.425	0.433	0.118	0.630	2.52	
IUK15-0213	128	未掲載	土師器	皿	0.509	0.313	2.16	0.649	0.998	0.446	0.892	2.53	
IUK15-0214	129	未掲載	土師器	皿	0.373	0.355	2.21	0.424	0.600	0.391	0.652	2.96	
IUK15-0215	130	未掲載	土師器	皿	0.378	0.482	1.81	0.487	0.567	0.470	0.610	2.79	
IUK15-0216	131	未掲載	土師器	皿	0.450	0.345	1.93	0.607	0.746	0.530	0.804	2.38	
IUK15-0217	132	未掲載	土師器	皿	0.376	0.514	1.98	0.475	0.578	0.507	0.564	2.90	
IUK15-0218	133	未掲載	土師器	皿	0.510	0.245	1.61	0.633	0.749	0.470	0.786	2.18	
IUK15-0219	134	未掲載	土師器	皿	0.609	0.285	2.35	0.632	0.707	0.591	1.315	2.64	
IUK15-0220	135	未掲載	陶器	壺?	0.389	0.442	2.16	0.514	0.525	0.454	0.621	2.90	

分析番号	No.	報告書No	種別	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	Mg	Ti	備考
IUK15-0221	136	未掲載	土師器	坏	0.641	0.390	2.39	0.618	0.802	0.679	1.357	2.27	
IUK15-0222	137	未掲載	土師器	皿	0.637	0.161	1.57	0.641	0.314	0.208	0.476	2.33	
IUK15-0223	138	263	瓦質土器	火鉢 or 風炉	0.214	0.485	3.61	0.338	0.445	0.160	0.401	2.67	脚部
IUK15-0224	139	214	瓦質土器	風炉	0.371	0.489	0.93	0.497	0.610	0.235	0.620	2.51	
IUK15-0225	140	211	瓦質土器	火鉢?	0.432	0.511	1.83	0.608	0.930	0.364	0.987	2.93	浅鉢形
IUK15-0226	141	212	瓦質土器	火鉢 or 風炉	0.377	0.378	0.94	0.609	0.553	0.293	0.747	2.62	脚部
IUK15-0227	142	209	瓦質土器	火鉢	0.169	0.291	3.63	0.273	0.242	0.097	0.430	5.64	浅鉢形
IUK15-0228	143	210	瓦質土器	火鉢	0.277	0.456	0.83	0.491	0.614	0.212	0.610	2.47	深鉢形
IUK15-0229	144	216	瓦質土器	蒸籠	0.376	0.522	2.36	0.429	0.628	0.394	0.887	2.62	
IUK15-0230	145	298	瓦質土器	火鉢	0.484	0.262	3.00	0.523	0.452	0.185	1.209	4.79	深鉢形
IUK15-0231	146	213	瓦質土器	火鉢轉用品	0.207	0.487	1.03	0.280	0.728	0.265	0.424	3.76	墨書「宗殊」
IUK15-0232	147	499	瓦質土器	火鉢	0.288	0.169	2.24	0.432	0.392	0.152	0.587	4.26	深鉢形
IUK15-0233	148	591	瓦質土器	風炉	0.311	0.230	1.55	0.564	0.422	0.252	0.411	2.93	
IUK15-0234	149	498	瓦質土器	火鉢	0.308	0.231	1.50	0.568	0.443	0.266	0.416	2.80	浅鉢形
IUK15-0235	150	140	瓦質土器	播鉢	0.382	0.383	1.87	0.441	0.796	0.319	1.017	2.95	
IUK15-0236	151	590	瓦質土器	播鉢	0.593	0.224	2.01	0.651	0.622	0.365	0.964	3.31	
IUK15-0237	152	207	瓦質土器	播鉢	0.449	0.320	1.70	0.515	0.715	0.325	1.042	3.12	
IUK15-0238	153	205	瓦質土器	播鉢	0.395	0.441	1.76	0.446	0.868	0.390	0.894	2.77	
IUK15-0239	154	204	瓦質土器	播鉢	0.434	0.400	1.70	0.641	0.680	0.292	1.157	3.02	
IUK15-0240	155	138	瓦質土器	播鉢	0.482	0.228	2.12	0.551	0.523	0.234	1.027	3.37	
IUK15-0241	156	142	瓦質土器	風炉	0.491	0.368	1.43	0.648	0.581	0.311	0.727	2.83	
IUK15-0242	157	139	瓦質土器	播鉢	0.424	0.328	1.80	0.483	0.731	0.352	0.922	3.02	
IUK15-0243	158	206	瓦質土器	播鉢	0.636	0.219	1.53	0.743	0.499	0.340	0.439	1.66	
IUK15-0244	159	137	瓦質土器	小型鉢?	0.406	0.481	1.79	0.469	0.666	0.386	0.520	2.29	浅鉢形
IUK15-0245	160	141	瓦質土器	火鉢	0.238	0.296	3.08	0.347	0.315	0.161	0.535	4.88	浅鉢形
IUK15-0246	161	733	瓦質土器	茶釜	0.353	0.527	1.88	0.471	0.836	0.368	0.763	3.06	
IUK15-0247	162	708	瓦質土器	茶釜	0.526	0.246	3.55	0.505	0.400	0.278	1.052	4.13	
IUK15-0248	163	650	瓦質土器	風炉	0.313	0.163	2.54	0.426	0.348	0.159	0.620	4.27	
IUK15-0249	164	715	瓦質土器	火鉢	0.789	0.447	2.59	0.804	0.697	0.343	1.756	4.37	深鉢形
IUK15-0250	165	651	瓦質土器	播鉢	0.609	0.278	2.33	0.651	0.660	0.435	1.097	3.26	
IUK15-0251	166	729	瓦質土器	播鉢	0.414	0.384	1.82	0.531	0.703	0.354	0.891	3.58	
IUK15-0252	167	734	瓦質土器	焙烙	0.357	0.546	1.87	0.689	0.825	0.357	0.799	3.10	
IUK15-0253	168	730	瓦質土器	播鉢	0.361	0.216	1.92	0.435	0.562	0.186	1.066	3.79	
IUK15-0254	169	731	瓦質土器	火鉢	0.391	0.320	1.26	0.700	0.550	0.299	0.613	2.65	浅鉢形
IUK15-0255	170	769	瓦質土器	火鉢	0.334	0.670	1.68	0.438	0.753	0.353	0.723	2.99	浅鉢形



# 植物質資料からみた南部九州

—天神段遺跡を中心に—

深川 祐子

Ancient South Kyusyu considered from vegetable matters with focus on Tenjindan site

Fukagawa Yuko

## 要旨

近年、ウォーター・フローテーション法や圧痕レプリカ法等の手法により、栽培植物や貯蔵食物害虫などの資料が蓄積され、関連する各研究が盛んに行われている。当センターにおいても、同様に資料が蓄積されつつある。しかしながら、これまで当センターにおいては定量的な分析は行われておらず、資料の報告もまばらである。

今回、天神段遺跡の遺構内埋土についてウォーター・フローテーションを行ったところ、イネやオオムギ等の資料を得ることができた。そこで、本稿では、天神段遺跡の事例研究から、まず、実際に発掘調査中に行ったウォーター・フローテーションの基本的な流れを紹介する。次に、これにより得た資料を紹介し、同時期の南部九州における資料との比較を行い、植物質資料からの天神段遺跡の様相を明らかにした。

**キーワード** ウォーター・フローテーション 炭化種子 イネ オオムギ

## 1 はじめに

近年、圧痕レプリカ法やウォーター・フローテーション法（註1）の普及により、人間が利用した植物資源に関する考古資料が蓄積されつつある。具体的には、イネ・アワ・キビ等の栽培植物や、イチイガシ等の利用植物の種実、コクゾウムシ等の貯蔵食物害虫などである。これらは、土器圧痕や炭化物、あるいは低湿地での動植物遺存体として発見され、食料生産や食資源の利用に関する研究に大きく寄与している。

筆者は、平成24年度の業務において、天神段遺跡の発掘調査に従事した。以前から植物利用の研究に関心を持っていた筆者は、採取した遺構内土壌のフローテーションを行う機会を得て、植物質資料を回収した。本稿では、まず、実際に行ったフローテーションの方法と、回収した資料を紹介する。次に、その結果と、同時期の南部九州の様相とを比較し、植物質資料からみた天神段遺跡の様相を検討する。

## 2 利用植物の研究史

植物質資料研究の端緒となったのは明治時代後半である。蒔田鎗次郎氏が弥生時代の遺構や土器に伴って穀物や炭化米が存在することを述べた（蒔田 1897）。しかしながらこの時点では、穀物の存在を示すのみにとどまっている。また、1925年には山内清男氏が宮城県柞形遺跡から発見された土器圧痕に注目し、印象材を用いて圧痕を復元する事の価値について指摘している（山内 1925）。これが土器圧痕についての本格的な研究の最も初期の研究である。その後、1970年代にウォーターセパレーションやフローテーション等の自然科学的研究が進展したことによって各地で植物質資料の蓄積、研究が進ん

だ。

近年では、自然科学分析だけではなく土器圧痕にシリコン樹脂を流し込んでレプリカを作成し、走査型電子顕微鏡で観察する圧痕レプリカ法（註2）も普及し、北海道、東北、中部、関東、九州などの各地域での植物利用に関する資料の蓄積や研究の発展がみられる。

九州では、1972年に小谷凱宣氏が九州地方で初めてのフローテーション法を導入し、熊本市上ノ原遺跡において縄文時代後期のイネとオオムギを検出した（小谷 1972）。しかし、当時はこのような手法が行われることは珍しく、ほとんどがコンタミネーションの可能性を含め、発掘調査中の偶然の発見によるものであった。2000年代に入り山崎純男氏が圧痕レプリカ法を導入したこと（山崎 2005）や、小畑弘己氏が東アジアの種実資料や、レプリカ資料から植物利用の検討を行ったこと（小畑ほか 2007）を契機に資料の蓄積、研究が盛んになった。

鹿児島県内における植物質資料研究の発端は、「鹿児島県高橋貝塚発掘報告」の中で、河口貞徳氏によって、高橋式土器についての靱痕の存在が報告されたことに始まる（河口 1963）。その後は入来遺跡、花熟里遺跡においてイチイガシ、イネの発見が報告された（河口 1976、河口・出口 1971）。

県内において最初に定量的な分析が行われたのは、加栗山遺跡の報告である。調査においてフローテーションを実施し（千浦 1981）、これまでの偶然の発見による資料の回収ではなく、植物質資料を自主的に回収しようと試みた。

次いで、長田遺跡において古墳時代の堅穴住居跡の報告がある（高宮 2003）。フローテーションの結果、イネ

やアワの炭化種実を回収した。

以降は積極的に自然科学分析が行われるようになり、フローテーション法や圧痕レプリカ法に加えて、これまでに種実同定や樹種同定、植物珪酸体分析など様々な分析が取り入れられている。

### 3 フローテーション法の概念と重要性

前述したように、近年では全国的な動向と同様に、圧痕レプリカ法やフローテーション等の研究手法が確立され、植物質資料が蓄積されつつある。その中で、フローテーション法は、方法さえ心得ていれば誰でも行うことができ、発掘調査中に微細な遺物を回収する有効な手段の一つである。ここでは、まず、フローテーションの一連の手順と概念を提示する。

#### 3-1 フローテーション法

##### (1) 土壌の採取

主に、植物遺体が多く堆積する遺構内埋土を回収することが多い。土壌採取の際は、植物遺体の産状や遺構の性格を検討できるような採取法をとる（ex. 埋土ごと、グリッドを設定等）【写真①】。また、コンタミネーション（混入）の可能性を除去するために、攪乱を受けている所は避け、新鮮な面を出したうえで土壌を採取する。採取した箇所・土層・日付は実測図と採集した土壌に明記しておく。また、比較試料として包含層の土壌採取も重要である。遺跡から産出する植物遺体の保存状況には「炭化しているもの」と「炭化していないもの」の2種類あり、「炭化していないもの」は水成堆積物の嫌気的環境中以外では残り得ない（南木 2003）。また、発掘調査段階では偶発的に見つかる大型植物遺体以外は認識されにくい。

そこで、微細な炭化種実を効率的に回収する方法がある。台地上の陸成堆積物であれば300cc、低湿地などの水成堆積物であれば100ccを目安（佐々木 2013）に試しのフローテーションを行い、炭化材や種実の量を判断した上で本格的に土壌を採取することが推奨されている。この方法が推奨されている理由には、土壌を多く回収しても、土壌回収→水洗→同定という過程があり、成果を得るまでに時間を要するためである。

##### (2) 乾燥

フローテーションを行う前に、採取した土壌を乾燥させる。乾燥に必要な時間は土質・土量・天候によって変動する。砂質が強い試料ほど乾燥が早い。粘質土は乾燥させず、フローテーションを行う前日に水に溶かしておく。また、乾燥させる段階で、大きすぎる塊はある程度ほぐしておく。

##### (3) フローテーション

ア 水洗する前に、採取した土を計量する。この作

業は、洗う土量に対しての植物遺体の割合を算出し、定量的な分析を行うために不可欠な工程である【写真③】。

イ フローテーションの記録用紙に層位やサンプリング箇所、重量、日付等を記入する【写真④】。

ウ 上段に2mm、下段に0.425mmメッシュ（あるいはさらに間に1mmメッシュをはさむ）の篩をセットし【写真⑤右】、水をためる。篩のメッシュサイズは途中で変更してしまうと回収できる資料が変わってしまうため変更しない。水がオーバーフローし始めたら土を入れる【写真⑤左】。投入した土を攪拌させ、塊となって残ってしまうものは「潰す」のではなく「ほぐす」ようにする【写真⑥】。

エ 炭化物が浮かなくなり、土がほぼ溶けきったら排水する【写真⑦】。沈んで溶け残る場合はセパレーションを行う。水はコンタミネーションを防ぐためにサンプルごとに毎回入れ替える。

オ 回収された浮遊物は、篩ごとに、ガーゼやキムタオル等の織りの細かいものに包んで乾燥させる【写真⑨、⑩】。

カ 沈殿物も同様に新聞紙等に広げ、乾燥させる【写真⑪】。

##### (4) ソーティング

回収した資料を、肉眼または実体顕微鏡で観察する【写真⑫】。微細なものになると、意識的に観察しなければ発見できないことも多い。回収した資料を再び篩にかけて、ある程度大きさをそろえると、より一層動物遺体を探しやすくなる。

##### (5) 同定

同定は現生資料との比較によって行う【写真⑬、⑭】。基本的に現生資料の特徴に基づいて判断することが多いが、完形か破片かによっても同定の識別点や精度が異なる。

同定に際し、第三者の検討が可能なように、最低でも分類群と同定の根拠を記載し写真を提示する。現時点で分類群が不明なものでも、将来分類可能になる場合を考慮し、報告書に掲載する。

また、各工程においてコンタミネーションの可能性を除去しているが、完全には除去しきれないため、得られた植物遺体は年代測定を行うことが望ましい。

##### (6) 報告書への記載

回収された資料について報告書へ記載する。フローテーションによって得た資料は分析を外部委託することが多いため、「付編」「自然科学分析編」などで別扱いされ、同定を行った資料についての写真・所見等の簡易な記載が中心である。

しかし、分析の目的・フローテーションの実施方法・土壌の採取地点・成果・考察等の詳細は、遺構や遺跡の古環境の解釈に関わり、分析結果の信頼性を保証す

る上でも重要となる。そのため、外部委託した際も結果をそのまま記載するのではなく、分析の詳細をできる限り報告書へ記載し、発掘・整理作業担当者が分析結果を遺跡の解釈に反映させることが望ましい。このことは、文化庁監修の『発掘調査のてびき—整理・報告書編一』の一文にも、分析結果はあくまで「仮説」であり、「分析結果や解釈をただ鵜呑みにするのではなく、分析を行った試料の特性や分析方法の限界を考慮しつつ、ほかの考古学的成果との総合化を図るなかで、蓋然性の高い解釈を追求する姿勢が求められる」(P. 74)との記述がある(文化庁文化財部記念物課 2010)。

また、考察を行う上では、フローテーションによって得た植物遺体は、土中で消滅しなかったという限定された状況下において残存していることを念頭に置いて解釈を行う必要がある。

### 3-2 重要性と問題点

前述した様に、フローテーションの手順が確立された現在においても、問題点が大きく2点存在する。

一つ目は、発掘調査にフローテーションが定着していないことである。その背景には、フローテーションの重要性を理解したために、土壌をサンプリングしたが、膨大な時間や労力を費やすため、結果処理しきれなかったという類例があり、「非効率」という印象を植え付けてしまった可能性がある。

二つ目は、採取された資料が、遺構や遺跡の解釈に反映されていないという点である。遺跡に遺存する種実や炭化物は、土器や石器と同様に考古資料であるが、軽視され、総括に反映されていないものさえある。

これらの問題点は早々に解決しうるものではないが、

少々の工夫によって、効率は飛躍的に改善される。手順の中でも述べているが、試しのフローテーションを行うことによって効率的に資料を回収できる。そして、得た資料からは、利用植物の有無に関わらず、当時の環境復元に言及することができる。

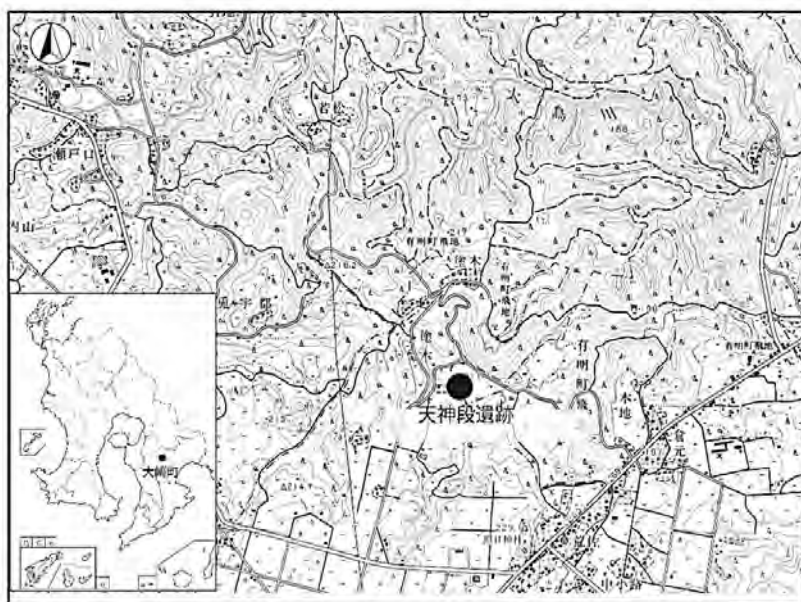
このように、フローテーションは実施することで成果を得ることができる。そこで、本稿において、現場で実際に行ったフローテーションの手順を紹介する。その後、回収した資料と同時期における南部九州の植物質資料との比較を行い、遺跡や遺構の検討の一可能性を示したい。

## 4 天神段遺跡での実践

### 4-1 天神段遺跡について ((公財)埋調セ 2015) (第1図)

天神段遺跡は鹿児島県曾於郡大崎町野方に所在する。遺跡が所在する野方地区は、標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大鳥川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は、畜産や畑作地として利用されており、天神段遺跡はこの台地の縁辺部に位置している。

天神段遺跡は、古墳時代を除く旧石器～近世の複合遺跡であり、各時代とも貴重な遺構や遺跡が確認された。特に今回対象とする中世においては、中世初頭の湖州鏡や松喰鶴鏡などの鏡、古銭、鉄鏃や和鉄などの鉄製品、青磁、白磁、滑石製石鍋や小壺などの、質・量とも豊富な副葬品を持つ土坑墓や掘立柱建物跡が発見されている。これらはある程度高位の一族を中心とした集落の様相が窺え、当時の地域及びその周辺の歴史を紐解く上で注目される成果である。



第1図 天神段遺跡位置図 (S=1/25000) ((公財)埋調セ 2015 を加工)

## 4-2 資料と方法

対象資料は天神段遺跡の遺構から回収した土壌を使用する。なお、今回は中世の資料に限定する。

フローテーションを行った土壌は、以下の9つの遺構の埋土である。

### (1) 土坑墓 8号 (第4, 5図)

N-13区, 土坑墓7号から南方向へ約14m離れて検出された。規模は長辺1.6m, 短辺1.1mの楕円形を呈し, 検出面からの深さは約18cmである。南西部分の多くは, 現代の耕作による攪乱を受け, 上位が消失している。検出面からの深さは浅いが, 包含層と埋土が同色のため検出が難しく, 掘り込み面はこれよりもまだ上位である。床面中央に凹みが認められ, 鉄釘の出土や木棺の特徴もないことから, 土坑墓と思われる。

副葬品は, 北西側において土師器の皿4枚が重なるようにして出土した。

土壌のサンプリングは第3図のように行われている。

### (2) 土坑 9号 (第6図)

H-9区, IVa層で検出された。平面形は67cm×55cmの円形を呈する。断面形は, 深さ9cmの皿状を呈する。床面は, 明瞭な平坦面を形成する。埋土は黒色土と茶褐色土が混ざった土が単一に堆積していた。

### (3) 土坑 10号 (第6図)

H-9区, IVa層で検出された。平面形は59cm×53cmの円形を呈する。断面形は深さ7cmの皿状を呈する。埋土は, 黒色土と茶褐色土が混ざった土が単一に堆積していた。

### (4) 土坑 11号 (第6図)

H-9区, IVa層で検出された。平面形は47×45cmの円形を呈する。断面形は深さ8cmの皿状を呈する。埋土は黒色土と茶褐色土の混ざった土が単一に堆積していた。

### (5) 土坑 30号 (第6図)

G-20区, IVa層で検出された。平面形は74cm×72cmの円形を呈する。断面形は, 深さ9cmの台形状を呈する。埋土は, 黄褐色の小ブロックを含む黒褐色土が単一に堆積していた。

### (6) 土坑 44号 (第6図)

H-9区, IVa層で検出された。平面形は, 93cm×87cmの円形を呈する。断面形は深さ16cmの舟形状を呈する。埋土は黒色土と茶褐色土が混ざった土が単一に堆積していた。

### (7) 土坑 47号 (第6図)

G-10区, IVa層で検出された。平面形は92cm×84cmの円形を呈する。断面形は, 深さ7cmの浅い皿状を呈する。埋土は, IIIa層土とIVa層土が混ざったような茶褐色土が単一に堆積していた。

### (8) 土坑 51号 (第6図)

E-12区, IVb層で, 古代の土坑16号を切る形で検出された。平面形は98cm×95cmの円形を呈する。断面形は, 深さ22cmの台形状を呈する。埋土は黒色土が単一に堆積していた。

### (9) 土坑 55号 (第6図)

G-20区, IVa層で検出された。平面形は, 97cm×88cmの円形を呈する。断面形は深さ29cmの台形状を呈する。埋土は黒色土が単一に堆積していた。

## 4-3 方法

天神段遺跡において実施したフローテーションの方法は以下の通りである。基本的な流れは3-1で示した手順に準ずる。なお, フローテーション自体は縄文時代早期, 晩期, 弥生時代中期, 中世の遺構について行っている。中世以外の時期については, いずれ報告の機会を持ちたい。

### (1) 土壌の採取

遺構調査時に, 同様の遺構よりも炭化物が比較的多く見受けられた遺構の土壌を採取した。また, 今回は触れないが, 住居跡についてはどの部分から多く炭化資料が回収できるかを調査するため, 床上5cmで40cmメッシュごとに採取した。

### (2) 乾燥

通気性の良いカゴに新聞紙を敷き, 土壌を乾燥させた。なお, コンタミネーションを防ぐため, 遺物収納倉庫において行った【写真②】。また, 縄文時代早期の土壌は粘質土であったため, 乾燥はさせず, 計量後に水に溶かした。

### (3) フローテーション

採取した土量が膨大であったため, フローテーションマシンを使用した。また, 記録には独自でフローテーションサマリーを作成した(第3図)。

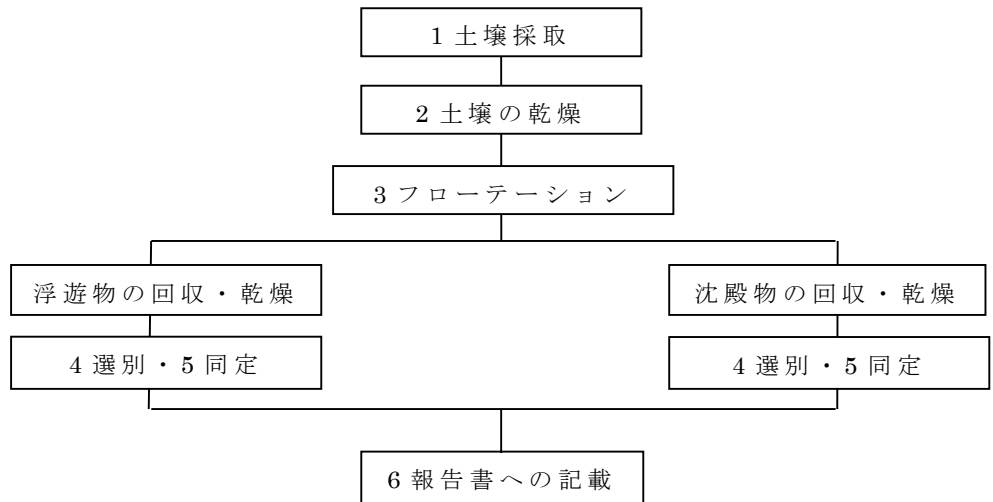
今回は中世の土壌であったため, 雑穀が存在する可能性が考えられた。そのため, 篩のメッシュサイズは2mmと0.425mmを使用した。

### (4) ソーティング

回収した資料は, 実体顕微鏡を使用し, 種実と炭化材とに選別した。顕微鏡の倍率は10~40倍の低倍率で行った。

### (5) 同定

イネとオオムギについては現生資料との比較を行った。それ以外については『原色日本植物種子写真図鑑』(石川 1994)を参考に同定した。



第2図 ウォーター・フローテーションの作業フロー(数字は各項目と対応)



① 土壌の採取  
(写真は住居跡の床上約5cmを40cmメッシュごとに採取)



② 採取した土壌を乾燥させる  
(粘質土の場合は前日までに水に溶かしておく。新聞紙や寒冷紗を敷くと早く乾燥する)



③ サンプルごとに計量。



④ 土壌採取箇所，層位，重量等を記入。



⑤水をためる。水が篩のほうにオーバーフローし始めたら土壌を入れる。



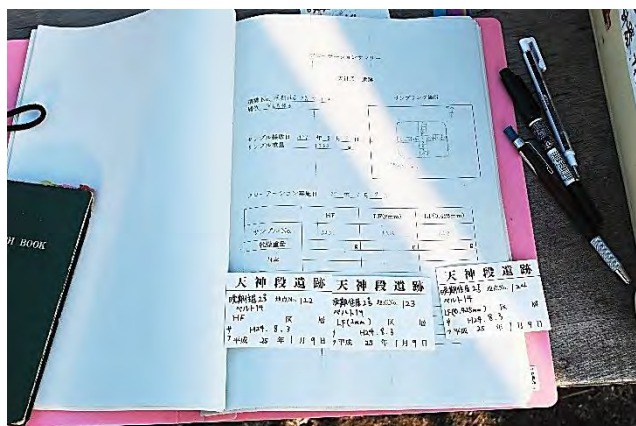
上段：2mmの篩 下段：0.425mmの篩



⑥フローテーション開始。土壌を投入後、攪拌させる。沈んだ土は軽くほぐしながら浮遊した炭化物を回収する。



⑦排水。水はコンタミネーション(異物混入)を防ぐため、サンプルが変わるごとに全て入れ替える。



⑧遺物カードの記入。土壌採取日とフローテーション実施日の両方を記入する。



⑨回収された浮遊物



⑩回収された浮遊物は篩ごとに布等の織りの細かいものに包んで乾燥させる。



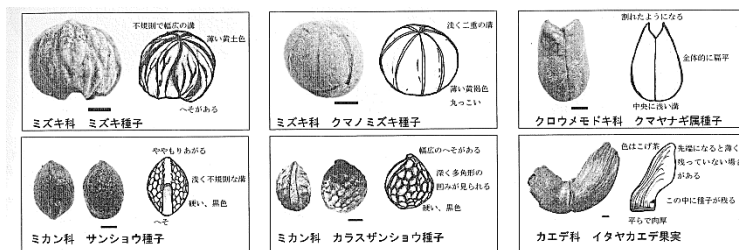
⑪沈殿物は、パンケースに広げた新聞紙にあけ、乾燥後袋に入れる。土が溶け残った場合はそのまま水洗選別を行い洗い流す。



⑫肉眼および実体顕微鏡，ルーペ等で植物遺体を抽出し，現生資料と比較したうえで同定する。



⑬上：現生イネと出土イネ  
下：現生オオムギと出土オオムギ



不明 ① 不明Noを付けて管理  
② 専門家による同定

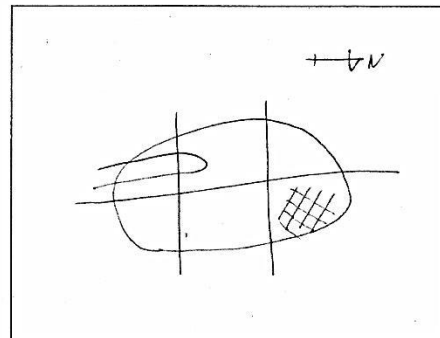
⑭同定カード例【東京都東村山市下宅部遺跡】(佐々木・工藤 2006)

フローテーションサマリー

天神段 遺跡

遺構 No. 土坑墓 7号 北東  
層位 \_\_\_\_\_

サンプリング箇所



サンプル採取日 23 年 8 月 12 日  
サンプル重量 1258 g

フローテーション実施日 24 年 12 月 3 日

	HF	LF(2mm)	LF(0.425mm)
サンプル No.	29	30	31
乾燥重量	50.2 g	0.2 g	0.2 g
内容		付の 木片 1点	
		不明 種子片 2点	

備考

---



---



---



---



---

## 5 結果（第1表, 第7～9図）

フローテーションによって回収した資料を第1表に示した。目立つ成果としては、土坑墓8号において、イネ（学名 *Oryza sativa* L）2点、オオムギ（学名 *Hordeum vulgare* L）29点、土坑44号でイネ5点、オオムギ26点が回収された。表からも看取できるが、どの遺構においてもイチイガシ等の堅果類は皆無であり、イネとオオムギの存在が顕著であった。イネは、全て玄米の状態で炭化しており、やや扁平の長楕円形を呈する。胚乳の基部一端に、胚が脱落した斜切形の凹部が確認できる点や、胚乳表面に二条の突起がみられる点から、イネと考えられる（第8図参照）。オオムギは、胚乳が炭化しており、紡錘状長楕円形を呈する。両端が尖り、表面には縦に通る微細な筋がみられる。これらの特徴から、オオムギと考えられる（第9図）。また、種の同定には至らなかった種子（不明種子）も多数回収された。これらの不明種子は、ほとんどが0.425mmメッシュで回収されていたものである。正確な種は同定不可能であったが、小型であることから、雑草類の可能性が高い。

## 6 中世の南部九州における植物質資料（第2表）

中世の南部九州（鹿児島県のみ）において、植物質資料（種子）の報告がなされているのは13遺跡である（第2表 真邊 2015）。このうち、古代や近世の可能性が含まれるものを除くと、以下の7遺跡となる。

### （1）上水流遺跡（鹿児島県埋セ（121）2008）

南さつま市金峰町に所在する。中世から近世にかけて使用されたと思われる、4号炉状遺構と10号炉状遺構から、それぞれ、ムギ類1点、コムギ5点と、オオムギ2点、種不明1点が回収されている。いずれも炭化している。

### （2）和早地遺跡（鹿児島県埋セ（119）2008）

大島郡喜界町荒木和早地に所在する。中世の掘立柱建物跡3号からオオムギ12点、コムギ1点、ムギ類1点、ピットからオオムギ4点が回収されている。いずれも炭化しており、放射性炭素年代測定の結果はいずれも14～15世紀にあたる。

### （3）狩俣遺跡（鹿児島県埋セ（152）2010）

曾於市大隅町岩川に所在する。中世の畝間内埋土から、栽培種ではオオムギ7点、コムギ4点、ムギ類2点、野生種ではオヒシバ2点、カヤツリグサ科1点、ヒユ科2点、キランソウ属3点、サナエタデ近似種4点、アキノノゲシ1点が回収された。ただし、野生種に関してはコンタミネーションの可能性が報告書内で指摘されている。

### （4）中郡遺跡（（公財）埋調セ（1）2014）

出水市野田町下名に所在する。低湿地部より様々な野生種、栽培種が回収された。イネ、オオムギ、ムギ類は炭化している。

### （5）市頭C遺跡（始良市教育委員会（4）2013）

始良市加治木町木田に所在する。フローテーションにより、土坑38号からイネ、アワ、マメ科、ヒョウタンが回収されている。

### （6）山口遺跡（鹿児島県埋セ（179）2013）

薩摩川内市都町に所在する。中世の土坑49号からイネ24点、ブナ科2点が回収された。

### （7）城久遺跡群（山田中西遺跡・山田半田遺跡・前畑遺跡・小ハネ遺跡）（喜界町教育委員会（9）～（11）2008, 2009, 2011）

大島郡喜界町に所在する。土坑墓からイネ、コムギ、アワ、オトギリソウ属、土坑およびピットからイネ、オオムギ、アワ、コムカンソウ、オトギリソウ属、タデ科、ナス科が回収されている。また、焼土関連遺構からはイネ、オオムギ、オトギリソウ属、マメ科、クワ科、堅果類子葉が回収されている。

以上が、中世における植物質資料である。この中で、喜界町に所在する和早地遺跡と城久遺跡群を除く鹿児島県本土においては、上水流遺跡、狩俣遺跡、中郡遺跡、市頭C遺跡、山口遺跡の5遺跡に限定される。まとまった資料は山口遺跡の土坑から回収されたイネ24点であり、その他は微量に回収されている。

## 7 天神段遺跡の資料の評価

ここで、天神段遺跡の資料を再度提示すると、土坑44号においてイネ5点とオオムギ26点、土坑墓8号においてイネ2点とオオムギ29点が回収された。中世において、これほどのまとまったオオムギの資料は鹿児島県内において例を見ない。また、注目すべき点は、同じように土坑から植物質資料が回収されている山口遺跡資料との組成の違いである。

山口遺跡資料はイネのみが回収されている。対して天神段遺跡の資料は、土坑9, 11, 51, 55号において、オオムギのみ、もしくはオオムギと不明種子という組成である。そして、土坑44号、47号についてはイネとオオムギの組成であり、オオムギの点数が圧倒的に多い。すべて同じ「土坑」として報告されているが、いずれもその用途については言及されていない。天神段遺跡資料の土坑の配置、規格、形態などから共通性は見いだせず、植物質資料の組成の違いも顕著ではない。唯一土坑44号は回収した資料の点数が多く、オオムギの点数が多いという点が土坑墓8号と類似しており、遺構の性格など、何らかの点において関連している可能性がある。

また、両遺跡ともに中世の生産遺構は検出されていないため、回収されたこれらの資料が、各遺跡において生産されていた可能性も不確実である。

しかしながら、オオムギやイネは複数の遺跡で回収されていることや、狩俣遺跡の畝間内埋土からオオムギや

ゴミが回収されていること等から、各遺跡の周辺で生産されていた可能性が考えられる。そして、これらの資料は、中世の南部九州において、オオムギやイネといった栽培植物が利用されていたことを意味している。

今後は、プラントオパールなどを活用した上で生産地を推定し、生産の確実な証拠となり得る遺構が検出されることを期待する。

## 8 まとめ

天神段遺跡において実施したフローテーションの結果と当該期の南部九州の資料とを比較し、フローテーションを行う意義と、それらの資料の持つ意味について考察してきた。

中世の南部九州において、これらの植物質資料が回収されている遺跡は多くはない。今回は限られた資料との比較になったが、資料数が少ないという現状を把握でき、山口遺跡と天神段遺跡の二遺跡間においても組成の違いがみられた。また、わずかではあるが、その結果から遺構についても検討ができた。今後の課題として、他地域における同時期の資料との比較や、文献資料との照合を行っていききたい。

また、今回回収した「不明種子」については種を明確にできなかったが、同定作業を行った結果「不明」と判断した資料に関しても、資料を提示することに重要な意味がある。つまり、今後の追調査によっては、将来的に種が明らかになる可能性が残り、さらなる環境復元が行えるかもしれない。本稿において報告した天神段遺跡出土の植物質資料は定量的な分析によって得られた貴重な資料の一つである。今回の結果は、シラス台地上に立地する遺跡が多く、生産に関連する遺構や遺物が残存しにくい南部九州だからこそ、フローテーションが効果的であり、必要不可欠な調査であることを示している。

また、このような定量的な分析の蓄積によって、どのような遺構において資料が得られるのか等も明確になり、より効率的な回収が可能になる。今後は、フローテーションや圧痕レプリカ法などの方法を用いて、小規模でも継続した資料の分析を行い、植物質資料を蓄積していくことが肝要である。

今回は土壌サンプリング以降の流れと資料からの若干の考察を中心に行ったが、発掘調査時に最も重要となるのはサンプリングである。位置情報とサンプリングの目的を明確に示唆し、遺構や遺物と同様に記録を行っていくことが重要である。本稿が今後の調査においての一助となれば幸いである。

本稿は、(公財)埋蔵文化財調査センターの職員研修の一環である、平成26年度実務向上研修での論文をもとに、加筆・修正を行ったものである。その際、指導担当である真邊彩氏には多くのご指導、ご指摘を賜った。ま

た、黒川忠広氏には、平成24年度の天神段遺跡発掘調査において、フローテーションを行う機会を与えていただき、多くのご指導も賜った。末筆ではあるが、記して感謝の意を表したい。

## 【註】

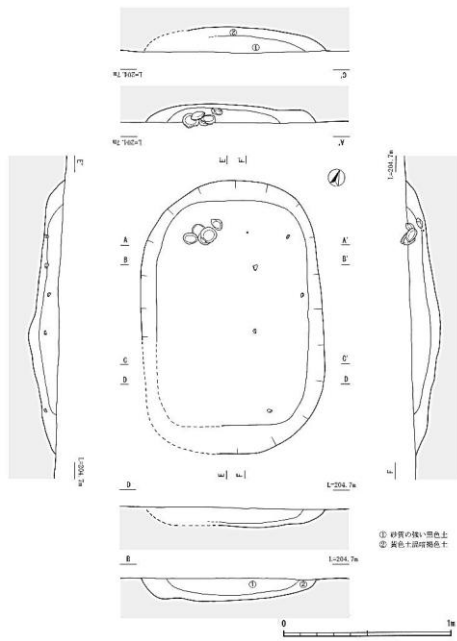
1 土壌を水で溶いて攪拌し、種子や炭化物等の比重の軽い遺物を浮遊させて回収する方法。また、ここでのウォーター・フローテーション法とは、ウォーター・セパレーション(土壌を水と共に篩に通し、遺物を選別する方法)までを含み、以下フローテーションと略す。

2 レプリカ法には、現在、レプリカ法(丑野1991)、レプリカ・セム法(中山2007)、圧痕レプリカ法(小畑2012)の3つの呼称が存在する。いずれも手段に大きな差は見られないため、ここでは「圧痕レプリカ法」として統一する。

## 【引用・参考文献】

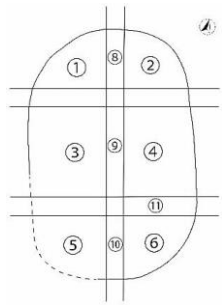
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
- 小畑弘己 2011「第5章 植物遺存体からみた福岡の歴史」『新修福岡市史 資料編 考古3 遺物からみた福岡の歴史』pp.672-701 福岡市
- 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 2007「土器圧痕からみた縄文後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』第15巻第2号 pp.97-114 植生史学会
- 河口貞徳 1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18号 pp.1-9 九州考古学会
- 河口貞徳 1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 p.130 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳・出口浩 1971「第一次花熟里遺跡調査報告」『鹿児島考古』第5号 pp.53-71 鹿児島県考古学会
- 小谷凱宣 1972「縄文時代晩期の植物利用の研究—上ノ原遺跡の植物性遺物について」『民俗学研究』36-4 pp.312-313 日本民族学会
- 小西猛朗 2005「大麦と小麦の炭化粒について」『極東先史古代の穀物』日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金(基盤研究B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」中間研究発表論集 pp.103-109 熊本大学
- 佐々木由香 2013「植物遺体回収法〜どこから何を、どのように回収するのか?〜」『第8回九州古代種子研究会 福岡大会発表資料集』
- 佐々木由香・工藤雄一郎 2006「大型植物遺体」下宅部遺跡調査団編『下宅部遺跡I(1)』pp.183-222 東村山市遺跡調査会
- 高宮広士 2003「第4節 2号住居跡の床面土壌のウォーターフローテーションと炭化種子の同定—長田遺跡出土の大型植物遺存体—」『長田遺跡』有明町埋蔵文化

財発掘調査報告書(2) pp. 95-100 有明町教育委員会  
 千浦美智子 1981「微細遺物—フロテーション・セパレーション法」『加栗山遺跡・神ノ木山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(16) pp. 490-496 鹿児島県教育委員会  
 星川清親 1980『新編 食用作物』 養賢堂  
 文化庁文化財部記念物課監修 2010「第8節自然科学分析」『発掘調査のてびき—整理・報告書編—』 p74-79 同成社  
 蒔田鎗次郎 1987「弥生式土器」『東京人類学雑誌』 12-138 pp. 481-485 東京人類学会  
 真邊彩 2015「九州各地の古墳時代以降の種実出土状況—鹿児島県—」『第10回九州古代種子研究会熊本大会発表要旨集』  
 山崎純男 2005「西日本縄文農耕論」『韓・日新石器時代の農耕問題』 pp. 33-55 慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会  
 山内清男 1925a「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』 40巻第5号 pp. 181-184  
 山内清男 1925b「石器時代の土器底面に於ける稲籾の圧痕」『先史考古学論文集』(一) pp. 207-208 (1997刊行)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008a『荒木貝塚・和早地遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(119)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008b『上水流遺跡2』

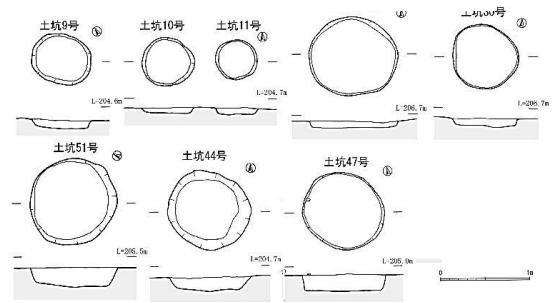


第4図 天神段遺跡土坑墓8号 ((公財)埋調セ201)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2010『狩俣遺跡・建山遺跡・西原段I遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(152)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2013『山口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(17)  
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2014『中郡遺跡群』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(1)  
 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2015『天神段遺跡1』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3)  
 始良市教育委員会 2013『市頭A遺跡 市頭B・C遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集  
 喜界町教育委員会  
 2008『城久遺跡群 山田中西遺跡II』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)  
 2009『城久遺跡群 山田半田遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)  
 2011『城久遺跡群 前畑遺跡・小ハネ遺跡』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)  
 米倉浩司・梶田忠 (2003-)「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), [http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist\\_main.html](http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html) (2015年6月11日)



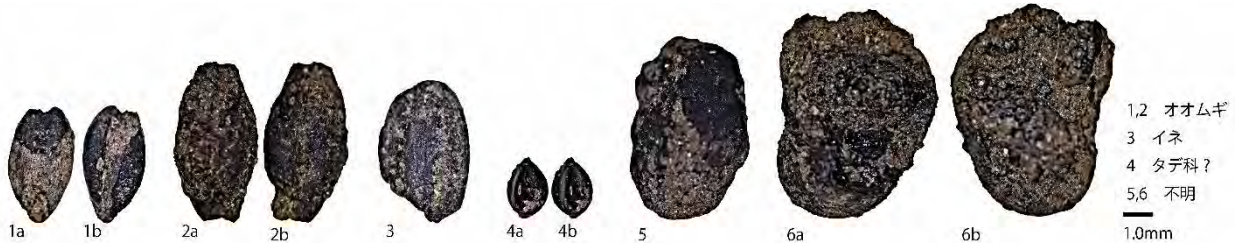
第5図 天神段遺跡土坑墓8号 土壌サンプリング箇所



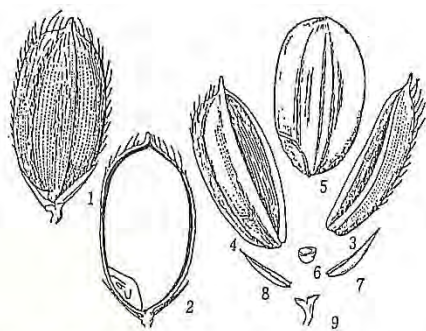
第6図 天神段遺跡中世の土坑 ((公財)埋調セ2015を一部加工)

第 1 表 天神段遺跡フローテーション結果

FL No.	遺構	サンプル量	サンプルNo.	LF回収量 (2mm)	イネ	オオムギ	不明種子	サンプルNo.	LF回収量 (0.425mm)	種子類
1	土坑墓8号 ④	6794 g	3	3.4 g	1	2	3	4	9.8 g	
2	土坑墓8号 ④	9646 g	5	1.6 g		5	10	6	3 g	
3	土坑墓8号 土師の坏の下	1948 g	8	0 g		1		9	0 g	
4	土坑墓8号 ⑤	4236 g	11	0.6 g		2		12	1.5 g	
5	土坑墓8号 ⑥	4210 g	14	0.6 g		3	2	15	1.1 g	
6	土坑墓8号 ③	6908 g	17	1.9 g				18	7.9 g	
7	土坑墓8号 埋土	646 g	21	0.1 g			1	22	0.3 g	
8	土坑墓8号 ②	2114 g	24	0.3 g			2	25	0.7 g	
9	土坑墓8号 埋土	1824 g	27	0.3 g			3	28	1.1 g	
10	土坑墓8号 ②	1258 g	30	0.2 g		1	2	31	0.2 g	
11	土坑墓8号 ④	1664 g	33	0.3 g		3		34	0.2 g	
12	土坑墓8号 ④	2924 g	36	1.5 g			3	37	1.1 g	不明種子片5点 (うち1点はタデ科?)
13	土坑墓8号 ⑨	8866 g	39	1.5 g	1	3		40	6.7 g	
14	土坑墓8号 ⑧	3998 g	42	0.6 g				43	2.1 g	
15	土坑墓8号 ⑩	1828 g	45	0.4 g				46	3 g	
19	土坑9号 サンプル①	2504 g	57	0.3 g			2	58	1.1 g	
20	土坑9号 サンプル②	2320 g	60	0.3 g		3	3	61	0.8 g	
21	土坑9号 サンプル①	1856 g	63	0.2 g			1	64	1.3 g	
22	土坑9号 サンプル②	2110 g	66	0.3 g		4		67	1.1 g	
23	土坑墓8号 ⑪	7856 g	69	2.4 g		9	3	70	6 g	
24	土坑51号	4516 g	72	1.5 g		6	10	73	1.9 g	
25	土坑47号 サンプル②	2876 g	75	0.4 g	1			76	0.4 g	
26	土坑47号 サンプル①	5706 g	78	0.5 g		3		79	2.4 g	
27	焼土① サンプル用	1148 g	81	0.1 g			1	82	0 g	
29	土坑47号 サンプル②	2762 g	87	0.3 g			3	88	0.5 g	
30	土坑11号 サンプル	2476 g	90	0.3 g		1		91	0.2 g	
31	土坑10号 サンプル	3214 g	93	0.4 g				94	0.3 g	
32	土坑55号	5786 g	96	0.5 g		1	4	97	1.4 g	
33	土坑44号 サンプル③	5780 g	99	0.6 g	3	8	2	100	1.4 g	ムギ破片, 不明種子数点
34	土坑44号 サンプル④	5454 g	102	1.2 g	2	18	4	103	3.8 g	不明種子破片数点
37	土坑55号	11272 g	111	3.9 g		4	5	112	16.1 g	
38	土坑30号	13730 g	114	3.6 g		1	3	115	20.1 g	
	計	140230 g		30.1 g	8	78	67		97.5 g	

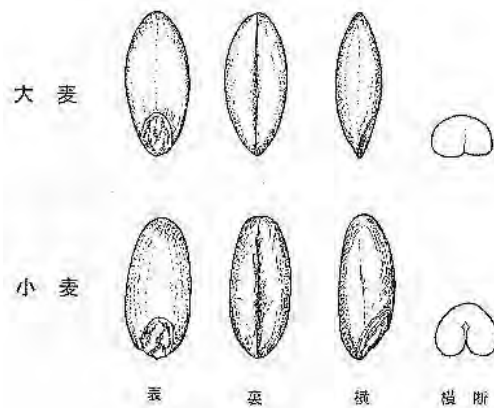


第 7 図 天神段遺跡フローテーション回収種子



1 : 横から見たもの, 2 : 縦断面, 3~9 : 籾を分離したもの, 3 : 内穎, 4 : 外穎, 5 : 玄米, 6 : 小穂軸, 7, 8 : 護穎, 9 : 副護穎と小枝梗

第 8 図 籾の構造 (星川 1980 より引用)



第 9 図 現生のオオムギとコムギの形態 (小西 2005 より引用)

表 2 - 1 鹿児島県における植物質資料（古代～中世）（真邊 2015 引用）

時 期	古 代										古 代 （14～15世紀）				中 世				中 世 （14～15世紀）		中 世 （14～15世紀）		中 世 （14～15世紀）	
	渡畑遺跡	筆付遺跡	小瀬戸遺跡	市ノ原遺跡 第1地点	小倉畑遺跡	二渡船渡ノ上遺跡	大ヶ原遺跡	狩保遺跡	大島遺跡	和早地遺跡	上水流遺跡	狩保遺跡	中郡遺跡群	市頭C遺跡	山口遺跡	持鉢松遺跡	上水流遺跡	上水流遺跡						
遺 跡 名	28号土坑	包含層	井戸1	包含層	低湿地部	包含層	包含層	土坑94号	包含層	掘立柱建物跡	中世ビット	4号炬状遺構	10号炬状遺構	敵間内埋土	低湿地部	土坑38	土坑49号	ビット・包含層	17号土坑墓	ビット				
遺 構 名	(抽出)	(抽出)	(抽出)	(抽出)	水洗	(抽出)	(抽出)	水洗	(抽出)	水洗	水洗	水洗	水洗	(抽出)	水洗	水洗	水洗	(抽出)	(抽出)	(抽出)				
分析方法																								
野生樹木・草本植物	フナ科																							
	アカガシ亜属	58		1											1									
	イテイガシ	6			2										4									
	コナラ属														1									
	ツブラジイ																							
	オニグルミ																							
	針葉樹球果																							
	マツ属					○*																		
	クスノキ科		1																					
	クスノキ														282	1								
	ヤマグワ															1								
	エゴノキ					○*										9								
	センダン																							
	ムクロジ																							
	チャンチンモドキ																							
	ヤブニッケイ			1																				
	カラスザンショウ																							
	ウ																							
	アカメガシワ																							
	クマノミズキ																							
	アキノノゲシ																							
	イシミカワ近似種																							
	イバラモ属					1																		
	イヌコウジュ属					1																		
	ウコギ科																							
	オトギリソウ属					1																		
	オヒシバ														2									
	カナムグラ																							
	カヤツリグサ科					4									1									
	キイチゴ属					1																		
	キカラスウリ																							
	キク科																							
	キランソウ属																							
スゲ属					1																			
タデ科																								
タデ属						35																		
サナエタデ																								
近似種																								
テンツギ属																								
ニワトコ属																								
ヒユ科																								
ブドウ属																								
ノブドウ																								
ホタルイ属						36																		
ミクリ属						2																		
ミズアオイ属						1																		
イネ科																								
イネ																								
ムギ類																								
オオムギ																								
コムギ																								
アワ																								
アワ-ヒエ																								
ヒエ属																								
マメ科																								
ヒョウタン			32																					
栽培植物																								
イネ科																								
イネ																								
ムギ類																								
オオムギ																								
コムギ																								
アワ																								
アワ-ヒエ																								
ヒエ属																								
マメ科																								
ヒョウタン																								
栽培果樹																								
ウメ																								
モモ		35	1	2																				
スモモ			3																					
ヤマモモ																								
ハナモモ																								
不明																								
分 析	(株) 加速器分析研究所	パリン・サイウエイ(株)	田川日出夫	文中記載	パリン・サイウエイ(株)	密写真図版に大型種実あり	パングリ スタルンヤン	佐々木由香	文中記載	(株) 加速器分析研究所	パリン・サイウエイ(株)	(株) 加速器分析研究所	パリン・サイウエイ(株)	(株) 加速器分析研究所	パリン・サイウエイ(株)	(株) 加速器分析研究所	大西智和ほか	(株) 加速器分析研究所	(株) 加速器分析研究所	(株) 加速器分析研究所				
報 告 書	県埋七 2011b	金峰町 2004	県 1982	県埋七 2003a	県埋七 2002	県埋七 2011d	県埋七 2003b	県埋七 2010b	県埋七 2005	県埋七 2008a	県埋七 2008b	県埋七 2010c	(公財) 埋七 2014	始良市 2013	県埋七 2013b	県埋七 2007	上床 2008	県埋七 2010b						

表 2 - 2 鹿児島県における植物質資料（古代～中世）（真邊 2015 引用）

時 期	古代末～中世																					
遺 跡 名	山田中西遺跡					山田半田遺跡					前畑遺跡					小ハネ遺跡						
遺 構 名	土坑墓 4号	土坑墓 5号	土坑墓 7号	土坑墓 8号	焼土関連	土坑・ピット	土坑墓	土坑墓 2号	土坑墓 7号	土坑墓 1号	土坑 2号	焼土土坑①	ピット	砂鉄層	土坑墓 1号	土坑墓 5号	土坑墓 6号	土坑墓 3号	土坑墓 2号	焼土	その他	
分析方法	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	水洗	
野生樹木・ 草本植物	堅果類				2	1	2														1	
	ニフトコ																					
	コミカンソウ					1																
	タデ科					2			5									3			1	2
	オトギリソウ科																3		3	3		6
	オトギリソウ属					159	12	4			2					1						1
	シマサルナン											1										
	カヤツリグサ科						1					1										
	トウダイグサ科																					
	エノコログサ属																			1		1
イネ科																			1			
ナス科						1																
クワ科					1																	
栽培植物	イネ科					2																
	イネ		1	1	3	3	31	76	5		1			1	2	1	3	3	8	9		15
	ムギ類						11	1		1			4	1	19		2	2	2			
	オオムギ		1	2	1	1	7			1			3		6	1	6	4	12	1		
	コムギ			1	1	1	2								1	1	1	2	2			7
	アワ				1	17	1	4	1	1	7			1	3	1	7	1	3	1		7
	アワ-ヒエ																					
	キビ												2									2
	ヒエ属																					
	雑穀類																	1		1		
マメ科					1							1										
ヒヨウタン																						
栽培果樹	ウメ																					
	モモ																					
	スモモ																					
	ヤマモモ																					
ハナモモ																						
不明	7	2	6	8	12	2					3	1		4	1	1		2	1		2	
分 析	高宮広土・					高宮広土					高宮広土・千田寛之											
報 告 書	喜界町 2008					喜界町 2009					喜界町 2011											

# 全点ドット調査の有効性と問題点①

—1970年代から1990年代の調査を中心に—

立神 倫史

Validity and Problems of All Dot Excavation

Tategami Michifumi

## 要旨

本稿では、全点ドット調査の有効性と問題点について検討する。鹿児島県で行政発掘が本格化した1970年代前半より出土遺物の3次元的出土位置の記録化を行ってきた。いわゆる全点ドット調査（註1）といわれる手法で多くの成果を挙げてきた。今回、調査開始期から1990年代までに行われた特徴的な全点ドット調査による調査事例を概観した。特に縄紋（註2）文化研究に大きく寄与することになった事例を中心に言及し、改めて全点ドット調査が出土状況の客観的情報提示という観点から、今後も調査手法の1つとして有効であることを再確認した。

キーワード 全点ドット調査 ドットマップ 型式 層位 接合

## 1 はじめに

本稿では、鹿児島県の行政目的で行う埋蔵文化財の調査（以下 行政発掘と略す）における全点ドット調査の有効性と問題点について検討する。本県で行政発掘が本格化した1970年代前半より個々の出土遺物の3次元的出土位置の記録にあたってきた（註3）。いわゆる全点ドット調査である。

近年、文化庁監修で作成された「発掘調査のてびき」（以下 てびきと略す）によると全点ドット調査（註4）自体が目的化し、ややもすればルーチンワーク化してしまい、なぜ点を取るのかという本来の意義が見失われている場合もあるという。それは、時間と経費の浪費につながり、成果も期待できないため、慎むべきであると指摘する（文化庁文化財記念物課 2012）。てびきが指摘するのは、調査手法にいくつかの選択肢がありながらも無条件に特定の調査手法を採用することに対して、警鐘を鳴らしている点である。

本県での行政発掘において、特に縄紋文化研究で得られた考古学的成果は、当該地域に広域テフラがいくつも堆積していたことや出土した遺物の出土位置の客観的記録が行われていたことが背景としてある。

特に、「もう一つの縄文文化」（新東 1994ほか）といわれた南九州地域（註5）の縄紋時代草創期における隆帯紋土器期の遺構・遺物の出土のあり方（新東 2006ほか）や上野原遺跡IV工区（第2地点）における縄紋時代早期前葉の集落形態（中村耕ほか 2002）などに関する調査成果は、薩摩火山灰やアカホヤ火山灰などの広域テフラの降灰後という年代的担保に裏打ちされていた。ま

た、てびきにも引用されている上野原遺跡第10地点検出の「環状遺棄遺構」（八木澤 2003）もその性格に関しては、様々な見解はあるものの（水ノ江 2012 佐々木 2014ほか）、仮に効率性を重視した小グリッド単位での取り上げだった場合には、どうなっていたのだろうか。この遺構はドットによる出土情報の提示により、その視覚的な効果も相まって、東日本の縄紋時代中期の環状集落における遺物出土状況との類似性を指摘する見解まで出てきた（2012）（註6）。水ノ江と同氏の解釈に関しては、今後十分検討する必要があるが、関東地方の調査事例と比較できた背景として同様の全点ドット調査が行われていたことが大きい。ただ、これだけ長期にわたり同様の調査法を行いながらも、全国的な縄紋時代の編年研究や集落研究に全点ドット調査を活用した形で積極的にコミット出来なかった理由に関して多く語られることはなかった。

また、調査期間と経費が限られている行政発掘においては必ずしも全点ドット調査が有効でない場合がある。そこで今回は、本県における全点ドット調査の有効性と問題点について、調査開始期の1970年代から1990年代までに行われた全点ドット調査での特徴的な報告事例を中心に概括していきたい。本論となる南九州地域の縄紋時代前半期（註7）の「型式」と「層位」を中心とした土器研究や集落研究に関する部分については次号以降でまとめた。

## 2 鹿児島県における全点ドット調査報告の変遷

鹿児島県で行政発掘が本格化するの、日本各地で盛

行した開発の波が地方へ波及し始めた 1970 年代前半頃である。鹿児島県では、九州縦貫自動車道建設に伴い調査組織が整備され、本格的な行政発掘が開始された。旧始良町所在の小瀬戸遺跡を皮切りに旧吉松町から鹿児島市にかけて計 38 遺跡が調査された。同時に、県や市町村の諸事業に伴う行政発掘もこの頃に本格的に開始され、主に教育庁文化課（のちの文化財課）の職員が調査を担当した。1970 年代前半といえば、麻生優氏の「原位置」論（麻生 1969）（麻生 1975）が調査方法における理論的な潮流として旧石器文化研究や縄紋集落研究において、全点ドット調査の進展とともに盛行していた頃と推察される（小林 2003）。そうした影響が本県の全点ドット調査導入にどの程度及ぼしたかに関しては、改めてまとめてみたい。ここでは事例を概括するのみにしたい。

なお、全点ドット調査は本来遺構や石器以外の出土遺物に乏しい旧石器文化解明のために活用されてきた側面もあり、旧石器時代に関する全点ドット調査における成果は、ここで触れず、縄紋時代以降の調査事例を出土土器に関する事項を中心に扱うことにする。

### ① ドットマップの初現

花ノ木遺跡（諏訪ほか 1975）

「遺構・遺物出土実測図」

花ノ木遺跡は鹿児島県埋蔵文化財報告書（1）として 1975 年に刊行された。発掘調査は先の九州縦貫自動車道関連の遺跡調査とほぼ並行して、1974 年に調査された。図 1 にあるのは第 VI 地点アカホヤ火山灰層にあたる第 II 層下の第 III 層塞ノ神式土器を主体とする縄文時

代前期（註 8）の包含層を中心とした遺構・遺物実測図である。ローマ数字で割り振られた土坑・集石遺構を中心に、主な土器片を×、石鏃を△で表している。石鏃にも番号が付けられており、別図の遺物実測図に対応している。残念ながら図版掲載の各土器と各出土位置対応することは不可能ではあるが、ドットマップより土器も出土位置を記録していたことが分かる。いずれにせよ行政発掘が本格化した当初より出土遺物の 3 次元的出土位置の記録していたことを、花ノ木遺跡の調査報告書から窺い知ることが出来る。

花ノ木遺跡報告以降の全点ドット調査に基づく 1970 年代後半から 1980 年代前半の特徴的な報告事例は、新東晃一氏が当時の調査事例を詳細に分析する中で、包含層の構造に言及した「南九州の縄文時代包含層の構造」（新東 1984）で取り上げられた報告事例を参考にした。

### ② 接合線の登場

下剥峯遺跡（新東ほか 1978）

「114 土器平面図」

下剥峯遺跡は、県営ほ場整備事業に伴って 1977 年に調査された西之表市所在の遺跡である。この遺跡は、新東晃一氏による一連の南九州の縄文時代早期・前期の土器編年の見直しのきっかけとなった遺跡である。また、近年押型紋系土器との併行関係が議論されている下剥峯式土器の標識遺跡でもある。

下剥峯遺跡では、アカホヤ火山灰を鍵層として九州縦貫自動車関連の桑ノ丸遺跡や加栗山遺跡などの本土の同時期遺跡の包含層と対比が可能となったばかりでなく、轟（註 9）・曾畑式土器がアカホヤ火山灰より上層

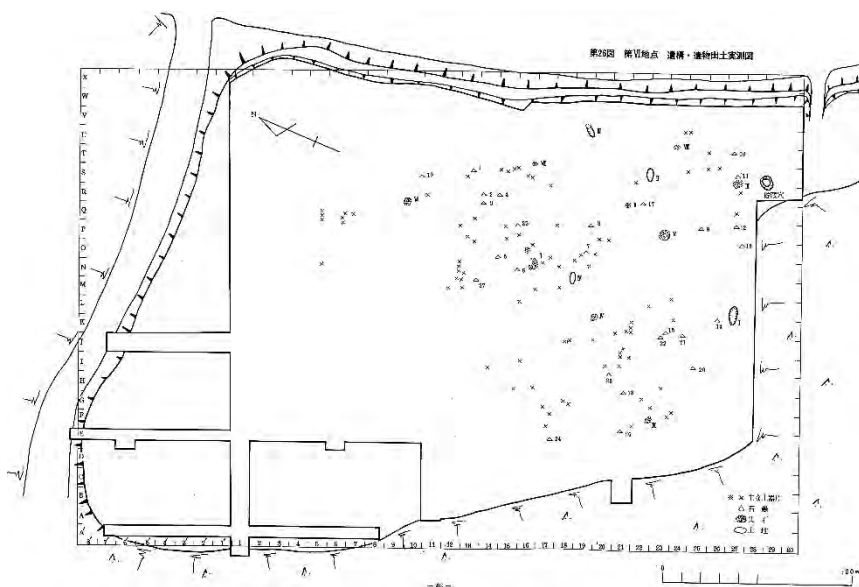
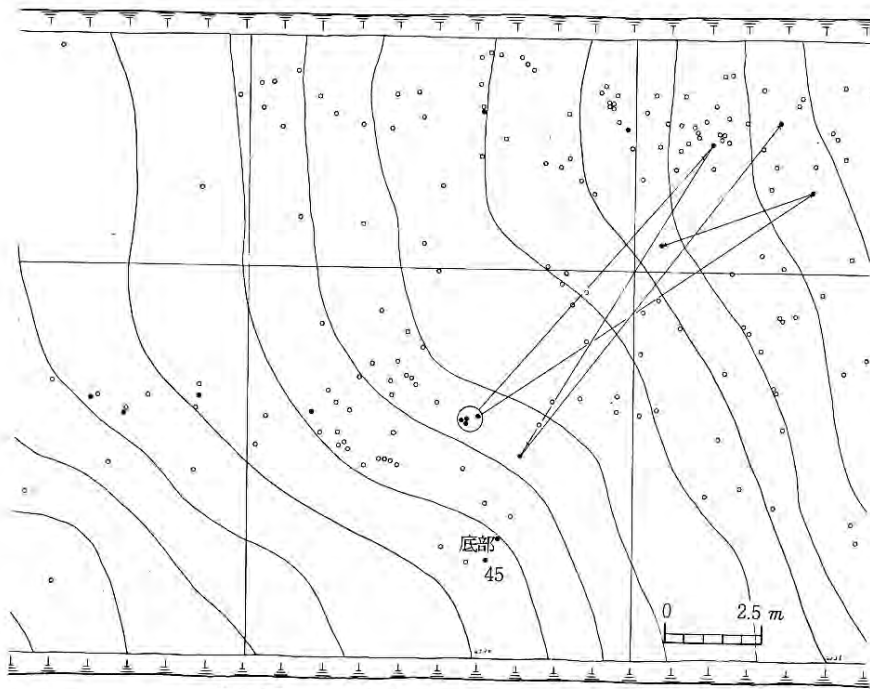


図 1 花ノ木遺跡「遺構・遺物出土実測図」（報告書より一部抜

で出土し、下層より貝殻文土器(下剥峯式土器)、吉田式土器が出土した。下剥峯遺跡の調査を通じて、南九州地域の各遺跡間の基本土層の対比を可能にしたアカホヤ火山灰の重要性が認識された。調査を担当した新東氏は以後、土器編年の見直しだけでなく、アカホヤ火山灰が南九州地域の縄紋文化にどのような影響を与えたのかを追求する研究へとシフトすることになる。

こうした包含層の垂直的な層位による成果とは別に、下剥峯遺跡では出土遺物の平面分布に関しても、意欲的な報告が行われた。図2は、「114土器平面図」である。114土器は、現在でいうところの下剥峯式土器であり、ほぼ完形に復元できるほどの出土量である。ここで注目

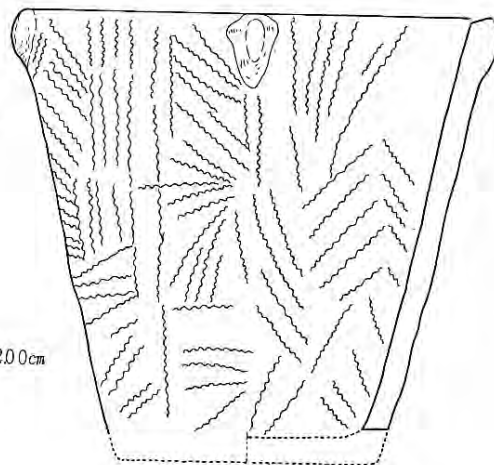
したいのは、ドットマップに接合線が登場したことである。114土器は6-B区にまとまって出土する円形部分を中心に、最大で11mにわたり広域に接合していることがこの図から分かる。報告者の新東氏は、「遺物が破棄されてからⅢ層(赤ボッコ)が堆積されるまでの時期に、相当な遺物あるいは層の流動があったことを示している」と出土状況とその後の堆積状況に関する解釈を行っている。接合線を含むドットマップを提示することで、より客観性の高い調査所見として示すことが可能となった。



第22図 114土器出土平面図 (→印に接合)



第23図 114土器出土状態



第24図 114土器復原図

図2 下剥峯遺跡「114土器平面図」(報告書より抜粋)

③ 型式ごとのドット図の提示と個々の実測遺物との対応関係をドット図に記載

中尾田遺跡（新東ほか 1981）

「第9g・9h類土器分布図」

ドット調査の報告方法がさらに詳細化した事例が中尾田遺跡報告である。中尾田遺跡は、九州縦貫自動車道建設に伴い1978年～1979年に調査された旧横川町所在の遺跡である。縄紋時代早期・中期の遺構・遺物や中世

山城跡と考えられる遺構が発掘された。

中尾田遺跡で注目されるのは、全点ドット調査による包含層出土遺物の報告方法がほぼ確立されてきた点である。現在も見られる分類単位ごとのドットマップ、掲載されている実測遺物との対応関係を示すドットマップ内のナンバーや接合線、さらにドットマップとは直接関係ないが掲載された遺物すべての観察表が提示された。これらは包含層発掘において、全点ドット調査を行った

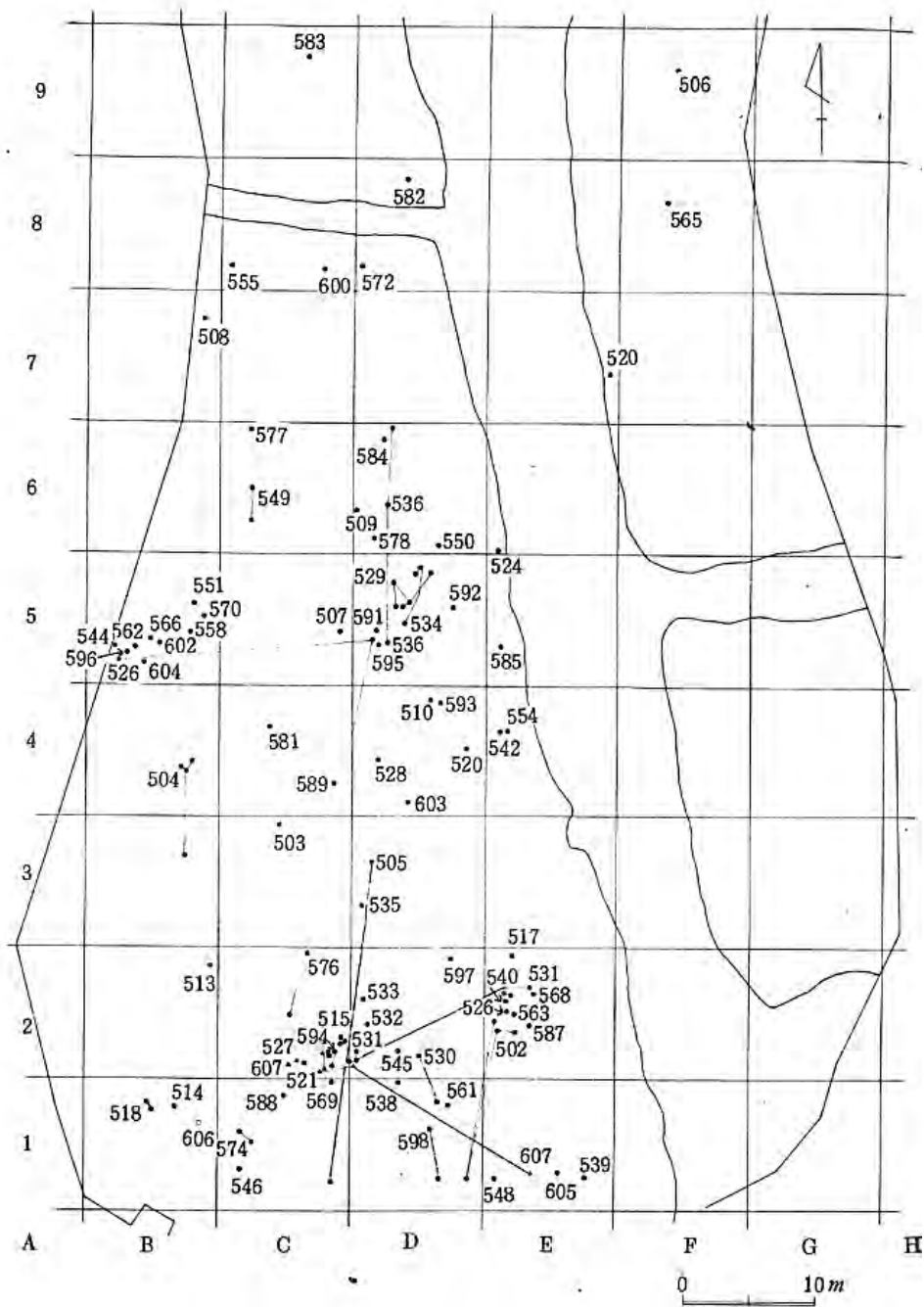


図3 中尾田遺跡 「第9g・9h類土器分布図」(報告書より抜粋)

際に、得られた必要な情報がほぼ盛り込まれているといっている。てびきが指摘する「ドットマップの作成自体が目的化し、本来の明確な目的や問題意識をもたないまま、作業工程として機械的に行う例」(文化庁文化財記念物課 2012)とは、こうした中尾田遺跡報告で提示されたような必要な情報が出揃っていない報告書が該当するのではないだろうか。少なくとも今日においても中尾田遺跡は、手向山式土器を含めた押型紋系土器の出土状況を第三者が検証する際に極めて有効なデータを提示するばかりでなく、新東氏が指摘するように75mの接合距離は、傾斜地における包含層の構造を具体的に考察する手がかりを与えてくれる。

また中尾田遺跡では、他にもいわゆる中尾田Ⅲ類をはじめとした縄紋時代中期末葉～後期初頭を考える上で重要な土器が数多く出土している。春日式土器終末から並木・阿高系土器への接続を型式学的側面だけでなく、出土状況を含めた層位学的側面から考察する上でもローデータとして十分検証に値し、耐える資料ではないだろうか。

④ ドットマップ以外の出土状況を示す手法

石峰遺跡 (河口ほか 1981)

「拡散度」「移行度」「集中度」による土器移動表

中尾田遺跡の報告と前後するが、1981年に刊行された旧溝辺町所在の石峰遺跡の報告では、ドットマップ以外の出土状況を示す手法が提示された。石峰遺跡も中尾田

遺跡同様、九州縦貫自動車道建設に伴い1975年～1978年まで調査された。旧石器時代から縄紋時代早期・前期を中心とした遺跡である。旧石器時代(報告では先土器時代)に関しては、出土状況図にはドットマップが用いられているが、縄紋土器に関しては、平面分布に関して、土器移動表とよばれる独自の手法が提示された。表1がそれである。この表によれば各土器型式ごとの出土状況のマクロな傾向をつかむことができる。マクロな傾向とは、ドットマップが個々の遺物の2次元的出土位置を示しているのに対して、土器移動表では、10mのグッド単位の大まかな移動傾向が基準となっている。河口貞徳氏の作成したこの表の「拡散度」とは、土器の個体または型式が10m四方の区画を1として広がった範囲を数字で示したものである。また、「移行度」とは土器の個体または型式が、上下に移した度合を地層の数で示したものであり、「集中度」とは、土器の個体または型式が、破片として移行した結果、最も多く土器片が残留する層の土器片の数を%で示したものである。当時、縄紋時代早期では古手に位置づけられていた石坂式土器から晩期の土器まで型式ごとにまとめられ、その平面的な広がり、垂直分布のピークをコンパクトにまとめ上げている点の特徴である。開地遺跡での出土状況が貝塚遺跡や洞穴遺跡に比べ安定しないといわれながらも石峰遺跡では、垂直分布に関しては、河口氏の編年観にほぼ沿うような形で出土していることが看守できる。

挿図番号	71	72	72	71	69	74	74	75
遺物番号	5	7	8	6	2	11	12	13
完・否	完	完	完	完	完	完	完	完
型式名	石 坂	楕円形 押型	菱形 押型	円筒形 条痕	手 向 山	平 楕 (小)	平 楕 (中)	平 楕 (大)
拡散度	5	1	7	2	4	1	2	5
移行度	4	1	5	4	5	4	3	5
集中度	1層	IVb中	IVa~IVb	IVa上	IVa下	IVa下	IVa下	IVa下
	%	47	100	38.5	50	48.7	49	57
集中度	2層	IVb		IVa上		IVa下	IVa下	IVa下
	%	32		45		54	69.2	60.9
出土状況	D E 7 2 8 19 7 9 9 1	E 8 29	B C D E 4 1 5 9 1 1 6 1 6 44	F G 6 5 7	D E F 4 6 15 61 5 6 1	B 9 52	C 6 82 7 18	B C D E 5 21 1 6 6 80 3

表1 石峰遺跡「土器移動表」(報告書より抜粋)

⑤ 竪穴住居内の出土状況の提示

王子遺跡(立神ほか 1985)

「4号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状況」

谷添遺跡(下大川ほか 2000)

「遺物接合図」「1号竪穴住居内の遺物出土状況」縄紋時代ではないものの竪穴住居出土遺物がどのように報告されていたのか見てみたい。余談ではあるが小林謙一氏によると、関東地方では1978年頃、竪穴住居の十

字ベルトによるセクション観察と、覆土上下層の線引きは常識化していた一方で、遺物の取り上げは住居以外はグリッド単位や住居を四分割した覆土中一括取り上げが普通であったという(小林 2012)。本県の行政発掘開始当初から遺構内にセクションベルトが設定されていたことは報告書の写真図版などからも確認できる。遺構内の取り上げもおそらく包含層同様に平板測量とレベル機材による測定を併用し、3次元的出土位置が記録されていたと推察される。

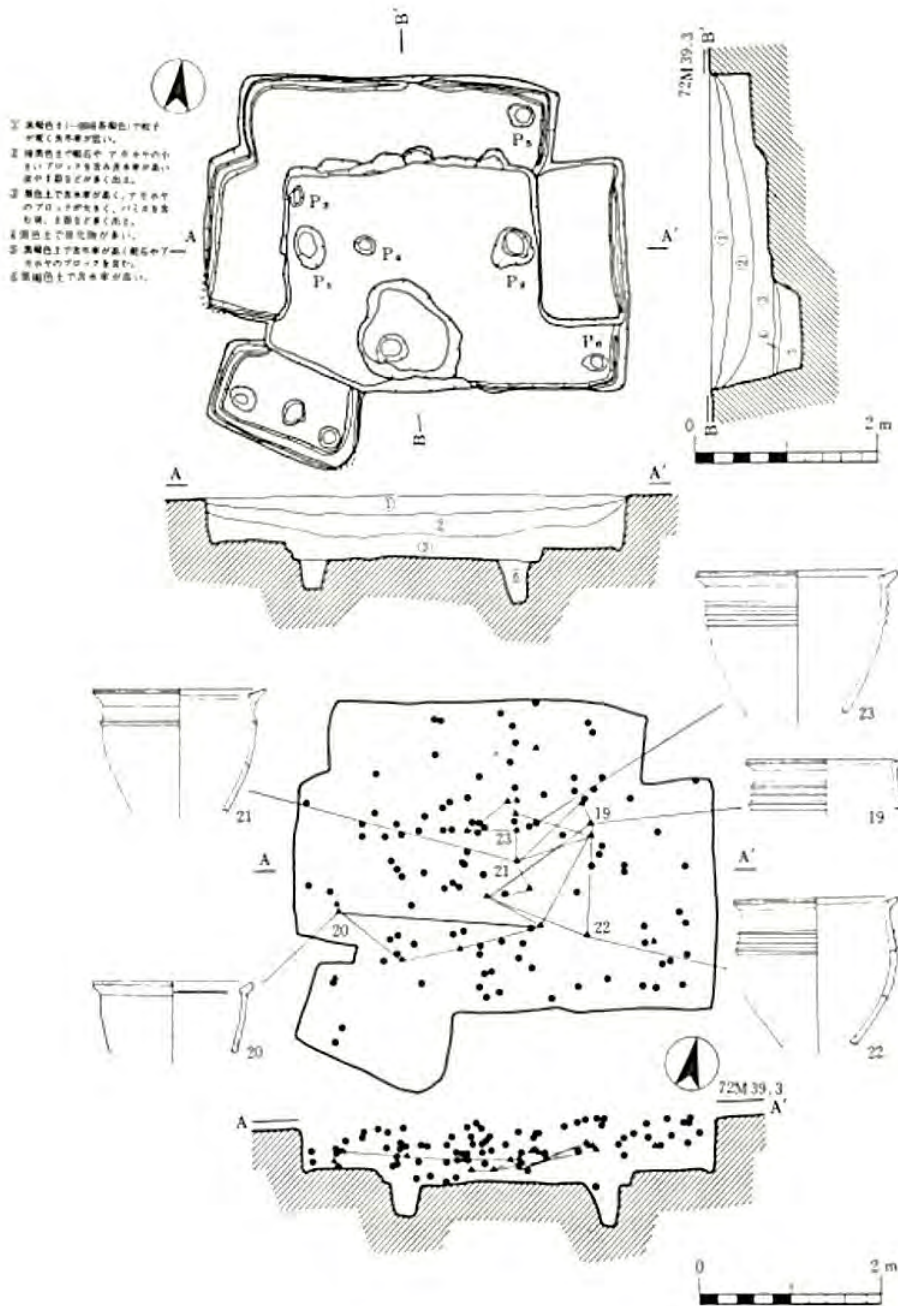


図4 王子遺跡 「4号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状況」(報告書より抜粋)

当時鹿児島県の先史時代の集落遺跡での調査において、  
 竪穴住居内の埋土の堆積状況と出土遺物の出土位置が  
 示されている好例は王子遺跡の報告であろう。王子遺跡  
 は、国道 220 号バイパス建設に伴い調査された弥生時代  
 中期の集落遺跡である。南九州では比較的規模が大きく  
 多様な集落跡があったことから保存運動にまで発展し  
 た遺跡である。王子遺跡の報告では、竪穴住居ごとに  
 遺構内の埋没過程を示すセクション図と遺構内出土遺

物の平面・垂直分布と接合関係が示されている。図 4 は、  
 4 号住居跡の遺物出土状況である。垂直分布の投影範囲  
 が不明であることや接合線と図化されている接合した  
 と思われる完形土器との関係が今ひとつ判然としない  
 が、遺構内の③層とされた床面直上の堆積層中に出土遺  
 物が少ないことが分かる。つまり出土遺物は、4 号住居  
 の埋没が始まり床面近くが微凹地上になっている状態  
 のところに廃棄されている可能性があると考えられる

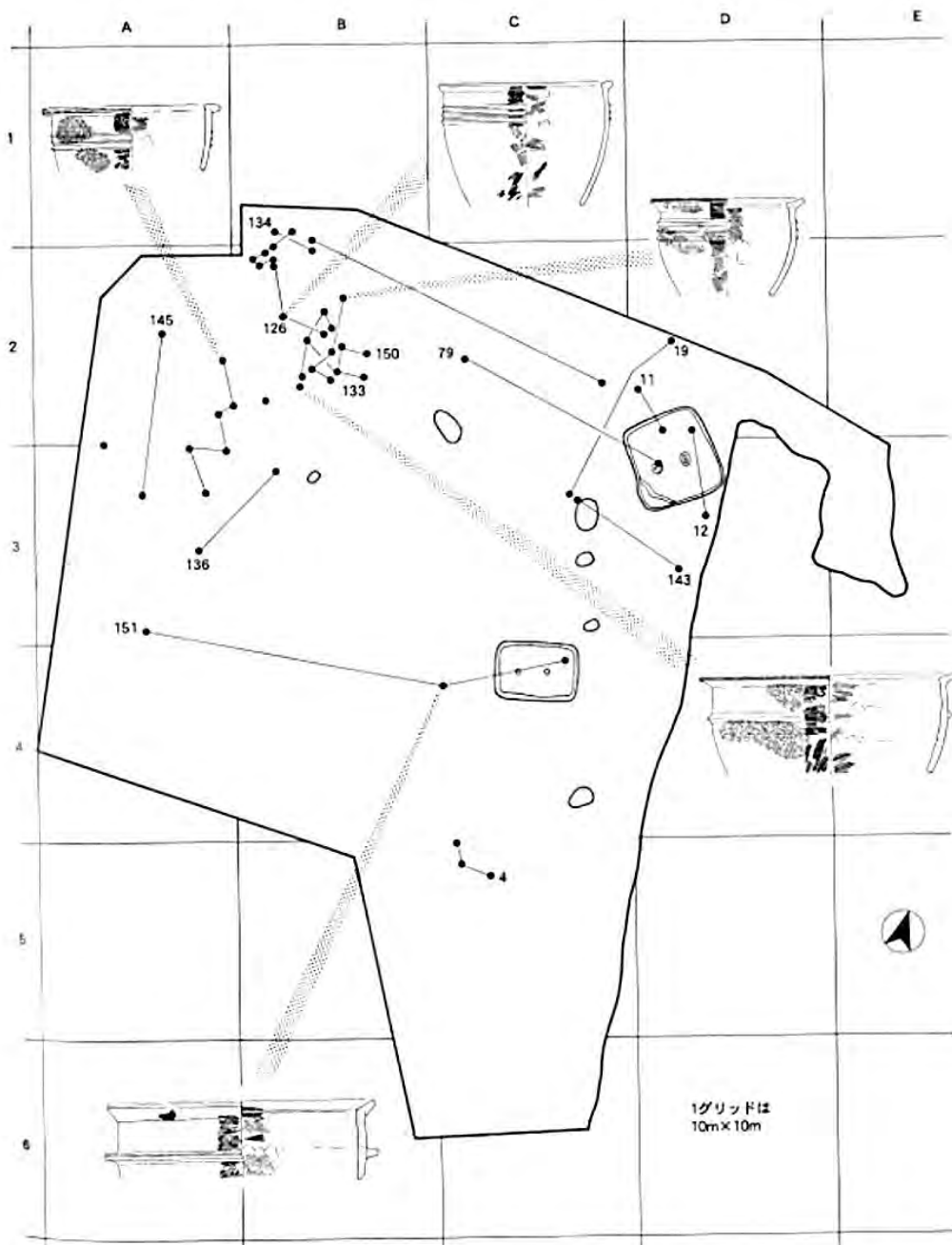


図 5 谷添遺跡 「遺物接合図」 (報告書より抜粋)

出土状況である。残念ながら報告書には、遺構内の堆積状況、遺物出土状況に関する記述は乏しいが写真図版を見る限り遺物が床面から高い位置で出土していることが分かる。出土土器の多くが4号住居の廃絶時の直接的な年代を示す可能性は低いと言える。王子遺跡は山ノ口

式土器の一時期に収まる比較的短期間で廃絶されたとされる集落遺跡である。ただ一時期の集落景観はどの程度あったのか、竪穴住居の切り合いもなく、遺構間の出土遺物の接合関係等が分からないため、厳密には不明と言わざるを得ない。

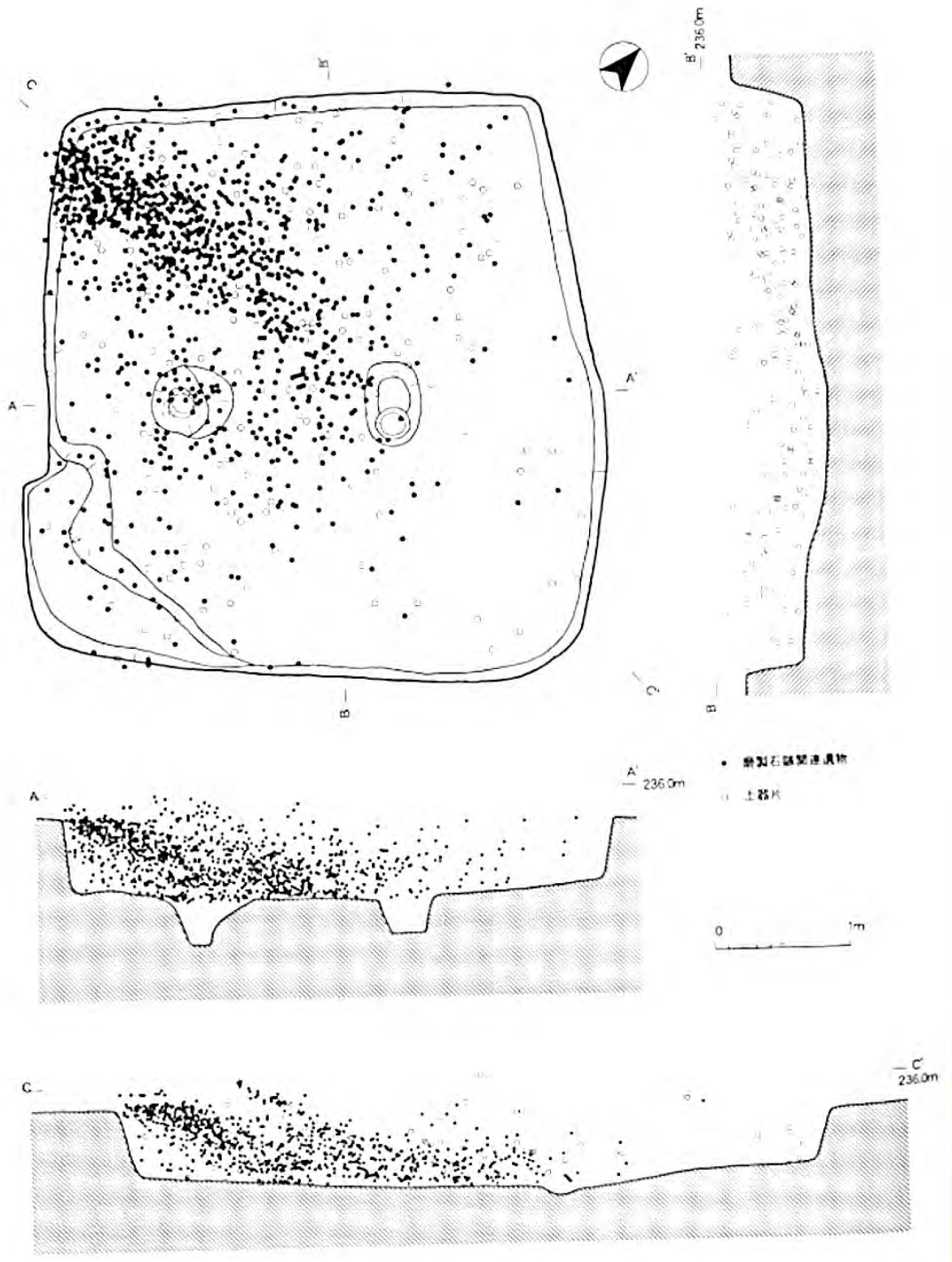


図6 谷添遺跡 「1号竪穴住居内の遺物出土状況」 (報告書より抜粋)

調査としては、やや後になるが 1998 年に発掘し、2000 年に報告書が刊行された旧根占町所在の谷添遺跡(下大川ほか 2000)では、2 基の弥生時代中期の竪穴住居と遺構外出土遺物との接合関係が示されており(図 5)、報告にあるように高地性集落かどうかはともかくとして、台地縁辺部西側の平坦地と竪穴住居が有機的な関係にあることを想起させるような出土状況である。なお、谷添遺跡 1 号住居(図 6)は、磨製石鏃を製作した際の剥片・破片類と考えられる遺物が北西方向から中央部にかけて流れ込むように遺物が入り込んだとされている。垂直分布にあるように流入状況には大きく 2 パターンあり、間層に暗紫ゴラに該当する部分が含まれており、竪穴住居跡の凹地を利用して、開闢岳の暗紫ゴラが降下する前

後 2 時期にわたり磨製石鏃が行われたと考えられている。遺構内の遺物は前述の関東地方で見られたような遺構一括取り上げが行われている事例が現在でも少なくない。そうした中であって遺構内外の個々の出土遺物の出土位置の記録化に努め、当該遺跡の遺構廃絶を含む土地利用の痕跡(黒尾 1995)を出土状況の分析を通じて時系列的に雄弁に語ってくれた好例といえよう。

その後、縄紋時代の集落遺跡においても、草創期の三角山 I 遺跡や早期前葉の上野原遺跡(第 IV 工区)、定塚遺跡などで竪穴住居と遺構内外の遺物出土状況に関する事例が見られるようになった。これらの縄紋時代の集落遺跡に関しては別稿で述べたい。

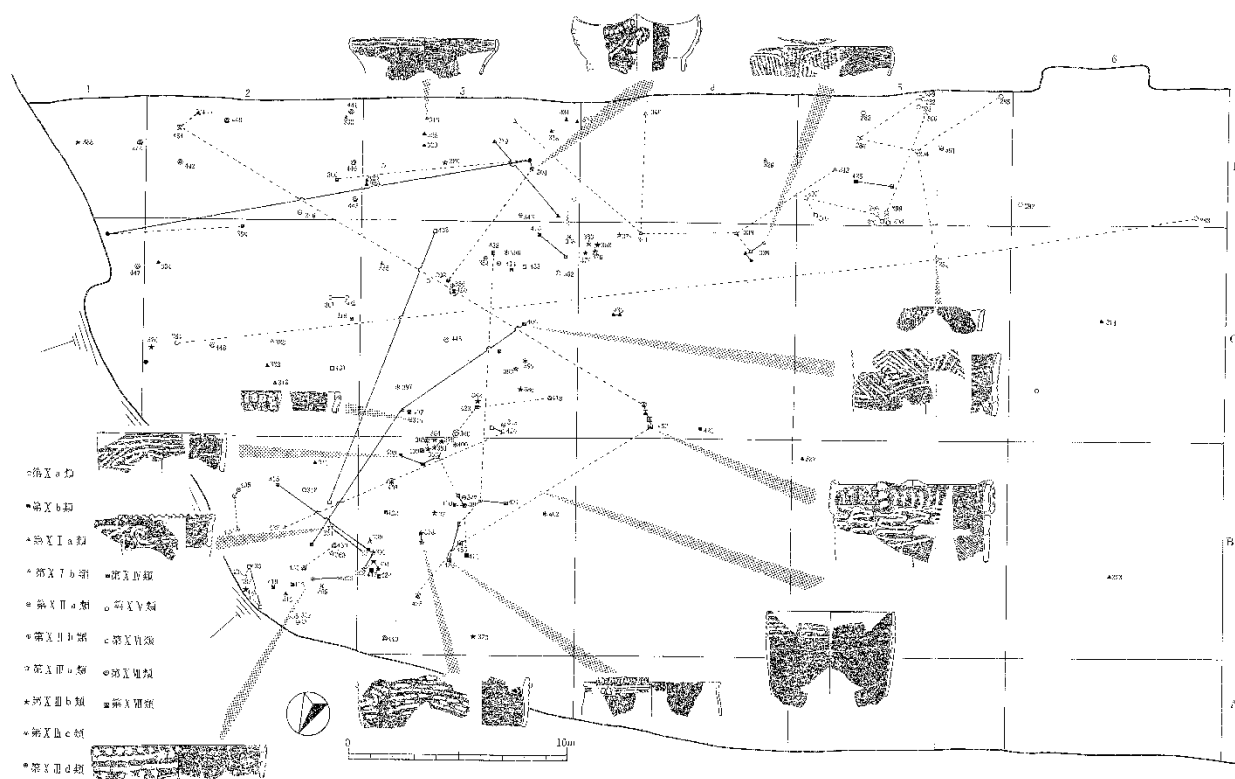


図 7 榎木原遺跡 「縄文第 X 類～第 VIII 類土器の出土状況」 (報告書より抜粋)

⑥ 包含層内での出土状況に関する分析

榎木原遺跡(弥栄ほか 1987)

「縄文第X類～第XVIII類土器の出土状況」

南九州地域において、縄文土器の編年を推定する際に、時期的なまとまりを担保してくれるような良好な竪穴住居や土坑出土資料、貝塚遺跡や洞穴遺跡に見られるような一括資料の出土が乏しいのが現実である。この40数年来多くの開地遺跡を発掘しながらも、縄文時代の遺跡において、竪穴住居が検出される例は決して多くない。本県の竪穴住居の検出数は、西日本の他地域に比べ比較的多いものの、確認出来る多くは早期前葉と後期以降に限られている。この竪穴住居を主体としない集落形態こそが、むしろ西日本の縄文時代の多くの時期の特徴かもしれないことが近年の研究で明らかになりつつある。

そこで、遺構出土遺物を含めた良好な一括資料に恵まれない場合、西日本では土器編年研究を行う際に、型式学的にまとまりのある遺跡や出土地点ごとの引き算(千葉 2008)によって推定することがある。

地点ごとに出土遺物が平面的にまとまる包含層での出土状況に関し、分析が行われたのが鹿屋市所在の榎木原遺跡である。榎木原遺跡は国道269号線高須バイパス建設に伴い、1985年に調査が行われ、1987年に報告書が刊行された。縄文時代早期から中・近世にかけて多くの遺構・遺物が出土した。榎木原遺跡では、分類された縄文時代から弥生時代の遺物出土状況がドットマップに接合した個体の実測図とともに掲載されている。平面分布により土器型式間に偏りが見られることが顕著な例が図7に示した「縄文第X類～第XVIII類土器の出土状況」である。九州の縄文時代中期の代表的土器であった並木・阿高系土器の編年研究が揺らぎ始めた時期で、旧松山町所在の前谷遺跡(中村 1986)での出土例をはじ

め、それまで縄文時代前期に位置づけられていた春日式土器と瀬戸内地方に分布の中心があると考えられていた中期の船元系土器との共時性が注目されるようになった。そうした状況で、それまで定説化されていた並木・阿高系土器と船元系土器の共時性を疑うような事例が、榎木原遺跡での平面分布である。第X類が船元式土器、第XI類が春日式土器、第XII・III類土器は阿高系土器と分類されている。分布の中心の在り方に大きく2つのパターンがあると分析している。一つは、船元式土器と春日式土器がC・D-2～5区に収まるまとまり、もう一つは阿高式土器がB・C-2・3区にまとまっている。このような平面分布の相違は、時間的相違を含めて何らかの相互関係を検討する資料にはなり得ると報告者の前迫亮一氏は締めくくっている。

榎木原遺跡報告は、並木・阿高系土器と船元系土器が時間的に併行しないことを示したばかりでなく、各時期の遺物出土状況に関して詳細に言及している点が特筆するところである。

⑦ 垂直的な層位が良好な遺跡での全点ドット事例

一湊松山遺跡(堂込ほか 1996)

「5層出土土器出土状況」

かつて原位置論が一世を風靡していた1960年代後半から70年代初めにかけて、集落遺跡の調査において原位置の記録よりも層位の把握が重要であるとの認識で住居遺物の出土遺物の層位別取り上げを徹底した調査と整理を行い、すぐれた成果を挙げたのが千葉県貝の花貝塚の発掘調査であったという(小林 2003)。

また、1994年日本考古学協会総会において小林謙一氏や黒尾和久氏らの全点ドット調査による成果発表に対し、里浜貝塚での調査経験を持つ岡村道雄氏が「点を取

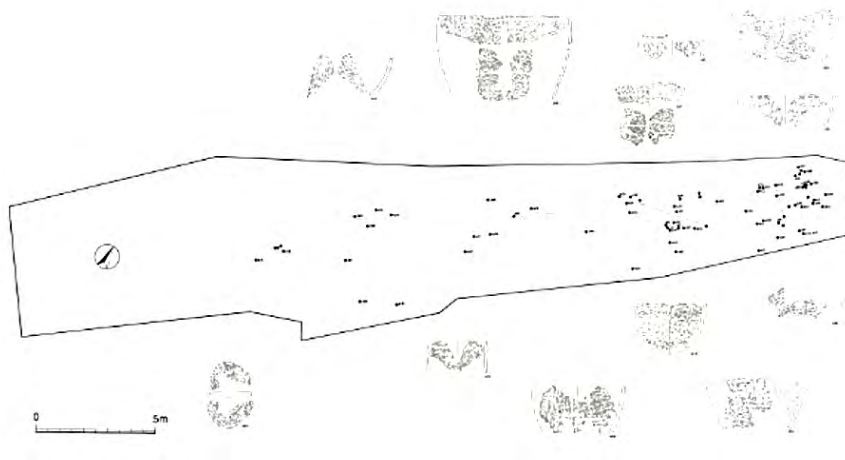


図8 一湊松山遺跡 「5層出土土器出土状況」 (報告書より抜粋)

らなくてもきちんと分層発掘をすれば同じ結果が導き出せるのではないか・・・。」といった趣旨の発言があったという(瀧瀬 2007)。開地遺跡と竪穴住居内や貝塚遺跡での層位を混同するつもりはないが、何層もの間層にパックされたような垂直的な層位が良好な遺跡や遺構等においては、全点ドット調査の実施を軽視する観が一部ある。

垂直的な層位が良好な遺跡で分層された結果、同一の層より複数の系統の土器が出土し、その時間的關係をどのように考えるかを示してくれた南九州地域での事例の1つが1993年～1995年に調査が行われ、1996年に報告書が刊行された旧上屋久町所在の一湊松山遺跡である。一湊松山遺跡は縄紋時代前期～後期にかけての砂丘遺跡で、途中無遺物層を挟みながら18層で構成されている。縄紋時代前期の曾畑式土器の変遷過程が層位的に確認出来た点や深浦式土器内の細別時期に関する層位的裏付けが取れたことなどが成果として挙げられる。

層位ごとに出土状況と遺物の報告が行われている。各層位ごとの平面分布より集石遺構や石斧のデポなどの遺構と出土土器との重なりが当時の生活空間を想起させる。

その一方で、これだけ層位的に良好な遺跡においても曾畑系土器と条痕紋系土器群との層位的な分離を行うことができなかった。図8は第5層出土土器出土状況である。深浦式土器、条痕紋土器、曾畑系土器が同一層位の比較的近いエリアで出土している。一般に、開地遺跡において異系統土器もしくは型式学的に異なる土器群間の共伴(もしくは伴出?)を同一包含層内での平面分布が近接するという理由だけで傍証することは、方法論上も運用上も危うい。条痕紋系土器群は、その型式内容が無紋土器と同様に乏しいため曾畑式土器や深浦式土器との折衷土器も確認し得ないため、型式学的観点から同時性を説明することは難しい。報告者の堂込秀人氏は曾畑系土器と条痕紋土器が併行する段階と条痕紋土器が単独で後続する時期が1時期存在すると分析する。この段階は、近年堂込氏がまとめた曾畑式土器終末と轟D式土器成立から尾田式土器への変遷の過程(堂込 2013)に該当する時期でもある。

いずれにせよ、垂直的な層位が良好な遺跡においても全点ドット調査を行うことにより、分層したまとまりを、さらに平面分布を有機的に加味することにより、時間的關係をより客観的に考察できるのではないだろうか。南九州地域の縄紋時代前期後葉から中期初頭の型式と層位を考える上でも、平面分布も含めた当該時期の土器群の併行関係に関しては、次号で述べたい。

### 3 まとめドット調査の有効性と問題点①

以上、行政発掘が本格化した1970年代から1990年代の全点ドット調査に関する本県の特徴的な調査事例を駆け足で概観してきた。調査者、報告者の意図するところと異なる点が多々あるかもしれない。また、抽出した事例も網羅的に確認した上でないこともご寛恕いただきたい。そして、2000年代以降デジタル機器やソフトが導入されてから大量のデータ処理が可能となってからの調査事例に関しては、触れられなかった。

今回取り上げた全点ドット調査は、出土状況をどのように客観的に提示するかを模索した方法の1つに過ぎない。そして繰り返し述べるように特定の調査法を無条件に導入する必要はない。当然のことであるが、発掘調査においては、その目的・性格、期間や経費など様々な観点から調査法が決定される。

そうした前提に立った上で本県では、これまで数多く全点ドット調査を実施してきた。今回概観した調査成果は、全点ドット調査の有効性を示す一部に過ぎない。逆説的になるが、良好な遺構や層位に恵まれなかったからこそ、全点ドット調査により、その地域の土地利用の痕跡を探ることができた例もある。

一方で、全点ドット調査には多くの問題点があることも事実である。一番大きい問題点は、出土遺物の出土層位の認定である。大村裕氏は、佐原眞氏が行政発掘を視察する中で感想を紹介している(大村 2011)。佐原氏が発言した部分を引用(佐原 2005)すると、「現在日本各地で、たくさんところで発掘が行われています。考古学研究者みずからではなく、おじさん・おばさんが掘っています。発掘品はしばしば土の柱の上に乗っかった状態においてあります。大規模の発掘で、どこまで土の柱に乗っかっていてどの層のものか正しく認識して取り上げることができるのかなあと疑いの目で見えてしまうことがあります。」

これは、遺物取り上げを行う際の各遺物に出土区や層位、日付などを記したラベル付けを行う前の発掘作業風景に近い。

前迫亮一氏は、P11といわれる桜島起源のテフラが堆積した遺跡において、開地遺跡での層位認定の難しさを「完全な一次層として大地をパックするようなテフラならともかく、パミスの濃淡等でその存在を把握できるような状況の場合、土層断面では境界線が引けても、実際の面調査の際にはまだら模様のしか把握できない場合がある。このような場合に遺物の出土層位をどう把握し記録するかについては、かなり慎重な判断が必要となる」と指摘している(前迫 2009)。

2者は、開地遺跡での層位認定と調査者との関係を異なる視点から述べたものである。層位の認定の難しい事例は多々ある。面調査を広域に行っている際、近くに土層観察用のセクションベルトがない場合、層位の変わり目付近の出土遺物の出土層位認定が困難な場合があることを多くの調査員が経験している。一度認定された出土遺物の層位は、遺物を取り上がった後ではよほどのことがない限り変更されることはない。出土遺物のドットの副情報として層位は記録されていく。数量的に安定し、出土層位に一定の傾向が定まっているような遺物であればさほど問題ないかもしれないが、編年の時間的位置が微妙な遺物であったり、出土量の少ない遺物だった場合は、出土層位の認定がわずかに異なっても、時として重大な解釈誤認を起こすことにも繋がりがかねない。ただ、これはドット調査というよりも大規模な開地遺跡の調査の問題点かもしれない。

次に平面分布に関する問題点である。等高線がドットマップに示されていない場合に、特に注意すべき点であるが、地形の傾斜によっては、遺物が低い場所でまとまる可能性がある。こうした地点で、仮に型式学的に異なる遺物がまとまって出土してもただちに相伴とすることはできない。旧地形の状況を十分加味した上で出土状況を考えなければならない。これは垂直分布を投影する場合でも同じことである。どのような地形なのか、垂直分布を投影するエリアが広いと純粋な垂直堆積以外に地形の制約を受けた堆積状況が投影される場合がある。

最後に、ドットマップの提示に関する問題点を挙げておきたい。多くの労力と経費をかけて取り上げた遺物もどのように情報を出力するかでその活用範囲が異なってくる。出土遺物のドットマップが出力されているだけでは、全点ドット調査を行う必要性は半減する。ドットマップの利点は出土状況を追証できることにある。そのため、分類された遺物ごとのドットマップの提示に終わらず、せめて掲載遺物との対応関係や観察表に出土位置の3次元座標、出土層位が記載してあれば、検証する側はそれらのローデータを駆使して各々のテーマに即した分析が可能となってくる。そして、全点ドット調査が大きくその効力を発揮するのが、接合関係に基づく遺物や遺構間の時間的関係の復元である。接合作業も多くの時間と労力を要するが、接合線1つ増えることで遺跡の形成過程の見方が深まってくる場合もある。

一般に分類ごとの差は、ドットの種類や色を変えて出力することにより違いが分かる一方で、ポイントの大きさを統一した場合、遺物の大きさや重量に関しては等質化されてしまい、ドットマップの読図を見誤る可能性がある。比較的大型破片同士が広域に接合するパターンと

大型破片を中心に周囲に小破片が接合するパターンでは、表現されるドットと接合線の違いが見いだせない場合がある。この問題は、大きさや重量を階級ごとに区分し、それをドットに反映すれば解決できるもののそういう配慮がなされていない場合の読図は注意すべきであろう。

以上、全点ドット調査の問題点をいくつか挙げてみた。

#### 4 おわりに

全点ドット調査を行い、報告書に成果を掲載するまでには多くのハードルが存在することも事実であるが、今一度その意義と有効性と問題点を振り返り、今後の調査に活かしていきたい。今回はかなり偏った取り上げ方で不備な点も多い。特に前半の類例列挙は新東氏の論考(新東 1984)によるところが大きい。改めて氏の発掘調査に対する意識の高さと先見性を認識することになった。また、今回小稿の執筆に際して、行政発掘開始期に関して、上田耕氏、新東晃一氏、立神次郎氏、堂込秀人氏、長野眞一氏、中村耕治氏、前迫亮一氏に、全点ドット調査について有馬孝一氏、今村結記氏、尾川満氏、額額茂氏、小林謙一氏、健石徹氏、辻明啓氏、福永修一氏、馬籠亮道氏にご教示いただき。記して感謝したい。

#### 【註】

- 1 点取り調査のどこまでを全点ドット調査というのか不勉強のため判然としないが、小林謙一氏が近年山梨県大日野原遺跡で出土位置を記録した遺物は、表土以外の包含層・遺構内の土器、石器は全点、自然礫は500円玉以上の大きさの資料であるという(小林ほか2013)。本県の行政調査においては、自然礫の取り上げに関しては、ケースバイケースであるが、概ね全点ドット調査と呼ばれる調査の範疇に含まれるのではないだろうか。
- 2 大村裕氏による論考(大村 2012)により、山内清男氏の『縄紋』が本来的な学術的な概念定義の上にある語であることを知った。この趣旨に乗っ取り、特に引用等でない場合、地紋や文様要素には「紋」を、一定の文様要素により表出された模様には「文」を用いたい。
- 3 調査初期の頃は、平板測量による出土遺物の出土位置の記録以外にも、通常の遺構実測のように遣り方測量により出土位置の記録を行い。その際は、遺物の裏表の向きや形体等も記録していたという。
- 4 てびきではドットマップの作成とあるので、全点ドット調査そのものを指している訳ではないので、ニュ

アンスが少し異なる可能性もある。

- 5 本稿で指す南九州地域とは、鹿児島県本土、都城以南の宮崎県南部、人吉地方以南の熊本県南部の地域である。しかし、こうした先験的な地域区分を所与のものとした考古学の分析はあくまでも前提的な仮説作業と解すべきである（小杉 1995）。
- 6 水ノ江氏の解釈は佐々木藤雄氏が指摘するように時代性や地域性を無視した恣意的・主観的な分析の観はどうしても否めないという点に同調する。出土遺物の出土状況に類似性が見られようとも竪穴住居も検出されない中で関東地方の縄紋時代中期に見られる「巨大環状集落」と対比する点や中央の空白域を墓域と断ずるなど根拠が不明確である。
- 7 ここでは、縄紋時代草創期～中期までをさす
- 8 当時はまだ、アカホヤ火山灰層を鍵層に縄紋時代早期～前期の土器編年が再編成される前で、塞ノ神式土器は前期に比定されていた。
- 9 現在は、これらの土器は轟 B 式土器ではなく、野久尾式土器といわれる一群に比定される。相美伊久雄氏は、縄紋時代中期初頭に位置づけている（相美 2010）。

#### 【参考文献】

- 麻生 優 1969 「「原位置」論序説」『上代文化』第 38 号
- 麻生 優 1975 「「原位置」論の現代的意義」『物質文化』24
- 大村 裕 2011 「山内清男の層位論的研究法」『縄紋土器の型式と層位』
- 大村 裕 2012 「縄紋と縄文」『日本先史考古学史の基礎研究 新装版』
- 黒尾 和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的研究（1）」『論集 宇津木台 第 1 集』
- 額綱 茂 2007 「縄文時代集落研究の新地平（東海版）」『セトルメント研究』6 号
- 小杉 康 1995 「土器型式と土器様式」『駿台史学』第 94 号
- 小林 謙一 2003 「縄紋竪穴住居調査史の一断面」『下総考古学』17
- 小林 謙一 2012 「縄紋時代住居調査学史」『縄文研究の新地平（続々）』
- 小林謙一・矢嶋良太・小澤政彦 2013 「三次元全点ドット情報システムによる縄紋集落の分析に向けて」『日本考古学協会第 79 回総会研究発表要旨』
- 相美伊久雄 2010 「九州南部における中期前葉土器の現状と課題」『九州の縄文時代中期土器を考える 発表要旨・資料集』

- 佐々木藤雄 2014 「改めて縄文集落研究の新地平とは何か」『異貌』第 31 号
- 佐原 眞 2005 『考古学への案内』
- 新東 晃一 1984 「南九州の縄文時代包含層の構造」『調査研究報告』補説
- 新東 晃一 1994 「南九州の縄文草創期・早期の特色」『考古学ジャーナルNo.378』
- 新東 晃一 2006 「旧石器から縄文へのダイナミズム」『南九州に栄えた縄文文化・上野原遺跡』
- 千葉 豊 2008 「型式学的方法①」『歴史のものさし』縄文時代の考古学 2
- 堂込 秀人 2013 「曾畑式土器の展開～轟 D 式土器の祖型式の設定～」『鹿児島考古』第 43 号
- 文化庁文化財記念物課 2012 「表土の掘削と包含層の発掘」『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』
- 前迫 亮一 2009 「火山噴火と遺跡群②」『大地と森の中でー縄文時代の古生態系』縄文時代の考古学 3
- 水ノ江和同 2012 「九州の縄文集落を構成するさまざまな遺構」『九州縄文文化の研究』
- 八木澤一郎 2003 「上野原遺跡第 10 地点検出の「環状遺棄遺構」について」『研究紀要 縄文の森から』創刊号

#### 【引用報告書】

- 河口貞徳ほか 1980 「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（12）
- 下大川司ほか 2000 「谷添遺跡・出口遺跡」『根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』（10）
- 新東 晃一ほか 1978 「赤木遺跡 下剥峯遺跡 大四郎遺跡 内和遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 新東 晃一ほか 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（15）
- 諏訪昭千代ほか 1975 「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（1）
- 立神 次郎ほか 1985 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（34）
- 堂込 秀人ほか 1996 「一湊松山遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（19）
- 中村 耕治ほか 1986 「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財調査報告書』（1）
- 中村 耕治ほか 2002 「上野原遺跡（第 10 地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（28）
- 弥栄 久志ほか 1987 「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（44）



# 宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野 眞一

Miyanoue site's pottery group in the first half of the end of the Jomon

Nagano Shinichi

## 要旨

宮ノ上遺跡で岩崎上層式土器を再確認し、薩摩半島における岩崎上層式土器の分布域を、“薩摩半島の脊梁山地の裾野”として提示する。

キーワード 岩崎上層式土器

## 1 はじめに

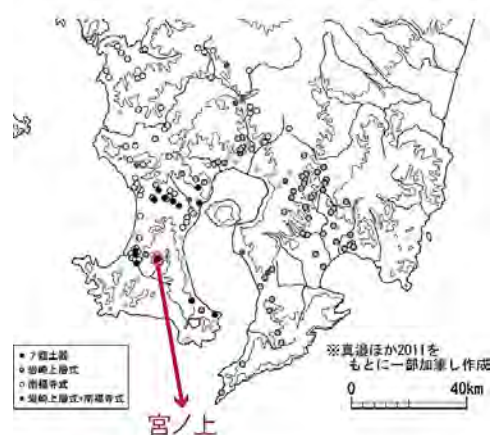
宮ノ上遺跡〈註1〉の縄文時代については、「宮ノ上遺跡縄文時代編」〈註2〉で報告し、大量の縄文時代後期前半とされる岩崎上層式土器が出土していること、そして、それらが遺跡の主体を形成していることを報告した。

## 2 阿高式土器及び岩崎式土器

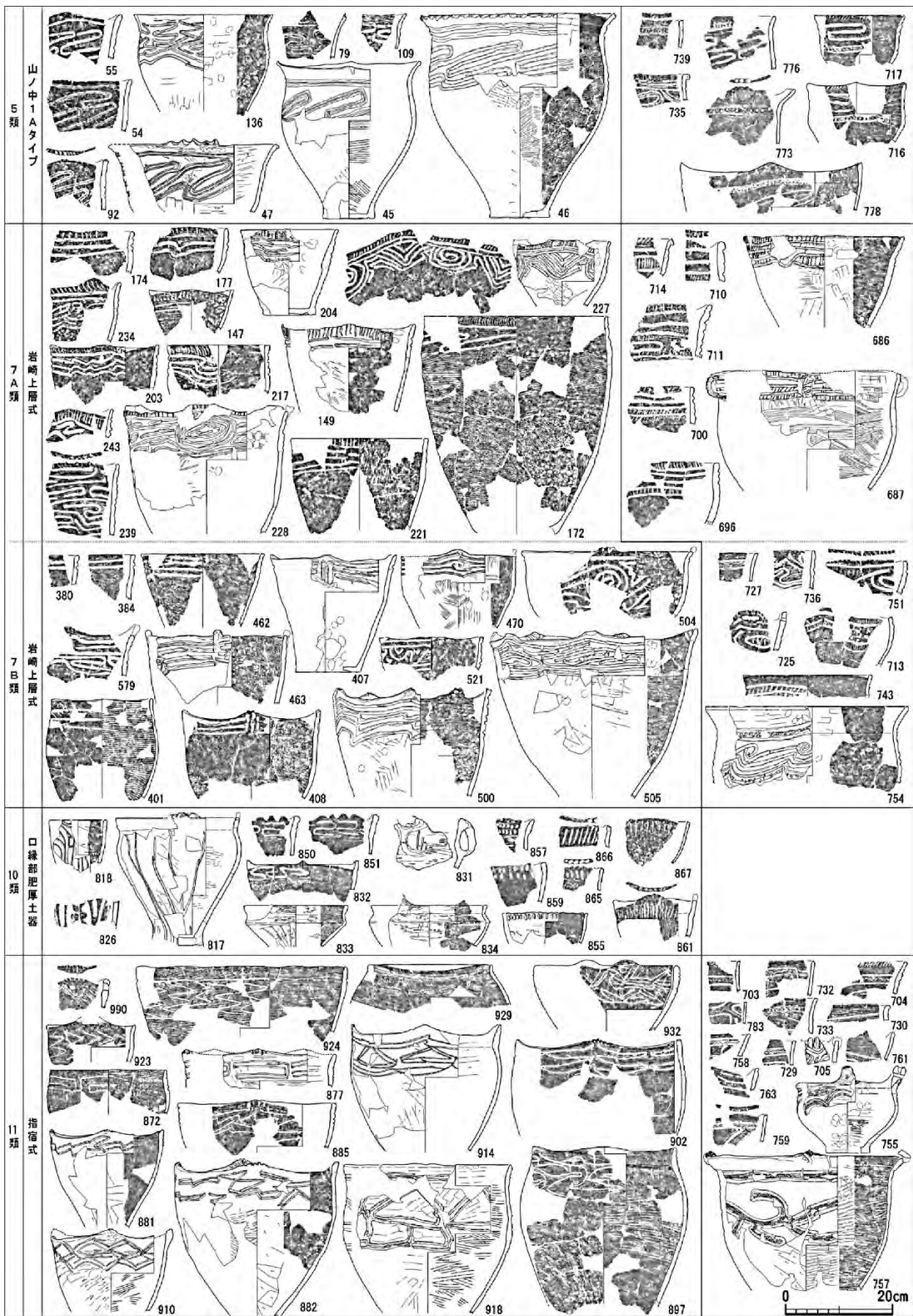
縄文時代後期前半、八代海沿岸地域の出水平野や川内川流域を中心とする薩摩半島北部から鹿児島湾奥部は、前時代の阿高式土器文化を源流とする南福寺式土器や出水式土器が分布圏を形成していることが知られている。そして、近年に至り、甕島の中町馬場遺跡、薩摩半島中央部の日置市上ノ平遺跡や、半島南部の万之瀬川流域の南さつま市下水流遺跡、芝原遺跡等とその分布が拡大してきている。他方、大隅半島は、岩崎式土器や岩崎上層式土器〈註3〉、綾土器等の条痕整形を基盤とする強固な分布圏を形成している。この時期を代表する遺跡が末吉町宮之迫遺跡で、器面全域に凹線文を施すものをA類、口縁部に半月形の凹線文を巡らすものをB類、胴部上部から口縁部に幾何学や並行沈線文を施すものをD～K類として区分した。A類からは凹線文使用の阿高式土器の影響が、B類・D～K類からは沈線文を多用する阿高Ⅲ式土器の影響が、さらにB類からは岩崎式土器が、D～K類からは岩崎式土器及び岩崎上層式土器の成立から発展段階が看取された。また、志布志市中原遺跡では宮之迫A類は欠落するが、中原Ⅱ類やⅢ類に宮之迫B～K類が直接反映されていることから、両遺跡に重複した期間があった可能性を示していた。その他、志布志市倉園B遺跡では宮之迫A類のみが単独に出土し、曾於市桐

木耳取遺跡では7類に細分し、それぞれが阿高式～岩崎上層式土器の各土器に対比可能とした。このように、大隅半島での岩崎式土器及び岩崎上層式土器文化の定着が明らかになると同時に、近年では、清武川上流域の宮崎平野の内陸部にもそれらが大きく展開する実態が明らかになってきている。

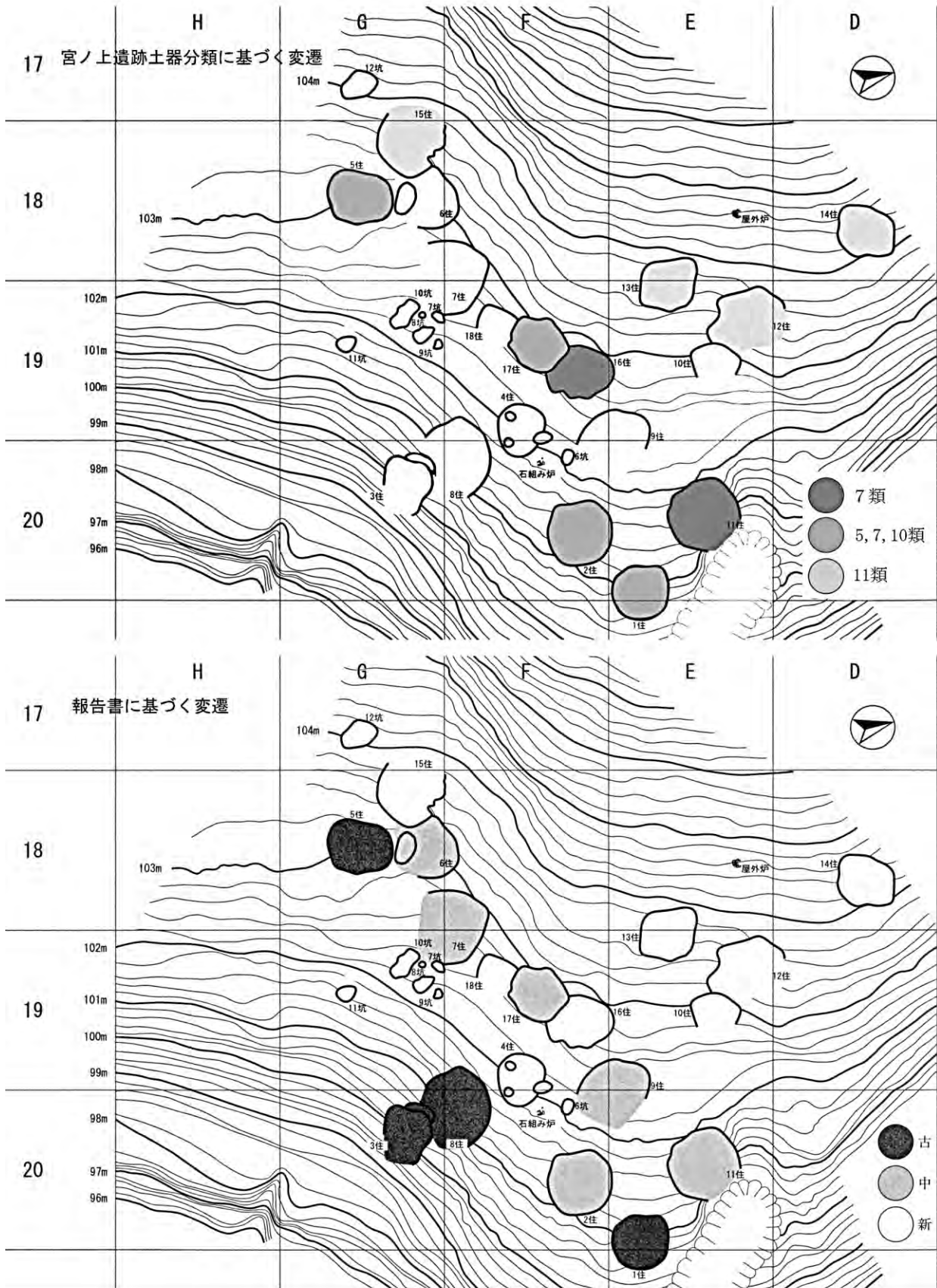
九州縄文土器研究会編の「鹿児島県縄文時代後期前葉遺跡集成表」〈註4〉には、薩摩半島の82遺跡、大隅半島の63遺跡で、南福寺式土器及び出水式土器、宮之迫式土器〈註5〉の出土が報告されている。そして、薩摩半島の70遺跡で南福寺式土器及び出水式土器のそのいずれかが出土し、また、宮之迫式土器とされる23遺跡の17遺跡は南福寺式土器あるいは出水式土器であり、残る6遺跡でも宮之迫式土器は客体として存在した可能性が高い。一方、大隅半島の51遺跡では、宮之迫式土器のみで構成される。このように、薩摩半島では南福寺式土器



第1図 宮ノ上遺跡及び土器型式分布図



第2図 宮ノ上遺跡の土器型分類



第3図 宮ノ上遺跡土器分類に基づく変遷(上)と山ノ中遺跡報告書変遷(下)

南福寺式土器及び出水式土器の、大隅半島での宮之迫式土器の偏在性が見て取れる。

### 3 宮ノ上遺跡の土器分類

本遺跡の土器に関しては、文様構成や施文具の差異から当該期の土器群を5類～11類とし、5類を山ノ中ⅠAタイプ土器、6類を貝殻腹縁刺突文土器、7類を岩崎上層式土器、8類を磨消縄文土器、9類を疑似縄文土器、10類を南福寺式土器、11類を指宿式土器とした。その結果、鹿児島市山ノ中遺跡土器群と類似することが明らかとなった。

5類土器はいわゆる岩崎上層式土器であるが、特に、山ノ中Ⅰ類土器の大波文を施文するA類のみを抽出した。7類も岩崎上層式土器で、凹線文や幅広沈線文で幾何学やマジカルな文様や並行沈線文等で簡素化した文様が見られるが、口縁部に貝殻腹縁刺突文を連続して刺突するものをA類、その貝殻腹縁刺突文が消失したものをB類とした。なお、これらは山ノ中ⅠB類と対比可能である。8類は磨消縄文土器、9類は疑似縄文土器で、これらは山ノ中Ⅱ類と対比できる。10類の南福寺式系土器はA～Cに3分し、Aは肥厚する口縁部施文帯にS字状文等の凹線を施すものや赤色顔料を塗採する南福寺式土器に該当するもので、Bは凹点文主体で坂ノ下式土器、Cは沈線文主体で出水式土器を想定しており、これらは山ノ中Ⅲ類と対比できる。11類は指宿式土器で、山ノ中Ⅳ類に相当する。なお、6類の貝殻腹縁刺突文土器はその量も少なく、7類ないしは11類のいずれかに収斂されると見られる。9類の疑似縄文土器については、5類・7類・11類土器のいずれかに帰属するとの判断から、それぞれの類毎の土器群に並列して第2図に掲載した。

山ノ中遺跡を報告する東和幸は、「・・南九州においては瀬戸内系・西海岸系・南大隅系という個性的な3者の影が強弱を持って反映されている・・」として、山ノ中Ⅰ～Ⅲ類土器の同時性を主張する。併せて、その山ノ

中遺跡では、発見した18軒の竪穴住居群の存続期間を炭化物年代測定から約200年間とし、4軒(1・3・5・8号)→6軒(2・6・7・9・11・17号)→8軒(4・10・12・13・14・15・16・18号)からなる3期の住居群の占地移動が認められるとしている。〈註8〉そこで、報告書に記載される山ノ中遺跡の10軒の住居内出土土器と本遺跡土器群を対比すると、1号・2号・5号住居から7類と10類土器が、11号・13号・15号・16号住居から7類土器が、12号・14号住居から11類土器が出土していることとなる。したがって、報告される3期の変遷見解とは異なるが、6軒には7類土器が、2軒には11類土器が出土していることから、7類、11類それぞれを主体する時期が存在したことが取敢できる。(第3図)。

隣接する鳴野原遺跡A地点の1号と5号竪穴住居跡からは7類土器が、2号竪穴住居跡からは11類土器が出土している。また、宮崎市津野町本野原遺跡の「凹線気味の沈線を持つ岩崎式：Ⅰ期」は本遺跡7A類土器に、「太い沈線を持つ岩崎式：Ⅱ期」は本遺跡7A類土器や7B類土器に対比可能である。なお、7B類土器と宮之迫遺跡A類土器が出土する都城市上牧第2遺跡1号住居跡も知られている。これらは、7類土器が単独で一定期間存続した可能性を事例と言える。

### 4 岩崎上層式土器の薩摩半島での分布域

薩摩半島で7類土器主体の遺跡として、本遺跡や鳴野原遺跡A地点、両遺跡間にある堂園遺跡、鹿児島市加治屋園遺跡や大龍遺跡、山ノ中遺跡及び近接する朽堀遺跡や瀬戸頭A遺跡、鹿児島湾南部の喜入町帖地遺跡等15遺跡が存在する。(第1図)そして、その分布は、薩摩半島中央部から南に延びる脊梁山地の裾野域、すなわち、北は神之川上流域から、東は檜木川沿いに鹿児島湾を南下して大野岳から清見岳に至り、西は半島の中央部西側の金峰山裾野から万之瀬川上流域沿いに展開している。

遺跡名▼	遺物名▼	本遺跡の▼ 分類区分	報告書▼ 掲載番号	分析番号▼	補正年代		2σ暦年代範囲		出典
					(yrBP±1σ)		単位ないしはcalBC		
宮ノ上	岩崎上層式系	5類	No.135	IAAA-110534	3,840 ± 30	30	2,458	2,202 95.4	鹿埋セ171
宮ノ上	岩崎上層式	7A類	No.261	IAAA-110535	3,810 ± 30	30	2,397	2,144 95.4	鹿埋セ171
宮ノ上	岩崎上層式	7B類	No.468	IAAA-110536	3,870 ± 30	30	2,464	2,233 95.4	鹿埋セ171
山ノ中	後期前半	5類	No.6	KAMB-156	3,645 ± 35	35	2,065	1,920 72.0	鹿埋セ103
山ノ中	岩崎上層式	7B類	No.145	KAMB-154	3,610 ± 40	40	2,235	2,135 72.0	鹿埋セ103
山ノ中	指宿式	11F類	No.266	KAMB-153	3,785 ± 25	25	2,290	2,140 95.0	鹿埋セ103
上ノ平	南福寺式	10c類	No.261	IAAA-30982	3,890 ± 40	40	2,456	2,328 95.4	鹿埋セ70
上ノ平	南福寺式	10a類	No.159	IAAA-30983	3,880 ± 40	40	2,455	2,301 95.4	鹿埋セ70
宮ノ上	指宿式	11B類	No.888	IAAA-110537	3,900 ± 30	30	2,469	2,299 95.4	鹿埋セ171

表1 関連土器 C14 測定年代

今回、「薩摩半島中央部から南に延びる脊梁山地の裾野」を岩崎上層式土器の新たな分布域として提示した。そして、その代表的遺跡が本遺跡であり、山ノ中遺跡や鳴野原遺跡A地点、帖地遺跡であるとした。ただ、今回の資料追加を行っても、阿高式及び南福寺式土器は薩摩半島で依然として強固な分布圏を維持している。万之瀬川側下流域の上水流遺跡や芝原遺跡では多量の南福寺式土器が発見される一方、岩崎上層式土器が欠落する実態も明らかとなっている。また、複数個体の岩崎上層式土器を出土している上焼田A遺跡でも、それらが主体的に存在する様相は見られない。ましてや、大隅半島での岩崎上層式土器の優位性が変わることも無い。

## 5 まとめ

宮ノ上遺跡は、岩崎上層式土器を再認識する機会であり、併せて、大隅半島の土器を宮之迫式土器で一括りすることへの疑問から、従来の岩崎式土器や岩崎上層式土器を活用し、それらが風化していないことを提示した。狭小な視点であるが、研究の一助となることを期待して、薩摩半島中央部に岩崎上層式土器の分布域の存在することを示した。

### 【註】

- ① 南九州市川辺町に所在する旧石器時代～縄文時代後期の遺跡で、2010年3月『宮ノ上遺跡―旧石器時代編―』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書146を刊行している。
- ② 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『宮ノ上遺跡―縄文時代以降編―』『鳴野原遺跡B地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書171
- ③ 岩崎式土器と岩崎上層式土器について河口貞徳氏は「下層土器は、頭部に指頭圧痕様の凹部の列を有し、頸胴部の凹曲線文は複雑であるが、上層土器は頸部凹文を失い、頸胴部の文様が並行曲線化したものが生じている」とし、これらは「同一系統の前後に継起した2つの形式の土器」で、「下層の土器を岩崎式、上層の土器を岩崎上層式」と命名した。  
※河口貞徳1955「鹿児島のおいたち―先史時代」鹿児島市
- ④ 真邊彩「鹿児島県における縄文時代後期前葉の様相」『九州における縄文時代後期前葉の土器』第21回九州縄文研究会宮崎大会2011
- ⑤ 近年、後期土器群を宮之迫式土器と呼称し、従来の岩崎式土器や岩崎上層式土器、綾式土器等の名称を使用しない傾向にある。上記④でも宮之迫式土器

と呼称している。しかし、宮之迫遺跡の出土の土器は、上記南九州の土器群の出自や編年を検討する上に不可欠なものである。即ち、宮之迫遺跡の土器群は、中九州や薩摩半島の阿高式土器や南福寺式土器、出水式土器等との交流や接触の痕跡を具現化している可能性が高いことから、細分化して活用することが望ましいと判断している。

- ⑥ 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2006『山ノ中遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書103  
※ 1・3・5・8号→2・6・7・9・11・17号  
4・10・12・13・14・15・16・18号の3段階の変遷で、低い位置から高い位置への2段階の占地移動が認められるとしている。
- ⑦ 金丸武司2006「土器の設定・南九州後期土器の編年」『本野原遺跡三』宮崎市教育委員会
- ⑧ 東和幸「2011鹿児島市山ノ中遺跡の調査と成果」『九州における縄文時代後期前葉の土器』第21回九州縄文研究会宮崎大会  
※ 瀬戸内系は山ノ中Ⅱ類、西海岸系は山ノ中Ⅲ類、大隅系は山ノ中Ⅰ類と解される。

### 【参考文献】

- 大正9年「出水貝塚」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊』
- 河口貞徳 昭和28・29年『出水貝塚』鹿児島県文化財調査報告書第5集 鹿児島県教育委員会1958  
出水市教育委員会『出水貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター1999『南福寺貝塚』『柿内遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書24
- 城南町教育委員会『黒橋貝塚』城南町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 鹿児島県教育委員会1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書15
- 福山町教育委員会『和田前遺跡』福山町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書70
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『下水流遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書113
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『芝原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書149
- 末吉町教育委員会1981『宮之迫遺跡』末吉町文化財調査報告書2

宮崎県立埋蔵文化財センター1999『上牧第2遺跡・母智丘原第2遺跡』宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 15

鹿児島県教育委員会 1981『加治屋園遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 14

鹿児島市教育委員会 2001『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 32

鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2001『栢堀遺跡・西ノ原B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 30

鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2005『瀬戸頭A・B・C遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 85

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『堂園遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 85

喜入町教育委員会 1999『帖地遺跡』喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書 6

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『鳴野原遺跡A地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 156

# 大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡

中村 耕治

The Riturai site to Be Affected Tumulus In Osumi Aria

Nakamura Kouji

## 要旨

人の死に関しては、現在でも恐れと穢れが付きまとっている。そのことは、原始・古代においてはもっと強かったことと思われる。縄文時代の抱石葬・甕被り葬や、埋葬の一部に係わる土器の一部を割ったり、穴を穿ったり等と枚挙にいとまがない。つい最近までも出棺の際、茶碗を割って送り出す風習があったようである。このような死に対する祭祀について、古墳時代の大隅地域における葬送儀礼や祭祀に係わる事例が増加している。そこで、大隅地域を中心に取り上げて見ることとした。

**キーワード** 古墳時代、大隅地域、古墳、地下式横穴墓、葬送儀礼、供献、封印

## 1 はじめに

鹿児島県では、東九州自動車道建設に伴う発掘調査が進められている。特に大隅地域では、毎年多くの遺跡が調査されており、さまざまな成果が上げられている。古墳時代においても立小野堀遺跡・町田堀遺跡で数多くの地下式横穴墓が発見調査され、葬送儀礼等について新しい資料が得られてきている。そこで、これまでの資料も顧みて、大隅地域における古墳時代の祭祀・葬送儀礼について考えることにする。

## 2 祭祀・葬送儀礼について

これまでの祭祀遺跡を見てみると、以下の5タイプに分けられるようである。

- (1) 葬送に係わる祭祀を行った広場(土師器や須恵器が多く見られる。時には鉄器が見られることもある。)
- (2) 土器を破砕する祭祀(土器破砕祭祀)。
- (3) 鉄器や赤色顔料で羨道部付近を封印する祭祀。
- (4) 土器及び須恵器を竪坑上部や当時の地上に供える祭祀。
- (5) その他  
土塊による羨門封鎖。

### (1) 祭祀広場

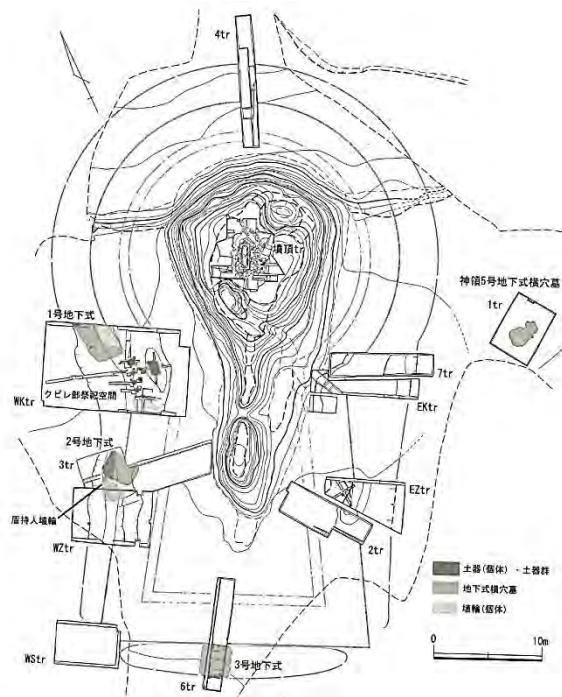
- ① 神領 10 号墳における周溝内祭祀 (曾於郡大崎町  
2000 年に鹿児島大学総合博物館の橋本達也准教授に

より調査が行われた。調査は、主体部の確認と周溝確認



第 1 図 古墳位置図

番号	遺 跡	所 在 地
1	祓 川	鹿屋市祓川
2	立 小 野 堀	鹿屋市串良町
3	野 田 堀	鹿屋市串良町
4	岡 崎	鹿屋市串良町
5	名 主 原	鹿屋市吾平町
6	宮 ノ 上	鹿屋市吾平町
7	中 尾	鹿屋市吾平町
8	塚 崎	肝属郡肝付町
9	下 堀	曾於郡大崎町
10	神 領	曾於郡大崎町



第2図 神嶺10号墳

が主であった。

周溝内では地下式横穴墓の竪坑が検出された。近年高塚墳の周溝部に竪坑を掘る地下式横穴墓の検出が相次いでいるが、神嶺古墳群でも同様の結果が得られた。また、墳丘の西側くびれ部に近い周溝内で土師器と須恵器（市場南組窯跡）が大量に出土し、ここで葬送に係わる祭祀が行われたものと思われる。

② 岡崎 18 号墳 2号地下式横穴墓における竪坑上部の須恵器甕及び東側の祭祀広場（鹿屋市串良町）

2002年に鹿児島大学総合研究博物館橋本達也准教授により調査が行われたものである。18号墳は現状で径約18.8m、墳丘の高さは2.4mである。地中レーダー探査の結果墳端部に4基の地下式横穴墓が存在することが確認されている。墳丘の東側において1号・2号地下式横穴墓の竪坑部が検出され、周辺に須恵器・土師器・鉄族・花崗岩が散乱している。祭祀空間と考えられる状態で須恵器や土師器を意図的に破碎したものであろう。この空間は、台地の東端に近い所で唐仁古墳群が望める場所であることも何か意味するものではないだろうか。調査者の橋本氏は2号地下式横穴墓のみの祭祀空間か1号・2号地下式横穴墓に伴うものか、18号墳全体に関わる祭祀かは解釈の余地があるものとしている。また、2号地下式横穴墓の竪坑上面の東コーナーに須恵器の大甕2個体が設置されている。これは、竪坑を埋め戻した後に行われた供献祭祀と考えられている。

③ 中尾地下式横穴墓の祭祀広場（鹿屋市吾平町）

中尾地下式横穴墓は平成8年度・9年度・16年度の3回に渡って吾平町教育委員会により調査が行われ、8基の地下式横穴墓が発見されている。終末期の地下式横穴墓と思われるもので、心葉文が描かれた銀象眼装太刀や円筒太刀・鈴・耳環等の副葬品が出土している。地下式横穴墓は円形状に配置され中央部に広場が見られる。その広場から須恵器の甕の破砕片が集中して出土し、祭祀広場としてとらえられるものである。

④ 名主原地下式横穴群の祭祀広場（鹿屋市吾平町）

2004年度に吾平町教育委員会が調査を行い6基の地下式横穴墓が確認されているが、その周辺において6点の高坏と長頸壺が出土している。いずれも供献土器と考えられるものである。

⑤ 下堀地下式横穴群の祭祀広場（曾於郡大崎町）

2002年度に大崎町教育委員会により調査が行われたものである。7基の地下式横穴墓が調査され、7号地下式横穴墓では竪坑から羨道上部にかけて盛り土が確認された。3号・4号地下式横穴墓の南側に土坑があり、その埋土内から高坏や埴が完形の状態で出土し、意図的に埋した祭祀に関わるものと判断されている。ただ、土師の年代観と地下式横穴墓の年代観の検討が必要と思われる。

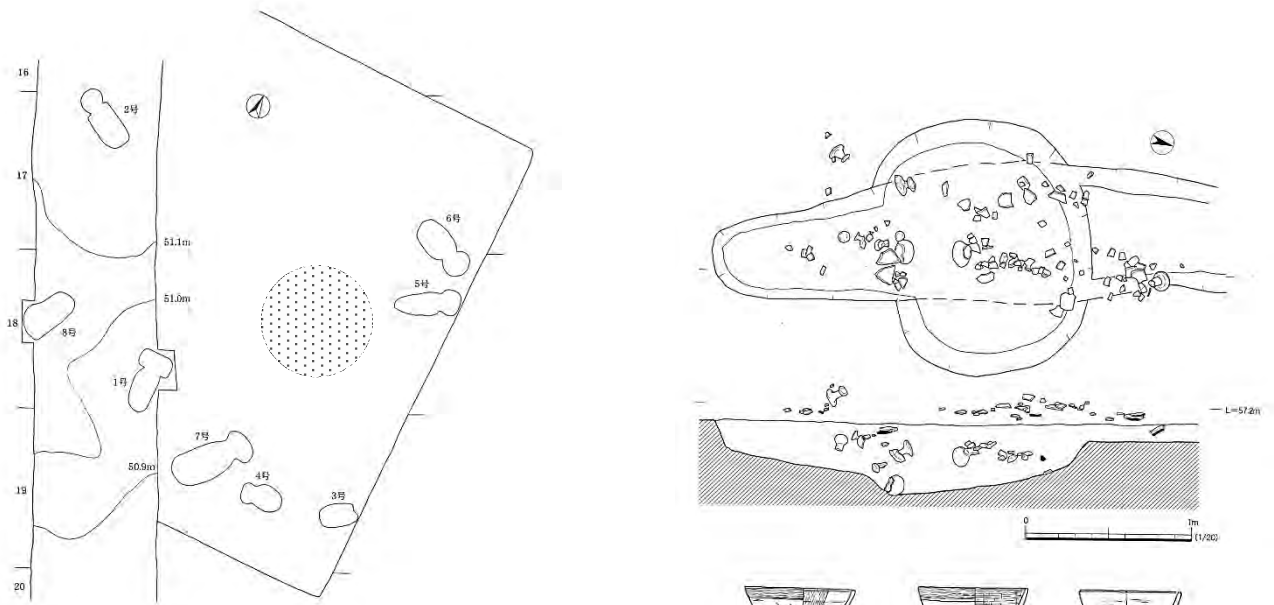
⑥ 町田堀遺跡における祭祀空間

町田堀地下式横穴墓群の中の43号墓・46号墓・51号墓・49号墓・85号墓に囲まれた空間（10×8m）から高坏3点・埴3点・鉄鏃1点・剣1点が出土している。この空間には地下式横穴墓等の遺構は無く、土師・鉄器を供献する祭祀広場と考えられる。

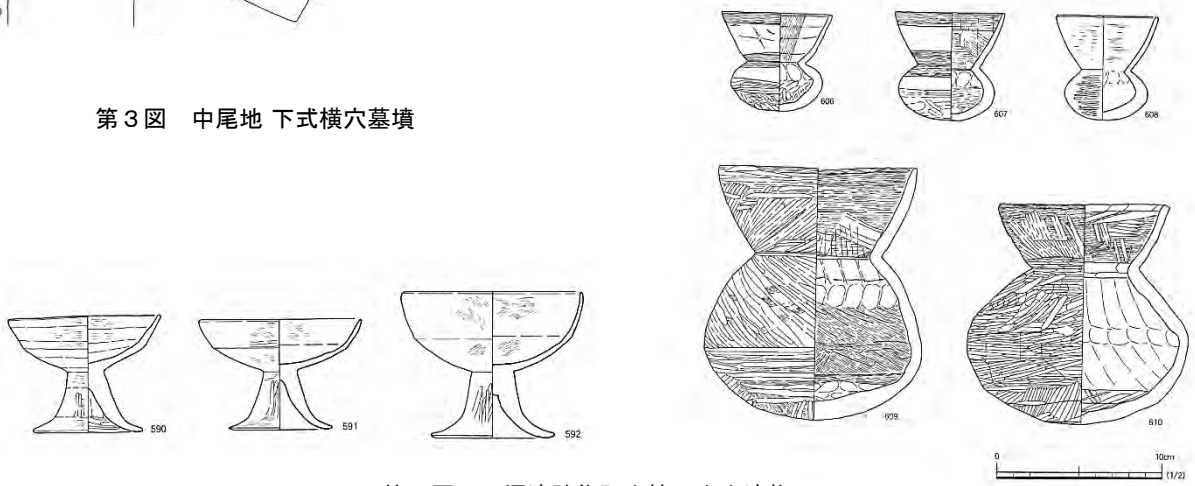
(2) 土器破碎祭祀

① 岡崎4号墳墳頂部主体部上部の土師器破碎（鹿屋市串良町）

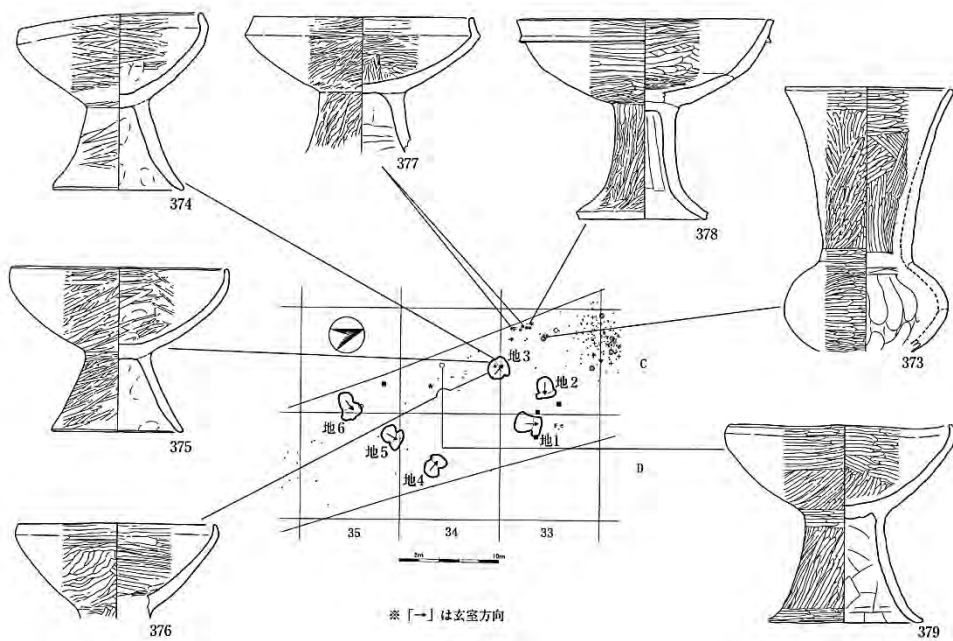
1986年串良町教育委員会により4号墳の確認調査が実施されたものである。調査は主体部の有無及び周溝確認を目的とした。その結果、墳頂部において主体部と思われる掘り込み（木棺直葬と思われる）が検出された。さらにその上部において破碎された土師器の高坏（大型高坏3個体・小型高坏7個体）、口縁部と底部を欠損した壺が置かれていた。土師器を破碎する行為が、縄文時代晩期に埋設された深鉢の一部を打ち欠くことや、近年まで見られた火葬場へ出棺する時に茶碗を割る行為と同



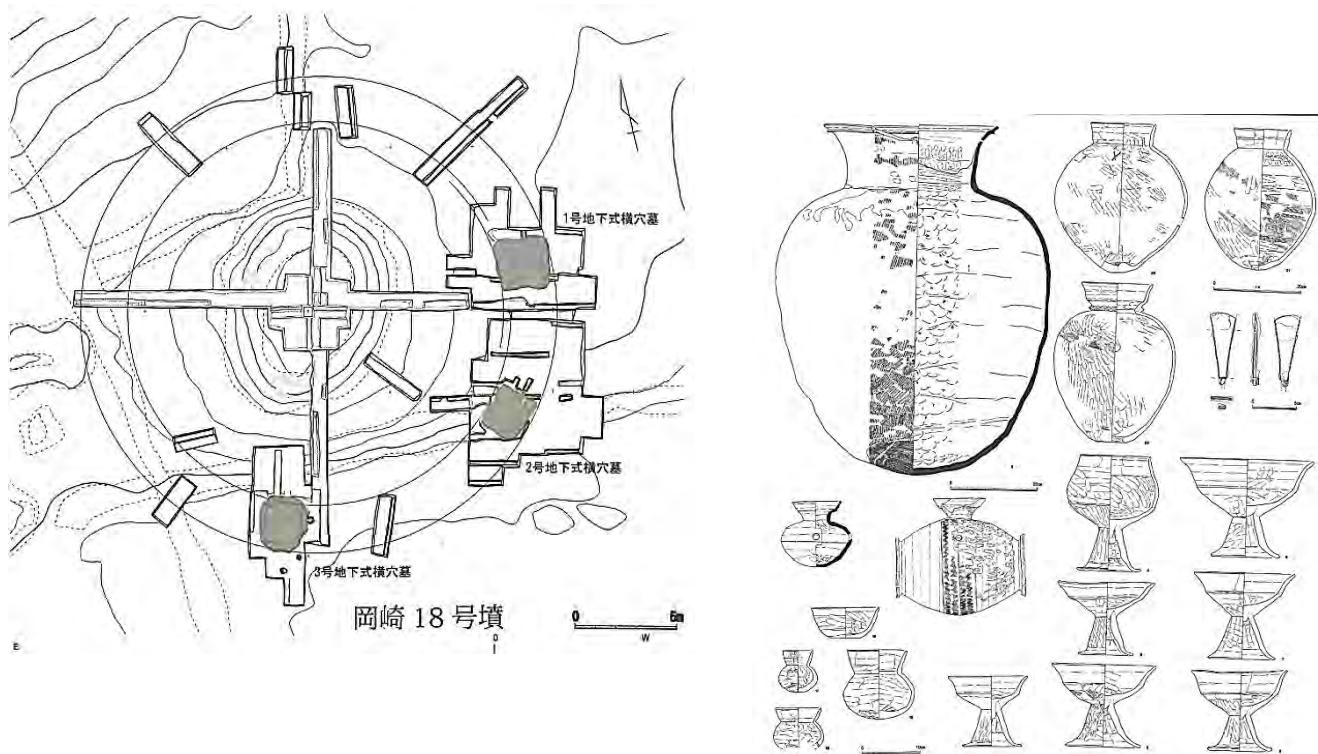
第3図 中尾地 下式横穴墓墳



第5図 下掘遺跡祭祀土抗・出土遺物



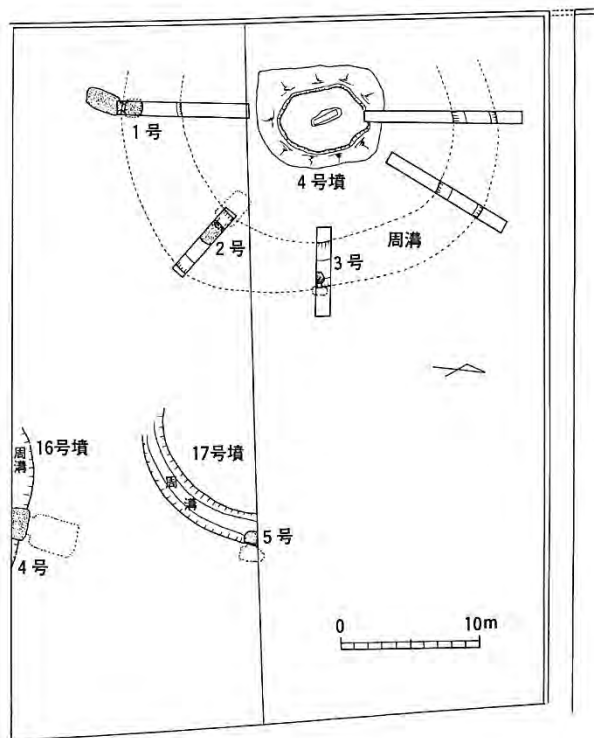
第4図 名主原遺跡祭祀空間・出土遺物



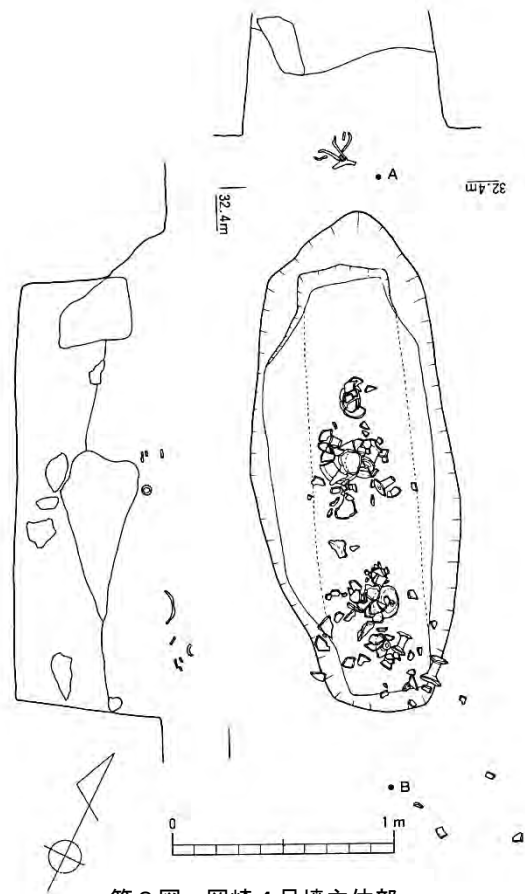
第6図 岡崎178号墳祭祀空間・出土遺物



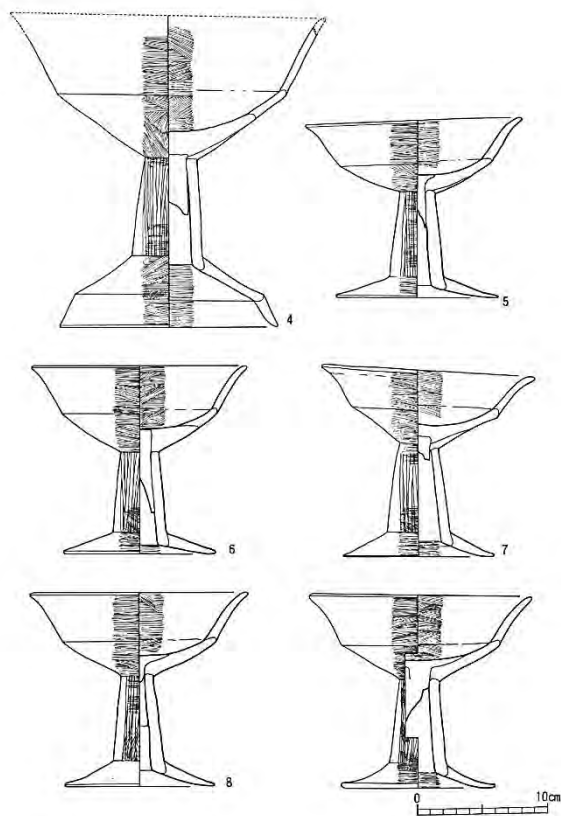
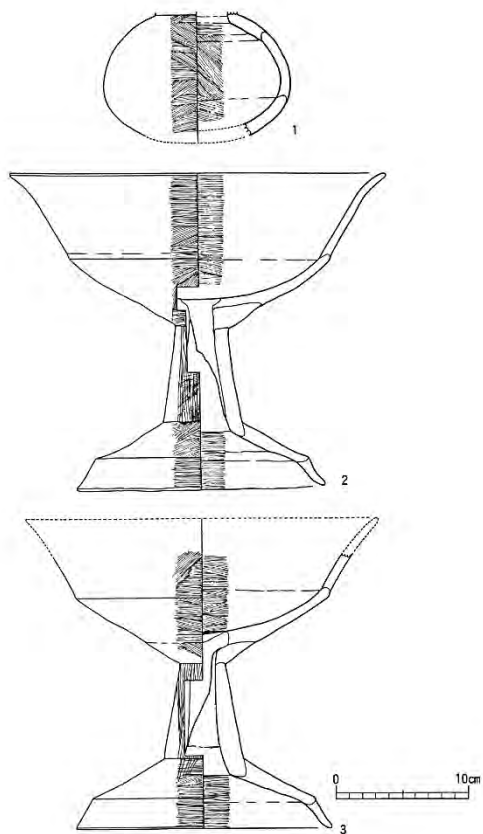
第7図 岡崎18号墳の東側の祭祀空間遺物出土状況



第8図 岡崎4号・16号・17号群



第9図 岡崎4号墳主体部



第10図 岡崎4号墳主体部上位の遺物

じように死に対する穢れを払うような意味を持つのか興味深いものである。

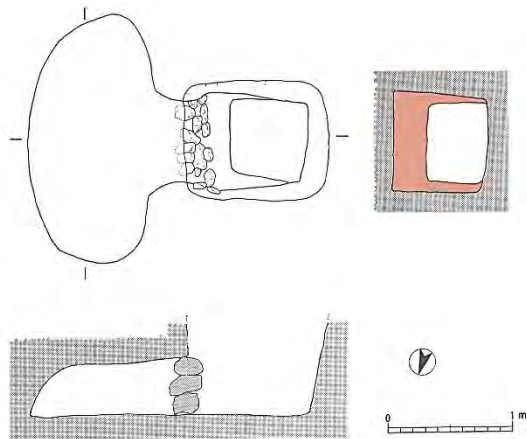
② 立小野堀地下式横穴墓群の祭祀広場

立小野堀地下式横穴墓群は、東九州自動車道建設に伴って2009年度から調査が行われている。これまでに190基の地下式横穴墓と土坑墓5基が調査されている。地下式横穴墓の周辺等から二重口緑壺や高坏・坩等が破碎された状態で出土している箇所が数多く見られる。まだ調査が継続しているため詳細はつかめないが、墓のない空間で検出されるものが大半で、葬送儀礼が行われたものと考えられる。ただ、単体の地下式横穴のためか、複数の地下式横穴墓のためのものなのかいまの段階では不明である。

(3) 羨道部付近での封印

① 宮ノ上14号地下式横穴墓の竪坑羨門を有する面の赤色顔料塗布（鹿屋市吾平町）

1987年度に吾平町教育委員会により2基の地下式横穴墓の調査が行われたもので、そのうちの14号地下式横穴墓は、竪坑の規模が1.17×0.96mの長方形であるが、底面はやや小さくなっている。羨道部の閉塞は土塊によるものであるが、玄室側のほぼ全面に赤色顔料（丹？）が塗布されている。被葬者を封印する意味合いを想定させられる。

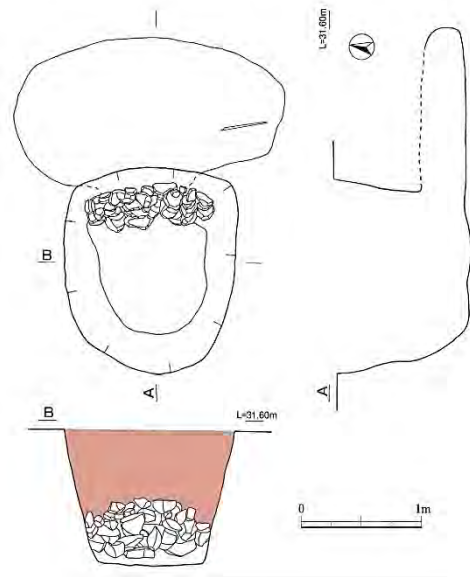


第11図 宮ノ上14号地下式横穴墓

② 名主原6号地下式横穴墓の竪坑羨門を有する面の赤色顔料塗布（鹿屋市吾平町）

2004年度に吾平町教育委員会により調査が行われたもので、6基の地下式横穴墓が調査された。6号地下式横穴墓は竪坑の規模が1.7×1.39m、深さ1.12mである。羨道部閉塞は土塊によるものであるが、玄室

側の全面に赤色顔料（丹？）が塗布されている。宮ノ上14号地下式横穴墓と同様被葬者を封印するかのような状況である。



第12図 名主原6号地下式横穴墓

③ 岡崎1号地下式横穴墓の羨道上部におかれた赤色顔料の玉（丹玉）（鹿屋市串良町）

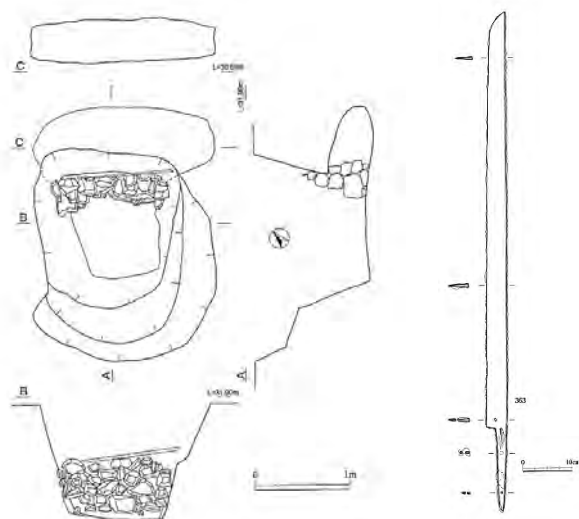
1986年串良町教育委員会により確認調査が実施されたものである。1号地下式横穴墓は4号墳の周溝に竪坑を掘って造られたもので、人骨1体と鉄剣・鑿状鉄器・槍鉋・鉄族・砥石等多くの副葬品を有する。羨道部の閉塞は木質で塞いだ上に粘土板を被せたものと思われる。羨門の上部中央に径5cmの朱玉（丹？）2個を貼り付けた状況である。名主原6号地下式横穴墓の赤色顔料塗布と同様に封印を意識したものと思われる。

④ 立小野堀地下式横穴墓（126墓）の羨道部天井に赤色顔料が塗布（鹿屋市串良町）

立小野堀地下式横穴墓群の126号墓は、竪坑で追葬が行われた痕跡が認められたもので、立小野堀地下式横穴墓群の中では最大級の規模である。羨道は長さ約60cmもありしっかりしている。羨道部の竪坑側の天井部に赤色顔料を約10cm幅で塗布している。この行為も封印を意図したものと思われる。

⑤ 町田堀遺跡（75号墓）の羨門部の上位に赤色顔料を塗布（鹿屋市串良町）

町田堀地下式横穴墓群中の75号墓は、羨門の上位に径5cmの範囲に赤色顔料が塗布されている。これも封印を意図したものであろう。



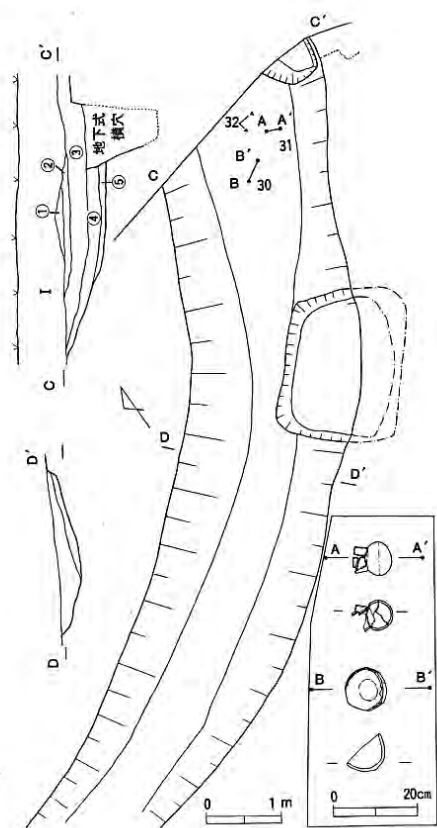
第 13 図 名主原 1 号地下式横穴墓

⑥ 名主原 1 号地下式横穴墓の羨道上部に置かれた直刀 (鹿屋市吾平町)

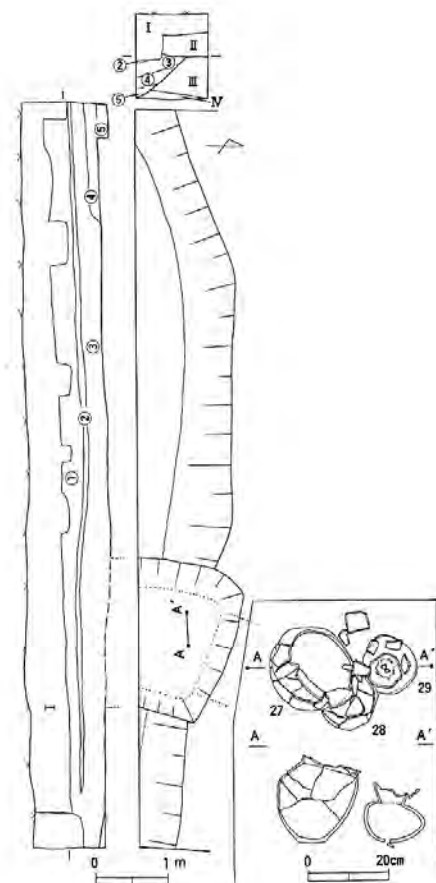
名主原 1 号地下式横穴墓は竪坑 2.2×1.82m、深さ 1.2 m の不整形なものである。羨道部閉塞は土塊によるもので、積み上げられた土塊の羨門側に全長 101.3 cm の直刀 1 振が刃部を下にして据えられている。まさに、直刀の力により死者を封印したかのように置かれていた。

⑦ 町田堀遺跡 (50 号墓) の羨門上位に置かれた鉄剣 2 本 (鹿屋市串良町)

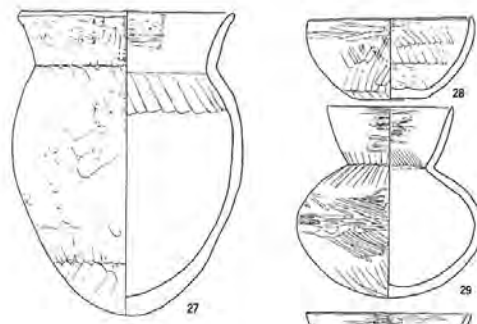
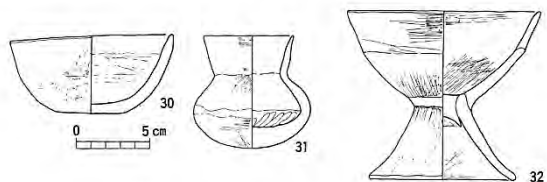
町田堀地下式横穴墓群中の 50 号墓は、羨門の上位に長さ約 40 cm の剣を 2 本置いてある。これも封印を意図したと思われる。

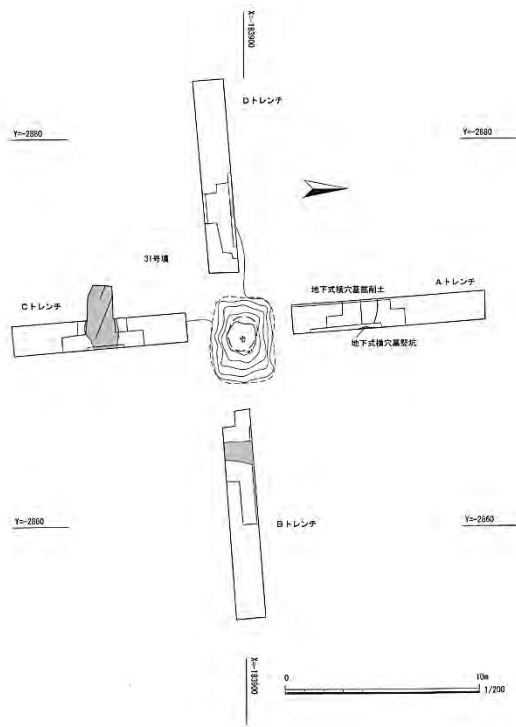


第 14 図 岡崎 16 号墳・4 号地下式横穴墓及び供献土器

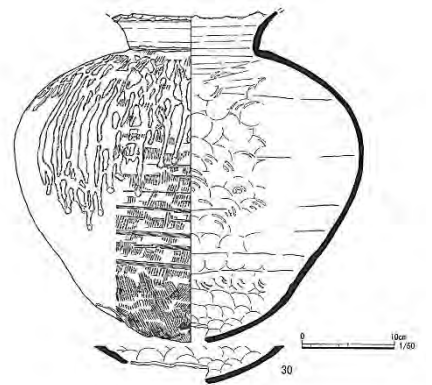
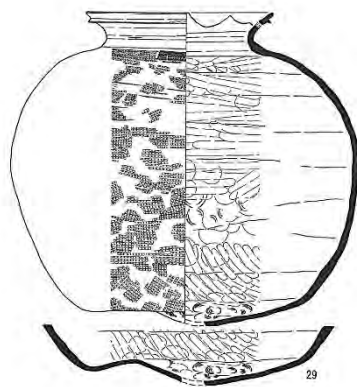
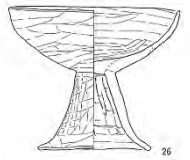
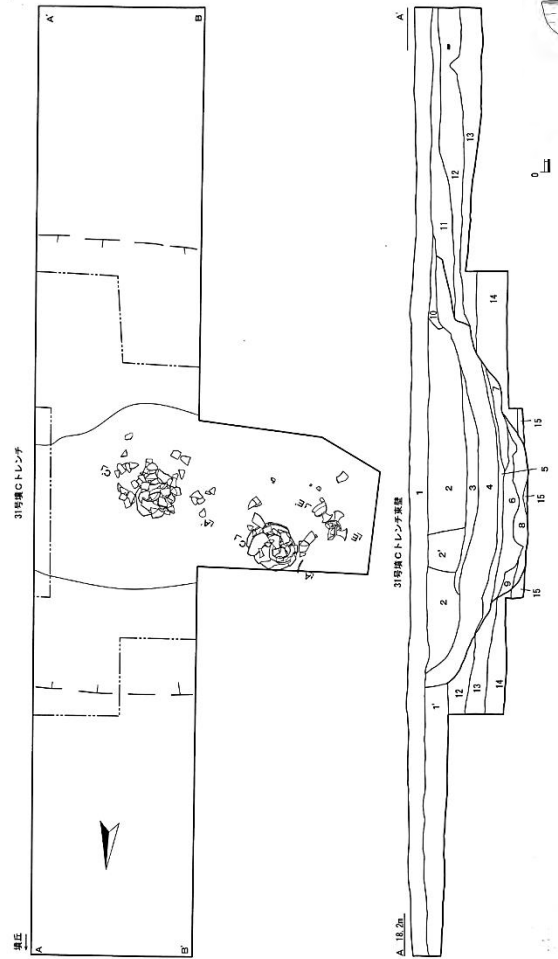
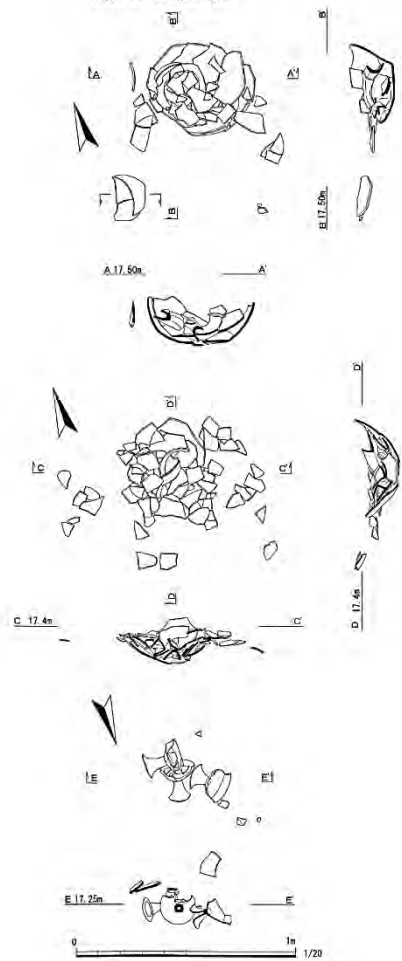


第 15 図 岡崎 17 号墳・5 号地下式横穴墓及び供献土器





31号墳Cトレンチ内遺物出土状況



第16図 塚崎331号墳・周溝内地下式横穴墓及び供献土器

(4) 供献祭祀

① 岡崎 4号・5号地下式横穴墓の竪坑上部および周辺の土師器（鹿屋市串良町）

1988年串良町教育委員会により調査が行われたものである。4号墳の東側の確認調査であったが、墳丘が削平された円墳の周溝が2基発見された。17号墳・18号墳とされたものであるが、それぞれの周溝内に地下式横穴墓の竪坑が掘り込まれている。16号に伴うものは4号地下式横穴墓としたが竪坑上面に土師器の甕・鉢・小型丸底壺の3点が供献されている。また、17号墓に伴うものは5号地下式横穴墓としたが、竪坑上面ではないが、近接した位置に鉢・大型丸底壺・高坏の3点が出土しており、5号地下式横穴墓に供献されたものと考えられる。このような土器供献については、岡崎 18号墳2号地下式横穴墓の須恵器大甕、および塚崎 31号墳の周溝に竪坑を有する地下式横穴墓の掘削土の上部に須恵器及び土師器等が置かれた類例がみられる。

② 塚崎 31号墳の周溝内に竪坑を有すると思われる地下式横穴墓の掘削土上部の須恵器及び土師器（肝属郡肝付町）

31号墳の周溝確認調査で出土したものである。墳丘の北側のトレンチで周溝内に竪坑が確認され、その西側に地下式横穴墓の掘削土の広がり確認されている。南側のトレンチでは竪坑は確認されていないが、北側トレンチと同様の地下式横穴墓の掘削土と思われる土の広がりが確認され、その上に須恵器の甕2個体と土師器の高坏3個体が出土している。須恵器甕は陶邑産と愛媛県市場南組窯産のものと思われるもので、初期須恵器のTK216段階と考えられる。

③ 祓川地下式横穴墓の供献土器（鹿屋市祓川）

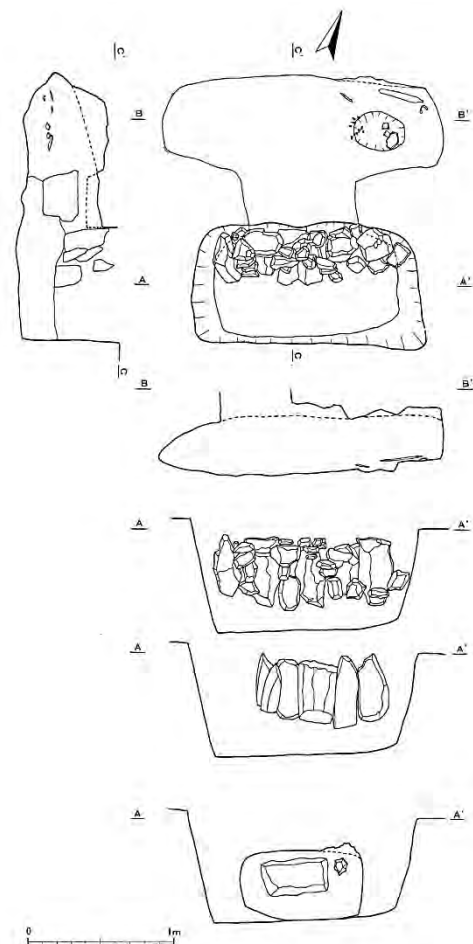
2005年度に鹿屋市教育委員会により調査がおこなわれたものである。1号供献土器は2号・11号・32号地下式横穴墓の竪坑の空間で検出された。2号供献土器は19号・21号地下式横穴墓の南側で検出された。3号供献土器は23号・25号・29号地下式横穴墓の空間および竪坑上面で検出された。4号供献土器は7号と27号地下式横穴墓の中間で検出された。6号供献土器は調査区のほぼ中央で独立して検出された。1号～5号供献土器はいずれも地下式横穴墓の周辺で破碎された状況であるに対して6号供献土器は独立しており、完形に近い状態で検出されている。1～5号供献土器と6号供献土器では、祭祀の内容が異なるようである。1～5号供献土器については、破碎する行為が伴っている。また、地下式横穴墓の竪坑周辺や一部竪坑上面に架かっている。

このような葬送儀礼が複数の地下式横穴墓に関わるのか、単一の地下式横穴墓のみなのかは今後の課題であろう。また、6号供献土器は遺跡のほぼ中央にあり、破碎されていない状態で地下式横穴墓群全体に関わる祭祀の可能性を含んでいる。土器は壺・高坏・埴・はそう・須恵器甕等で、煮炊き用の甕が見られないのが特徴である。壺では刻み目突帯文を巡らす二重口縁の大型壺が目立つ。二重口縁壺は他の地下式横穴墓群でもよく見られる傾向がある。

(5) その他

① 塚崎古墳群 13号地下式横穴墓における羨道部に土塊を置く（肝属郡肝付町）

13号地下式横穴墓は、平入りタイプで、羨道の閉塞は竪坑底面から約30cmを硬くしめて、その上に角礫を立て掛けるようにして置き塞いである。また、角礫を覆う様に大小の土塊で目詰めしてある。さらに羨道部の真下に



第17図 塚崎古墳群 13号地下式横穴墓

縦 25 cm, 横 45 cm, 奥行き 30 cm の直方体の土塊が据えられている。これも葬られた人を封印する意味合いがあるものと考えられる。

### 3 結語

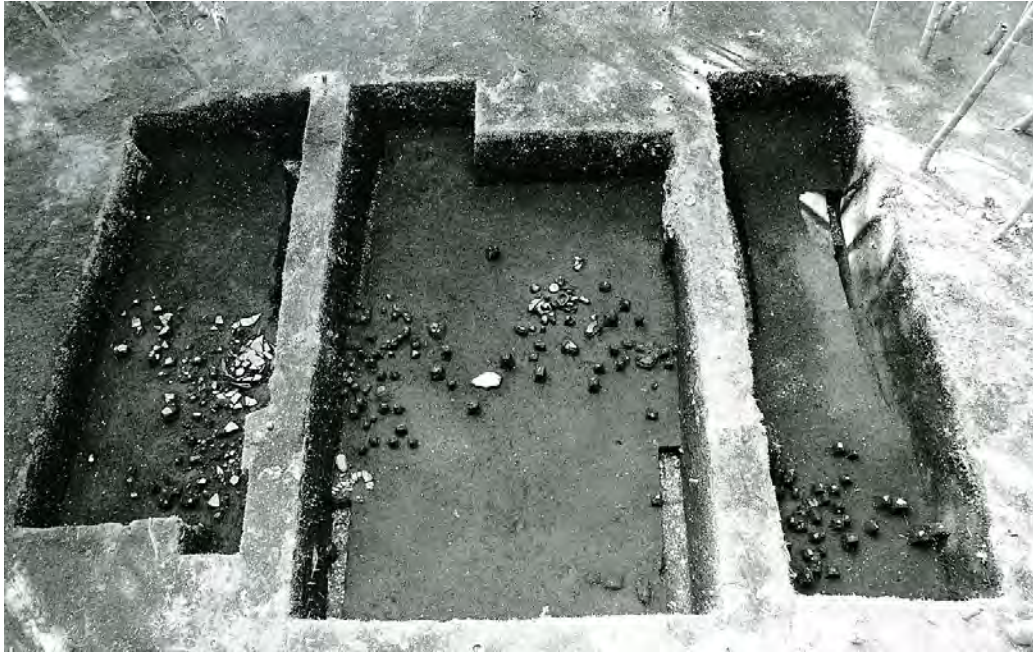
大隅地域の古墳時代における葬送儀礼や恐れによると思われる封印の状況の例を取り上げてきたが、列挙するにとどまってしまった感は否めず、古墳時代人の死後感とかままでに至らなかった。今後の課題としておきたい。

立小野堀遺跡及び町田堀遺跡については近年の調査であり、報告書が刊行されていないため図面等が提示できなかった。報告者が刊行されたら参考にしていただければよいのではないかと考える。

#### 【参考・引用文献】

- 橋本達也 2007・2008・2009「神領10号噴発掘調査1～3―大隅のフィールド調査」鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也 2008「大隅串良、岡崎古墳群の研究」鹿児島大学総合研究博物館
- 吾平町教育委員会 2005『中尾遺跡IV』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書 19
- 鹿屋市教育委員会 2008『名主原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 84
- 大崎町教育委員会 2005『下堀遺跡・細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書串良町
- 串良町教育委員会 1986『岡崎4号噴・1号地下式横穴』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書 1
- 吾平町教育委員会 1987『宮ノ上地下式横穴墓横穴群』吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書 2
- 串良町教育委員会 199『岡崎古墳群』串良町発掘調査報告書 3
- 肝付町教育委員会 2009『塚崎古墳群』肝付町発掘調査報告書 11
- 鹿屋市教育委員会 2007『薬師堂の古墳・祓川地下式横穴群』鹿屋市発掘調査報告書 83

名主原1号地下式横穴墓鉄剣出土状況



岡崎18号墳東トレンチ祭祀空間・遺物出土状況



神領10号墳くびれ部祭祀空間



中尾地下式横穴群祭祀空間実測風景



塚崎13号地下式横穴墓羨道部封鎖状況



# 郷土教育と考古学

—相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと—

吉元 輝幸

Education for local patriotism and archeology

Yosimoto Teruyuki

## 要旨

今後の学校教育において、充実させていくことが重要であると改正教育基本法や本県の教育振興基本計画で指摘されている教育内容の一つに郷土教育がある。その郷土教育に利用できる教材の一つとして、土器片や石器等の埋蔵文化財がある。それは身近で郷土の歴史を知る上での大きな手がかりとなることから、有効な教材になると考えられる。

本稿では戦後、子どもの論理的思考力の育成を目指し、学校近くの遺跡とそこから出土する土器片等の埋蔵文化財を活用した郷土教育実践を行った相川日出雄の実践の分析を通じ、今後の郷土教育のあり方を考察する。相川の郷土教育実践は歴史的背景が異なる現代において学力形成、中でも論理的思考力の育成という点からも学ぶべき点が多い。

**キーワード** 郷土教育、相川日出雄、新しい地歴教育、生活綴り方、土器、論理的思考力

## 1 はじめに

平成 18 年に戦後 60 年以上にわたって教育のあり方を規定してきた教育基本法が改正された。改正教育基本法（以後、改正教基法と略記）には、今後の教育のあるべき姿、目指すべき理念が示されている。

その改正で新たに示された理念の一つに郷土教育の充実がある。その条文には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」（同法第二条 五）として、郷土教育の重要性が記された<sup>1)</sup>。それは教育に対する今日の社会的な要請とも言える知・徳・体の調和がとれた発達及び、日本の伝統と文化を基盤として、我が国を誇りに思い、そして今後の国際社会を生きぬくことのできる能力を備えた日本人の育成を目指していくことが加味された内容と言えよう。

また、改正教育基本法に基づき、策定された教育振興基本計画を踏まえ、本県で定められた鹿児島県教育振興基本計画には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国の郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」が基本目標とされ、今後 5 年間に取り組む施策における視点の一つに郷土の教育的な伝統や風土の活用を掲げ、郷土教育の推進を図ることが目標とされている<sup>2)</sup>。

郷土教育を推進していく上で重要なことは、子どもたちに身近な教材を使用した実践を行うことである。なぜなら、身近な教材は郷土をより身近なものとしてとらえさせることが期待でき、その良さに気付くことができれば、郷土を愛する態度が形成されると考えられるからである。郷土教育で活用できる教材はいろいろと考えられるが、その中の一つに文化財がある。文化財には様々な種類がある。それについて述べることは本稿の目的でないので割愛するが、いずれの文化財であっても、それらは郷土の先人たちが歩んだ歴史を知る手がかりとなる。

文化財の中でも遺跡から(子どもたちの通う校区内のものが理想)採取できる土器片や石器などの埋蔵文化財は身近で、それ自体が、その地域に生きた人々の生活の営みを示す遺産であり、地域の歩んできた歴史に関する様々な情報を引き出すことができるため、郷土教育の手軽でかつ有効な教材と言える。

一方、今日の学校に求められていることの一つに基礎学力の向上がある。背景には 2003 年に OECD の実施した国際学力調査(PISA)の結果、日本の子どもの数学的リテラシーや読解力などの基礎的な学力が前回調査と比較して低下したことが公表されたことにより、学力向上への取り組みを求める声と、その原因として「ゆとり教育」への批判が高まったことが挙げられる<sup>3)</sup>。

さらに、県教委が全国に先駆けて土曜授業の再開を市町村教育委員会に求めていくことを決定し<sup>4)</sup>、それを受けて鹿児島市をはじめとする県内各市町村がその実施に向けた準備・調整に着手するなど、学力向上に向けての取り組みは今後、さらに進んでいくであろう。

一方、郷土教育は学校の教育活動全体を通して行われているが、実際には地域学習を中心となって行う社会科がその中心的な役割を担うことが多い。

その目標は教育基本法や教育振興基本計画において「郷土を愛する態度を養う」という表記<sup>5)</sup>に見られるように態度形成が目標となっている。

態度形成は重要だが、学力向上が学校に求められている現在、態度形成に加え、「郷土教育を通じて形成可能な学力は何か」という観点からも、今後は郷土教育のあり方を再考していく必要はないだろうか。

そのような問題意識の下、本稿では戦後、文化財、特に埋蔵文化財を活用した郷土教育実践を行った相川日出雄(あいかわひでお 1917-1991)の実践の分析と考察を通して、郷土教育を通じた学力形成について考察することを目的とする。

## 2 相川日出雄と当時の学校及び考古学界の状況

まず、相川日出雄の生涯と、その前後の学校教育及び日本考古学の学問的な状況について概観しておきたい。

### (1) 相川日出雄の生涯

相川日出雄は、戦後の初期社会科教育実践史を代表する実践家として著名である。その生涯の概略を述べる<sup>6)</sup>。

相川は1917年6月に東京府豊玉郡角筥(今の東京都新宿区)に生まれる。1939年に応召を受け、千葉陸軍病院に勤務するも、結核を患い勤務中に突然咯血したことが原因で1942年に除隊される。

その後、祖父母の郷里である千葉県印旛郡富里村に帰る。そこで、知人のすすめで教師の道を選び、1943年に千葉県安房郡根本村国民学校において教師生活をスタートさせる。その2年後の1945年、相川は敗戦を経験する。

その翌年、1946年に千葉県印旛郡富里小学校久能分校に転任する。相川の代表的な実践の記録である『新しい地歴教育』は、この分校における1952年度から1953年度の実践を中心にまとめられたものである。その中には学校近くの遺跡(現在、富里市教育委員会によって笠井田遺跡と指定されている)にある縦穴住居の跡とそこから表面採取できる土器片を教材として行った実践『かりのくらし』とその学習に入る前段階の実践記録が収められている。

その後、相川は1958年に山梨向井遺跡を発見する。それを機に小学校教師のかたわら千葉県各地の遺跡の発掘調査に参加するようになる。1961年に小学校教師を退職した相川は、考古学の研究を続ける傍ら、四街道市文化財審議会副会長などをつとめ、1991年に亡くなる。享年74歳であった。

### (2) 学校教育の置かれていた状況

相川が実践を行っていた当時の学校教育及びその中の郷土教育のおかれていた状況について概観する。郷土教育は1880年代に紹介された郷土教育が地理学習の準備段階とするペスタロッチ派の理論をもとにスタートした。その郷土教育は昭和初期には大いに盛り上がり、多彩な実践が行われた。特に1929年に起こった世界恐慌は、日本経済にも大きな打撃を与え、特に農村部の影響は大きかった。その打開策として政府は農村漁村経済更正運動を行った。その一環として、当時の文部省は農村を中心とする地方の教育の振興策を打ち出した。具体的には1930年に日本の師範学校を中心に郷土研究施設費を支給し、郷土研究室の設置や郷土研究資料の蒐集のための財政支援を行うとともに、郷土教育に関する講習会を積極的に開催した。

この時期、郷土教育は農村の復興と教育の地方分権化を目指して注目されたのである。各学校に設置された郷土研究室には地域の遺跡や、耕作の途中などで出土した土器や石器なども地域住民などから持ち込まれ、蒐集・展示されていた<sup>7)</sup>。

当時行われた教育実践の代表的なものを挙げると、大正自由教育の直感教育に郷土教育の性格を付与して誕生した東京女高等師範学校附属小の「社会科」、赤石女高等師範学校附属小の「郷土教育カリキュラム」などがある。

それらは、戦後の社会科教育の内容に匹敵する内容と方法を持った優れた実践であると評価されている。しかしながら、その郷土教育も戦況が進む1940年以降には、ほとんど見られなくなった。

1941年、国民学校令が施行された後の郷土教育は、国民学校第四学年の「郷土ノ観察」として位置づけられ、国民科歴史と国民科地理の準備教科として、愛国心育成のための教育内容の一部に位置づけられた。

戦時中も、引き続き郷土教育は愛国心育成のための手段として利用された。具体的には、郷土の偉人が掘り起こされて紹介されたり、郷土の自然や名産などがお国自慢的に紹介されたりと、「大東亜聖戦」を遂行するための精神的支柱としての役割を果たすようになる<sup>8)</sup>。このような時の権

力に奉仕するためとも言える郷土教育は、終戦とともに消え去ることとなった。

終戦を迎えると、米国による占領体制のもと、国家の体制のみに留まらず、教育制度についても大転換を求められることとなった。

連合国軍総司令部(GHQ)は、対日教育改革の基本政策を検討する目的で、合衆国教育施設団を派遣し、戦中の日本の教育制度などの調査を1946年3月に行った。その報告書をもとに学校教育制度自体も大きく改訂されることになった。

その中の郷土教育に関連することとして、合衆国教育施設団の派遣に先がけて、GHQは、1945年12月に「修身、日本歴史地理停止二関スル件」の指令を出し、国民学校における修身及び歴史の授業を禁じ、文部省に対しては、歴史教科書の改訂案の提出を求めた。

この命令を受けて文部省が作成した「暫定初等科国史」は日本書紀及び古事記の神話に関する説話がこれまでの教科書と同じように取り上げられていたことが理由で、GHQからは使用が許可されず、教科書として陽の目を見るに至らなかった。そのGHQの指示のもと、新たに歴史教科書の改訂が始まったのは1946年5月のことで、この時に編纂された国民学校初等科用の教科書が「くにのあゆみ 上・下」であった。その中の先史時代の項には、「食べ物を入れたり、にたきをするのには、土のはちや、かめが使はれました。これらの土器には、大てい、なは目のもようがついています。(中略)」とあり、他にも石器や貝塚などについての記述が見られる<sup>9)</sup>。



図1 「くにのあゆみ」 上 文部省

このように「くにのあゆみ」では、日本の国のおこりを神話ではなく、考古学が明らかにした事実をもとにして記されていることが特徴の一つと言える。

その「くにのあゆみ」も、社会科の新設とともに使用されなくなった。

1947年には学習の指針として、新たに学習指導要領が公布された。その中で戦時中の国史、地理、修身に変わる新たな教科として社会科の新設が盛り込まれた。それは、戦後の教育改革の中の一つの大きな出来事であった。その後、1952年に、指導要領は次の改定が行われるが、その間の1947年版及び1951年版学習指導要領社会科編で示された社会科を中心とし、広くは昭和20年代の成立期の社会科を指して、『初期社会科』と言われる<sup>10)</sup>。

初期社会科の代表的な実践として、文部省の実験学校となった桜田小学校の“桜田プラン”、あるいはすでに文部省に先立って実施していた“川甲プラン”などが挙げられる。それらの優れた実践が作られた一方、全国の教師は、指導要領の解説などを手がかりとして戸惑いながらも社会科について手探りで実践を行っていた<sup>11)</sup>。その結果、全国各地で社会調査と児童調査に基づく「地域プラン」が作成され、教室では「ごっこ学習」が演じられた。

その初期社会科の学習方法は問題解決学習を主体とし、子どもの興味関心に基づいて学習が展開していった。その学習方法は、学力の低下をもたらすと懸念され、その学習方法は、子ども主導の経験的活動になぞらえて「はいまわる経験主義」と批判されることとなった<sup>12)</sup>。

一方、教育現場においては、社会科の研究が進む一方で、社会科とは距離を置き、地域のかかえる問題に着目し、その解決を目指した郷土教育の実践も一部の教師により展開された。それは、生活綴方を軸とし子どもたちの素直な感想や疑問などを綴り方にまとめ、フィールド・ワークや討論などを通して社会認識を深めていくところに一つの特徴があった<sup>13)</sup>。その代表的な実践として無着成恭の『山びこ学校』や本稿でとりあげる相川日出雄の『新しい地歴教育』が挙げられる。

上述のように、相川は、戦中・戦後の日本の混乱期において、学校教育を担った教師であった。

### (3) 考古学の学問的状況

一方、当時の考古学の学問的状況に目を向けてみたい。

日本考古学は1877年のエドワード・モースによる大森貝塚の発掘調査及びその調査報告書の刊行を契機に本格的な学問としてスタートした。しかし、第二次世界大戦によってその歩みは停滞を余儀なくされる。戦況の悪化に伴い、若い研究者は戦場に送られ、定期刊行物は「考古学雑誌」以外は休刊となった。

当時の非科学的な皇国史観が歴史観として確立され、それが国民を戦争に駆り立てるための手段として用いられた。そのような歴史観において、考古資料は歴史を考察する上で重要視されていなかったからである<sup>14)</sup>。

終戦を境に再び、考古学の研究が始められた。その日本考古学が目指したものは、戦時中に国民の間に浸透していた「非科学的」な皇国史観を克服することであった<sup>15)</sup>。

そのような問題意識に基づき、1947年からのべ4年間にわたって発掘調査が行われた静岡県登呂遺跡の発掘調査の成果や相沢忠洋による群馬県岩宿遺跡での旧石器時代の遺物の発見などのニュースはそれまでの神話を中心であった歴史観に改訂を迫る成果を挙げた。

また、敗戦を経験した人々の日本の歴史に対する関心は高く、上記の発掘調査の成果が知れ渡り、「考古学ブーム」と言われるほどの流行をもたらすほど、国民の間に考古学に対する期待と関心が高まった時期であった<sup>16)</sup>。

その期待と関心を象徴する出来事として、1953年に岡山県飯岡村で行われた月の輪古墳の発掘調査がある。これは地元の飯岡村文化財保護同好会が中心となり、「この発掘を通して神かがりの歴史ではなく正しい歴史を学習する」という目標を掲げ<sup>17)</sup>、和島誠一などの研究者の指導を仰ぎながら、中高生も含めた地域住民も参加して調査が行われた。

その背景には、皇国史観を克服し、歴史の真実を知りたいという国民的要求と、それを解決する手段として考古学の調査・研究成果に大きな期待が集まっていたことを如実に示していると言えよう。

終戦後の世の中は、混乱のまっただ中であったが、前述のように、人々の生活が少しずつ改善していく過程で、教育界そして考古学界は戦時体制から、新体制へと着実に移行していた時期であったと言える。

そのような時代背景の中で行われたのが、相川日出雄の「新しい地歴教育」の実践である。

### 3 「新しい地歴教育」の先行研究

相川の『新しい地歴教育』の実践についての研究はこれまで多くの先行研究があるが、それらは大きく二つに分けることができる。

一つが初期社会科における代表的な実践記録としてそれらを位置付け、当時の社会科教育及び生活綴り方教育の実践と、その理論の探求を目的として、実践記録及び学習過程等を分析した研究である。

もう一つが相川の教職歴や研究歴、そして実践が行われた学校の状況や当時の時代背景等などの推移に伴って変容していくライフヒストリーの中に実践を位置付け、その実践に込められた願いや意図などを分析的に読み解く、いわゆるライフヒストリー研究である。

前者の代表的なものに小原友行(小原 1977)と、田中史郎(田中 1980)のものが挙げられる。小原は、「科学と生活、理論と実践が統一されており、科学的な歴史認識を通して、歴

史的実践主体を育成することを可能にした」と相川の実践を評価している<sup>18)</sup>。

田中は子どもの主体的な「探求」に着目し、「郷土のフィールド・ワークや生活綴り方の方法は、いわゆる『問題解決学習』とは異なるものであり子どもの主体的な「探求」と教師による知識の「教授」を結びつけて、事実や事実の関係を理解させ、またとりわけ生活綴り方は、子どもがそれなりに歴史像を追求する方法として重要な役割を果たしている。」として、相川実践における子どもの「探求」の仕方について評価している<sup>19)</sup>。他にも前者に位置付けられる研究として、臼井嘉一(臼井 1982)や小島晃(小島 1983)などの研究がある。

一方、後者の代表的なものに、臼井克尚(臼井 2012・2013)の一連の研究がある。臼井は、相川の生育歴や時代背景等の情報を文献資料及び関係者への聞き取り調査などで蒐集し、それらを分析している。それらの研究を通して、これまでの相川の評価に加え、「農村青年教師」としての彼の経験に即して、郷土史中心の授業作りへの転換が図られたことや、当時の農村が抱えていた、貧困問題に相川が着目していたことを指摘する。その上で、郷土史の研究と実践を通して、貧困問題を中心とした郷土の抱える問題の解決を目指していたことを指摘している<sup>20)</sup>。

以上が『新しい地歴教育』を分析した先行研究である。

前述のように、郷土教育の重要性が教育基本法等で指摘されたことにより、今後各学校において郷土教育の研究が進んでいくことが予想される。その際、『新しい地歴教育』の実践も一つの参考にされることになるだろう。

その時に、相川の実践に限らず、戦前戦後を通して盛んに行われた郷土教育の実践や、その研究の成果を、現代の学校での郷土教育に生かすことはできないだろうか。

郷土教育の実践や研究が盛んに行われていた戦前・戦後の時代と現代とでは、農業に携わる人口は減少し、目に見える形での貧困は一応解消するなど、様々な面において歴史的状況及び生活環境が大きく異なる。そのような状況において、当時の実践及び理論をそのまま適用できるかという点については検討が必要である。

その点については臼井嘉一(臼井 2010)も「戦後日本教育実践史において展開されていたさまざまな地域に根ざす教育・郷土教育、生活綴り方教育、生活教育の諸活動・諸実践とどう関わり、どのように継承され、そしてグローバル化の新たな段階でまさに新たに再構築されていくのかというテーマが生まれてくる」と指摘している<sup>21)</sup>が、その点についての考察はまだ十分に行われていないのが現状である。

### 4 単元「かりのくらし」の概要

本実践の記録は「新しい地歴教育」国土社、1954年及び、『日本考古学講座』第1巻-考古学研究法、河出書房、1955年の中に納められている。それは相川が1952年と1953年の一学期、4年生を対象に行った郷土教育実践である。まず、郷土教育を行う上での構想について、相川は次のように述べる<sup>23)</sup>。

私はまず地域社会(郷土)に対して、郷土史とは大まかに、1 地図学習、2 原始、3 古代、4 中世、5 近代、とし、1,2,3を一学期、4を二学期、5を三学期というように大まかに目標をおいた。そしてはじめはかならず村の資料を使うように計画を立てた。

表1 社会科一学期の指導計画<sup>22)</sup>

社会科単元	社会科授業	その他の指導
<b>1.地図学習</b> 単元「地図学習」	授業「地図学習」  授業「実測」 ・地図を見て話し合い 授業「房総半島」 授業「日本」	・綴方指導 →年間継続して指導 ・版画指導 →年間継続して指導
<b>2.かりのくらし(原始)</b> 単元「かりのくらし」	・きくのや台地へフィールドワークに行った後、話し合い。 授業「土地・地層・地質」  授業「土器」  授業「テーマによる話し合い」	
<b>3.農業のはじまり(古代)</b> 単元「農業のはじまり」	授業「石包丁の変化」 授業「太陽」 授業「石棺とたてあなの家」	

この計画に基づき、相川は最初に綴り方の指導を行っている。その中で目指したものは「概念ください」とよばれる、子どもの技術的な能力や具体的な事物を見る目を高め、子どもの考え方を深める<sup>24)</sup>ことであるとして、年間を通じて綴り方の指導に取り組む。

相川が綴り方の指導を取り入れた理由としては次の点が挙げられる。

一つ目が1950年に発刊された無着成添の「山びこ学校」の影響である。当時行われていた生活綴方教育とは、子どもに自己の生活をありのままに文章表現することを促し、文章表現指導とあわせて、子ども自らの生活の見方、考え方、感じ方、行動の仕方を教え、生き方の探求を促す指導を行うことである。その代表的な実践に位置付けられる「山びこ学校」の実践は、全国の教師に大きな影響を与えたのと同時に目標となった。「日本作文の会」に入り、生活綴り方の指導を研究していた相川も、その影響を受けていたと考えられる<sup>25)</sup>。

二つ目の理由として、相川が所属していた武蔵野児童文化研究会において指導的立場にあった歴史学者の高橋禎一の影響がある。高橋禎一は生活綴方指導について「日常、具体的にものを見る見方、考え方や感じ方を養っていくこの方法(注、綴り方指導のこと)が歴史教育において歴史的なものを見方を養う基盤になるということ。」と述べている<sup>26)</sup>。

相川の指導により、綴り方に子どもが自ら感じたことや考えたことを素直に「あったことをよく思い出してそのとおりかく」ことができるようになった<sup>27)</sup>。

この能力は、後の埋蔵文化財を活用した実践でも大きく発揮されることになる。

次に取り組んだのは地図学習である。その理由について、「歴史(郷土史)も」の授業をやるさいにはかならず地図が必要になってくる。たとえ四年でも地図の学習が、郷土史を学ぶ前にどうしてもなされなければならない仕事だった<sup>28)</sup>とした上で、基本的指導方針について、相川は次のように述べる<sup>29)</sup>。

- 1 実地で定める方向や測定する距離を紙の上に書いたり、みたりすること。
- 2 小さな地図を横と上から現わした図に同じ地面の地形図(縮尺五万分の一以下の地図)を対照させてみる。
- 3 村の地形図を実際と比較対照させる。
- 4 そうすることによって近い目で見えたものから、単に絵はがきや幻灯や、地理的説明や図を利用することによって、遠い地方の理解が子どもにとって容易となってくるようにする。

この指導方針に基づき、綴り方の指導と平行して地図の読み方の指導を行っている。相川は校区の1号地図(5000分の1)から2号地図(10000分の1)、そして3号地図(25000分の1)と順番に縮尺の大きい地図から子どもたちに与えて読み方の指導をしている。

その中で縮尺が小さくなると、掲載される範囲が広がることや、それに伴い田んぼや学校などは大きくなると地図には載らなくなることを学習している<sup>30)</sup>。

地図の見方の指導に加えて、実際にその土地に出て距離や地形などを確かめさせ、理解が確実なものになるようにしている。具体的には、学校から「貝がらばつけ(貝の露出しているがけのこと)」までの距離を実際に歩いて巻き尺を用いて測定させ、その距離を地図の上で測った距離と比較させるなどの指導を行っている<sup>31)</sup>。

地図を活用する能力は、現行の小学校社会科指導要領においても学習を進める上で必要とされている基礎的な学力に位置づけられる<sup>32)</sup>。

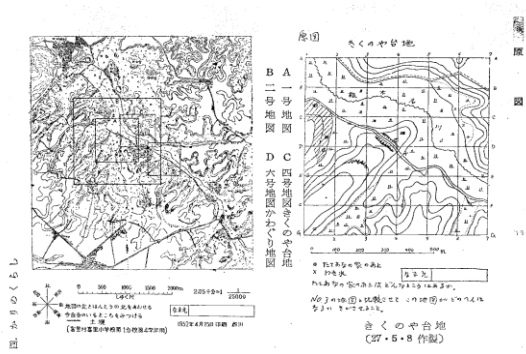


図2 指導に使用された地図

しかし、多忙な学校現場の現状では、地図学習だけに多くの時間を割くことができず、結果として八方位や地図記号などの地図に用いられる記号の意味や基本的な決まり等の説明程度に終わってしまいがちである。

相川は、郷土史の学習を進めていく上で、地図学習を重要なものと位置付け、体験を通してその意味を理解させることに加えて、学習の時期を最初に位置づけている。

綴り方の指導及び地図の見方の指導を経て、埋蔵文化財を活用した単元である「かりのくらし」の学習に入る。指導にあたり相川は次の四つの目標を設定した<sup>33)</sup>。

- |   |   |
|---|---|
| 1 | 村には道路工事で切通しにしたところが、ちょうど、たて穴の住居跡にあたり、その断面の見えているところがあるので、まずそこへ最初いってみることにした。 |
| 2 | 地図は次項のものを相似型で作った。(図2のこと)  |
| 3 | 土器も落ちているし、たて穴の断面には炉のあとと木炭がでていますが、これらの遺物に対して <u>好古学</u> にならぬよう注意する。        |
| 4 | 住居跡や遺物で台地の突端に祖先が住んだのはなぜかを中心にする。   |
- ※ 傍線は筆者による

その目標をどのように実践に反映させていったのかを実践の流れに沿って見てみることにする。

最初に相川は、目標1にある通り、子どもたちをさきのや台地の切り通しのところに連れて行き、縦穴住居跡を観察させている。

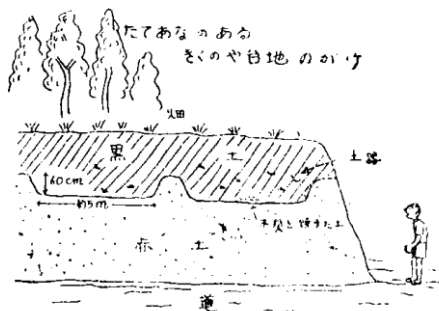


図3 縦穴住居跡の見えるさきのや大地のがけ

この図は『新しい地歴教育』に掲載されているものであるが、切り通しによって二つの縦穴住居跡が分断され、その断面が路頭に見えていることが図から分かる。相川は、ここで子どもたちに地層の解説をしている<sup>34)</sup>。

その後、「なんでもいいからわからんことをかいてごらん」と指示した。それに対して、子どもたちは次のような疑問を出した<sup>35)</sup>。

表2 子どもたちの意見

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・昔はどうして着物が無いのだろう。</li> <li>・昔使った土器がなぜ残っているのだろう。</li> <li>・昔の家で電気がなくてよるねるのにどうしたんだろうか。</li> <li>・土器は水ととけないからふしぎ。</li> <li>・土器に砂がまじっている。</li> <li>・どうしてねん土がかたまると土器になるのか。</li> <li>・どうしてつぼにもようをつけるのか。</li> <li>・どうして昔の家はあなをほったか。</li> <li>・ゆかもないのにどうしてねたか。</li> <li>・なぜねん土で土器をつくったか。</li> <li>・昔の人が住んでいたところになぜ土器が落ちているのか。</li> <li>・どうして昔からくらしがちがってくるか勉強したい。</li> <li>・土器をどうして一番はじめ考えたのか。</li> <li>・昔はなにを今のごはんにしていたか。</li> <li>・火山がばくはつしてどうしてとおいところまで灰がとんできたか。</li> <li>・なわのついた土器をどうしてじょう文というのか。</li> <li>・口のせまいつぼはどうして中を丸くしたのか。</li> <li>・火山灰はどうしてロームになったか。</li> </ul> |
|--|

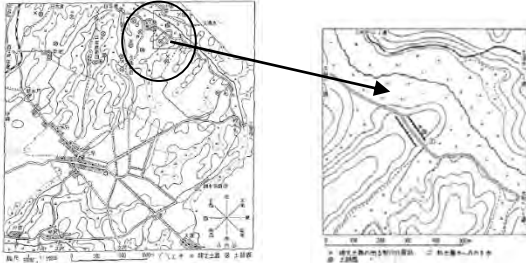
これらを見てみると、子どもたちが実に素直に感じたことや考えたことを出していることが分かる。それができたのは、綴り方指導において「あったことをよく思い出してそのとおりにかく」ことを指導されていて、いことが考えられる。加えて子どもたちの疑問を見てみると「どうして」という表記が目につくが、これは相川の指示でもあり、加えて指導において重視していたことでもある。

相川自身、考古学の研究成果を教育の場面でどのように取り入れているかについて次のように述べる<sup>36)</sup>。

文書形式でいうなら、「～だから～である。」とか「それだから～」というような論理的思考は考古学という科学で、遺跡や遺物からものを見極めていくのにもっとも根本的なものと考えている。ではそれを教育の場に適用した場合はどうなるのであろうか。考古学で当時の社会発展を学ばせると共に、子どもの論理的思考力をそれは極めて単純な推理、判断ではあるが養っていくことを私は重視したい。

つまり、考古学を教育の場に適用することによって子どもにも論理的思考力を養うことを目的としていたことがここから分かる。

目標 2 では、授業で使用する地図について述べているが、話し合いの前に三号地図(図 2 右)に縄文式土器を拾った地点を記入させ、それを四号地図と比較させている。



※右が図 3 のきくのや台地

図 4 話し合いに用いた図

図 4 を見てみると、台地の縁辺部で多く土器片を拾っていることが分かる。

目標 3 は、土器片や炭化物など、竪穴住居の周辺で表面採取された埋蔵文化財の扱いについて述べた部分だが、その中の「好古学にならぬよう注意する」とはどういうことであろうか。

遺跡内にある畑などに落ちていた土器片は、土器の名前や時期などを教えると、大いに興味をかき立てられるものであるが、それは相川の担任していた子どもであっても同じであろうと考えられる。

実際に相川が勤務していた富里村の畑には、土器片だけでなく、石斧や石鏃が落ちていて、子どもたちはそれらを見つけて、競って相川に報告していたという<sup>37)</sup>。

相川はそれに対して「特に珍しいものをもって来た子どもには、ノートや鉛筆をくれたものです。私もつとめて村の畑や山を家庭訪問の度毎にあるくようにしました。」と分布調査に取り組んでいた<sup>38)</sup>。その上で子どもや父兄を通じて考古学的な遺物が村の歴史を調べるのに大切な宝であるとして、次のような活動を通して、考古学的遺物の重要性について、村民への啓発を行っていた。

相川の勤務していた学校では、昭和 25 年(1950 年)に村の教育費で幻灯機を購入した。相川は「私たちの村の歴史」という自作のスライドを制作し、校区内で映写して回っていた。その結果、保護者以外の人々も含めて幻灯後援会ができる程好評であったという<sup>39)</sup>。そのスライドを制作するにあたり、相川は次の目標を立てている<sup>40)</sup>。

村には第四期洪積期成田層の貝化石の出る場所が多く、また畑、山に原始時代の土器・石器の散布地が相当数存在し、多くの出土品があるが、その価値が分からないため、多く

すてられかえり見られていない。以上の具体的現実からこの土地がいかにかに出来あがり、村の祖先が土地でどんな生活をしてきたかをはっきりさせなければならない。

このことから、スライドを制作していた時点、つまり「新しい地歴教育」の実践が行われる以前に、相川は遺物が郷土の歴史を解明する上で重要なものであるという認識を持っていたことが分かる。

このスライドは四年生の授業でも活用されるが、その時に相川は、郷土の理解をさらに進める上で、正確な知識を得るための副読本の必要性に気付く。そして「私たちの村」という副読本を作成するが、その中に相川は、次の文を掲載している<sup>41)</sup>。

この本は次の目的のために富里小学校社会科研究部で編集して作りました。第一に久能、日吉倉及びその付近の土地がいかにかにして成り立ったか、ということを知り、子供がみずから学習していくうちに理解させること。

第二にこの土地の先祖の人々があらゆる困難とたたかひながら発展向上してきた、ということを知り、土地の遺物などから学ばせること。(以下、省略)

この文からも、相川が郷土の先祖の歩んできた歴史を学ぶのにも遺物は重要であるという認識を持っていたことが分かる。授業以外にもそのような目標を掲げて、埋蔵文化財の重要性について啓発するための取り組みを行っていた相川は、「めずらしい・おもしろい」といった程度で埋蔵文化財に対する子どもの認識が留まるような指導にはならないという指導観を持っていたと言える。

目標 4 は指導の中心的課題と位置づけられている。それは、遺跡の立地条件に関することであるが、台地の縁辺部分に遺跡が多いということは、一般にはあまり知られていない知識である。しかし、考古学に携わる者にとってはある意味常識とも言える知識である。

なぜ、相川はこのテーマを中心的課題としたのか。その理由として、次三点の理由が考えられる。

一つ目の理由は、相川には考古学の調査及び郷土のフィールドワークによって得られた専門的知識があり、それを授業において活用しようとしていたからである。

当時の相川は、武蔵野児童研究会に所属しており、同じくその会に所属していた考古学者の和島誠一から指導を受けていたが、その影響が大きい。

相川は子どもを連れていく前に、和島誠一に縦穴住居跡を見てもらっている。

その際、和島から「たて穴住居跡と水とは必ず関係がある」そして、「台地ははじめは狩猟だけだったが、徳川期には広い部分が放牧場となり、現在は広大な畑となっている土地の生産力の発展を考えなければならぬ。しかしだからといってすべてを土地の生産力にもっていつてはいけぬ」

と、指導を受けた。その時に「なんというぼんくらだったろうと思った」と述べているように、その指導が相川に与えた影響は大きかったと考えられる<sup>42)</sup>。

和島誠一の指導により相川が気付いたことは「いろいろな知識をつかんで、それを統一的に使うという意識が欠けていた」という点である<sup>43)</sup>。

相川が気付いた「いろいろな知識を統一的に使う」とは、どういうことか。堅穴住居の立地条件については次のように述べている<sup>44)</sup>。

なるほどよく考えてみると台地の突端部にたて穴住居をもうけるのは、石器などでは井戸は掘れないから、台地の中央部では水に困るし、「では、その水はどのようなところに湧くか?」となると地層の問題にぶつかるし、それはさらに発展して土地の生い立ちにまでいかなければならなかった。

相川の気付いた「いろいろな知識を統一的に使う」という場面を授業の中に組み込むために、その素材としてふさわしいと考えたのが遺跡の立地条件とその理由を考えさせることであった。

このことに気付いた相川は、理科の学習において井戸や川などの観察や地下水のおこりを理解させるために水を通す土とそうでない土があることを実験によって確かめさせている<sup>45)</sup>。

そこで得られた知識は堅穴住居の立地条件についての理解を深めるために役立っている。

二つ目の理由として考えられるのが、相川が実践を行っていた当時の富里村の抱えていた課題があり、それを克服することができる子どもの育成を目指していたことが挙げられる。

相川が実践を行っていた富里村は落花生やさつまいもが作られており、水田のない農民は陸稲を栽培していた。しかし、それは非常に不安定なものであったという<sup>46)</sup>。

それらの課題の原因を突き詰めていくとそれは「水」という問題に行き着く。相川の勤務校の校区の農村の現状は相川の教え子の次の綴り方からも分かる<sup>47)</sup>。雨が降らない時の様子である。

雨	見沢悦子
雨がちっともふらない。 とうちゃんとおっかちゃんは 「さくもつがかれたり、おかぼがかれたりするから雨をふらしたい。」と 毎日いつている。 夕がたとうちゃんは畑へ行って、なっばに水をかける。 だいこんもかける。 じょうろへ水を入れて毎日かける。	

らっかせいの畑も、いも畑も、おかぼの畑もみんなあか土(註:関東ロームのこと)がぶかぶかになっている。

風がふくとバスがとおったあとのようにえらいほこりだ。

ふりかえって、堅穴住居に住んでいた人々が台地の縁辺部に住居を建てて住んだのは、台地の下を流れる川があればそこから、がけから水が湧く場合にはそこから生活に欠かせない水を得るためである。

堅穴住居を設営した時代と相川が目前にしている郷土の農家の現実。この両者の課題は「水を得るために工夫・苦勞をしている」という点で共通している。

そのことは、相川は「やはり人間は苦しんでいるのだ」と述べている<sup>48)</sup>ことから、相川も同じ認識を持っていたことが分かる。

さらに相川は、郷土教育を通して過去の人々が困難を克服して発展・向上してきたことを、遺物を通して学ばせようとしていた。つまり、堅穴住居に暮らしていた人々が水を得るために立地などを工夫して、その課題を克服していたことを学ばせようとしていたのである。

過去に郷土に生きた人々がそのような努力をしていたことに共感させることができれば、子どもたちにも「自分たちにもできる」という気持ちを持たせることができる。

三つ目の理由として、子どもたちにとって堅穴住居跡が身近なものであったからである。

しかし、身近で毎日子どもたちの目に触れるものであっても、その意味が分かれば、さらに興味が湧き、もっと調べてみたいと考えるだろう。

単元「かりのくらし」の指導にあたり授業の中で子どもに追求させるテーマを目標4に掲げた通り、①台地の上に住んだのはなぜか。②台地のつき出たところにすんだのはなぜか。という二つに絞り、土器が採取された場所を地図で確かめながら、子どもたちと討論を行った。

表5は実際の授業の展開である<sup>49)</sup>。

表5 授業「土器」の展開

【相川】 どんなところに土器が落ちている?
【児童】・久能,日吉倉に多い。 ・部落のそばに多い。 ・ちがうところにも落ちているよ。 ・台地の上にみんなある。
【相川】 台地のどんなところに?
【児童】・道のそば ・田んぼの枝の前にある。 ・台地のまん中の七栄の方は家がなかったと先生がいったと。 ・台地のとがったところに土器が落ちている。

【相川】 そうだ!その通りだよ。これはだいじなことだよ。そこに人が住んでいたんだね。じゃどうして台地のまん中,奥の方には住まなかったのだろうか。

【児童】 野原のまん中にはどうぶつがいない。

【相川】 うーんといたよ。

【児童】 ・あれえ。じゃどうしてだろうか。

・七栄の方は高いから,下の方はみられない。

【相川】 けしきのいいところに住むとは決まっていなね。

【児童】 かりのくらしのころはひゃくしょう知らないから台地のとがったところへ住んだんだ。

【相川】 まあーだまだ,ちがうよ。

【児童】 ・あれえ,どうしてだろうかなあ。

・台地の下だとおっかけておいつめられるから。

【相川】 なあーに。下のやぶへにげちまうよ。

【児童】 あれえ。うん,そうだ。はい,はい。水に困るから。

【相川】 そうだ!そのとおりなんだ。台地の先へ住んだのは水に困るからなんだ。かりのくらしのころはまだ鉄を知らないから石のどうぐだったね。それで五メートルも十メートルも井戸をほれないべ。だから台地の先のねん土層のわき水のあるところへ住んだんだよ。

【児童】 なあーんだ。そうかあ。

実際の授業の中で相川の出した発問を見ても「水に困るから」という答えに対しての直接的なヒントとなるような発問や説明は見当たらない。

つまり,子どもたちが,この授業を受ける前までにフィールドワークや地図学習など,それらを通して得られた知識をもとにして答えを導き出すことができていたと言える。つまり相川が目指した「いろいろな知識をつかんで,それを統一的に使う」という目標は,この実践に関しては,その目標を達成できていたと言える。

## 5 まとめと課題

### (1) 研究の成果

埋蔵文化財を活用した郷土教育のあり方について,相川の行った「新しい地歴教育」の相川実践の分析及び考察を行った。その結果,次の点が明らかとなった。

まず,子どもたちの理解を深めるために,その場限りではなく,計画的に指導を行っている点である。具体的には当初に綴り方の指導,次いで地図の読み方と活用の仕方の指導,地質について理解をするために理科で実験を行い,そして埋蔵文化財を活用した授業へというように,子どもたちが自分たちの住む郷土について深い理解が得られるように必要な知識や技能を見通し,計画的に学習を進めている点が明らかとなった。

その結果,授業の中で子どもたちからさまざまな意見を引き出すことができていた。さらに,相川が授業の中心とした「住居跡や遺物で台地の突端に祖先が住んだのはなぜか」という問題に対しても「水に困るから」という認識に至っている。

次に明らかとなったのは,相川が考古学研究で得た専門的な知識を授業に生かしていることである。これは,相川が「土器」の授業の中で子どもたちに「じゃ,どうして台地のまん中,奥のほうには人が住まなかったのだろうか。」という問いを子どもたちに出し,そして「水に困るから」という答えを討論によって見事に引き出したが,その際の相川の説明は,考古学研究によって得られた専門的な知識を活用したものである。

ちなみに考古学はきわめて論理的な学問である。出土した遺物や遺構,そして出土した層や周辺地形等のさまざまな条件を手がかりにして当時の歴史を復元する学問である。それがゆえに,論理的に考えることを求められる。

このように,考古資料及びその立地条件等から『何が分かるか』ということを考える考古学の考え方は,それを授業に取り入れることにより,論理的思考力の育成にもつながるものである。

さて,現在子どもたちの学力向上が求められていることは前述の通りである。毎年実施される全国学力調査においても,結果が思わしくないのが,どの教科においてもB問題,つまり資料を活用してそこから何が分かるのかを答える問題である。ここで求められる力こそ,まさに相川が考える「いろいろな知識をつかんでそれを統一的に使う」ことができる力ではないだろうか。

ふりかえって相川の郷土教育実践を今日の教育実践にどう生かしていくかを,現在求められている「学力向上」という観点から考えると,論理的思考力の育成を目指した郷土教育を進めていくことが必要ではないか。その観点から考えると,相川の行った郷土教育実践は現在においても大いに参考になると思われる。

話はそれるが,東日本大震災をきっかけに,日頃からの災害への備えについての関心が高まっている。災害への備えの第一歩は,自分の地域ではどのような災害が起こりうるかをまず知ることである。そのためには,土地に刻まれた地域の歴史を知ることができる遺跡は格好の資料となりうる。遺跡から過去にその地でどのような災害が起こったかを示す痕跡が出てくることは,それほど珍しいことではない。もし,地域にそのような遺跡があったら,防災教育を推進する上でも,遺跡は活用が可能である。

## (2) 今後の課題

相川は「土器」の実践の後、授業「石包丁」や「石棺とたてあなの家」などの実践に取り組むが、その中でも縦穴住居跡から出土した土師器片を活用したり校区にある古墳へのフィールドワークに行ったりするなど埋蔵文化財や古墳などの遺構を授業で活用したり、校区住民からもらった古文書を活用した授業などにも取り組んでいる<sup>50)</sup>。

それらの実践を、今後の郷土教育の実践に活用していかれるかどうかについて、今後も研究を進めていきたい。

しかしながら埋蔵文化財を活用した実践を広めていくためには解決しなければならない課題が多い。例えば縄文時代や弥生時代の学習は小学 6 年生になったばかりの 4 月に行われる。この時期は教師も多忙であり遺物の借用や準備の時間確保が難しい。さらに、教育政策によって左右される場合もある。その例の一つ挙げる。日本考古学協会は 2006 年に「社会科教科書問題検討小委員会」を立ち上げた。その理由は 1998 年(平成 10 年)の学習指導要領の改訂に伴い、歴史教科書の記述が「弥生時代」から始まるものが一般的となっており、それ以前の「縄文・旧石器時代」についてはまったく触れられていない教科書が出てきたことである<sup>51)</sup>。埋蔵文化財を活用した授業が効果をあげるこの時代が削減されてしまったのである。

その原因は指導要領の改訂により教育内容の削減が実施され、それに伴い削減されたものである。加えて小学校の歴史学習においては、歴史に身を置いた人物を通して歴史を学ばせるねらいがあった。よって、旧石器時代や縄文時代では具体的な人物を取り上げようもないという事情があった<sup>52)</sup>。

それに対して日本考古学協会は 2008 年に「学習指導要領の修正に関する要望書」を当時の文部科学省に提出し、「1 列島全域に普遍的に存在する考古学資料を十分に活用し、身近にある郷土の歴史を学ぶ姿勢を尊重すること。2 旧石器時代から始まる列島の歴史を明確に位置付け、世界的な視野から人類の営みを考える視点をはぐくむこと」の二点を要望した。現行の指導要領(平成 20 年 3 月告示)においては、「狩猟・採集や農耕の生活(以下省略)」から取り上げられるように改訂された。

日本に旧石器時代が存在したことは発掘調査の成果によって証明された厳然たる事実であるが、時の指導要領の改訂といった国の教育政策によって教科書にも取り上げられなくなることがありうることを示した事例である。

本来そのようなことがあってはならないはずだが、埋蔵文化財を活用した実践は、ともすると国の教育政策によって翻弄されてしまう危険があるものであることを認識すべきである。これまで述べてきたように、埋蔵文化財を活用した実践は子どもの論理的思考力を育成する上有効な

教材である。埋蔵文化財をただの“好古学”のための資料ではなく郷土の歴史を学ぶ上で重要であると位置付けた実践が広まることを願うものである。今後も学校教育において埋蔵文化財を活用した郷土教育のあり方を検討していきたい。

## 【引用・参考文献】

- (1) 2009,「教育小六法」教育基本法, p.88 学陽書房。
- (2) 鹿児島県教委,2014,「鹿児島県教育振興基本計画」, p.28.
- (3) 山本正身 2014,「日本教育史」慶應義塾大学出版会, p.412.
- (4) 鹿児島県教育委員会は 2014 年 12 月 3 日付けで各市町村教育委員会教育長宛に「小・中学校における土曜日の授業実施に係る留意事項等について」という通知文を出し、市町村教委に対し土曜授業を含めた教育課程全体の見直しは有意義であるとの見解を示した。
- (5) 鹿児島県教委,2014,「鹿児島県教育振興基本計画」, p.28.
- (6) 白井克尚「相川日出雄のライフヒストリー研究 -小学校社会科教師としての専門性育成に焦点を当てて-」『歴史教育史研究』第 10 号,歴史教育史研究会 2012 年,pp.25-47 をもとにまとめた。
- (7) 西川宏,1986 年「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学』第 7 巻-現代と考古学,岩波書店, p.178.
- (8) 桑原正雄「教師のための郷土教育」河出書房,1956 年,p.12.
- (9) 1946.「くにのあゆみ・上」 文部省. pp.2-5.
- (10) 小原友行,2000 年,「初期社会科」,「社会科重要用語 300 の基礎知識」森分孝治・片上宗二編,明治図書, p.58.
- (11) 馬居政幸,1987 年「社会科教育変遷過程の研究(2)-社会科論の構造-」静岡大学教育学部研究報告,教科教育学編,18. p.4.
- (12) 谷本美彦 2000 年,「はいまわる経験主義」,「社会科重要用語 300 の基礎知識」森分孝治・片上宗二編,明治図書, p.37.
- (13) 小原友行,1998 年,「初期社会科授業論の展開」,風間書房, p.459.
- (14) 西川宏,1986 年,「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学』第 7 巻-現代と考古学,岩波書店, p.178.
- (15) 西川宏,前掲書,「学校教育と考古学」,p.186
- (16) 西川宏,前掲書,「学校教育と考古学」,p.186
- (17) 近藤義郎,1998 年,「月の輪古墳」『吉備考古ライブラリー ①』,吉備人出版 pp.28-29.
- (18) 小原友行,1977 年「小学校における歴史授業構成について-相川日出雄『新しい地歴教育』の場合」広島史学研究会『史学研究』第 137 号。
- (19) 田中史郎,1980 年「相川日出雄-『新しい地歴教育』における方法と内容-現代歴史教育理論研究-岡山大学教育学部研究集録第 55 号。
- (20) 白井克尚,2013 年「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり-『新しい地歴教育』実践の創造過程にお

ける農村青年教師としての経験と意味-」,「社会科研究」第79号,全国社会科教育学会,pp13-24。

(52) 2006年10月25日付 中日新聞「消えた旧石器・縄文時代」に掲載の安野功教科調査官のコメント。

- (21) 白井嘉一,2010年「戦後日本教育実践史の新段階と『場の教育』『シティズンシップ教育』」,戦後日本における教育実践の展開課程に関する総合的調査研究論文集,p152。
- (22) 相川日出雄「新しい地歴教育」国土社,1954年を元に作成。
- (23) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.18。
- (24) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.15。
- (25) 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育の道」歴史評論 No.35 1952年 p.48。で相川は「歴史教育の道は綴方教育への道につながるということです。」と述べるなど綴方教育の重要性を指摘している。
- (26) 高橋禎一,1984,「高橋禎一著作集7 歴史教育と歴史意識」あゆみ出版, pp.208-209。
- (27) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.19。
- (28) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.18。
- (29) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.23。
- (30) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.17-34。
- (31) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.20。
- (32) 文部科学省「小学校学習指導要領」第2章 各教科 第2節 社会には,3年から5年生までにわたって,目標に地図などの基礎的資料の効果的な活用が掲げられている。
- (33) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.80-82。
- (34) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.85。
- (35) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.90。
- (36) 相川日出雄,1955年「考古学と郷土教育(実践例I 小学校の部)」和島誠一編『日本考古学講座』第1巻,河出書房,p.253。
- (37) 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育の道」歴史評論,No.35.1952年,p.39。
- (38) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.39。
- (39) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.40。
- (40) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.41。
- (41) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.43。
- (42) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.82。
- (43) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.83。
- (44) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.83。
- (45) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.84。
- (46) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」 p.46。
- (47) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.92。
- (48) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.91。
- (49) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.93-95。
- (50) 相川日出雄,1962「古文書と歴史教育 実践例(小学校)」高橋禎一編『古文書入門』河出書房新社。
- (51) 社会科・歴史教科書等検討委員会,2008年「社会科・歴史教科書を考える-小学校の教科書から消えた旧石器・縄文の記述」,「日本考古学 第26号」,日本考古学協会,pp.181-199。



# 南部九州における古代のカマドに関する覚え書き

上床 真

The Memorandum on the stove of nara-heian period in southern Kyushu ancient

Uwatoko Makoto

## 要旨

これまで、南部九州からは古代におけるカマドはほとんど発見されていない。それに対して、屋外炉や掘立柱建物内に炉がみられる場合もみられる。これらについて、集成し若干の検討を行った。その結果、古代における生活の一端を垣間見ることができた。

キーワード 古代（8～10世紀） 集落 カマド・炉・移動式カマド・軽石集積

## 1 はじめに

全国的にみて、古代<sup>1)</sup>の堅穴住居跡<sup>2)</sup>には「カマド」が設置されることが多い。ある報告書では、「カマドのない堅穴住居」が特別なものとして扱われている場合もみられる。

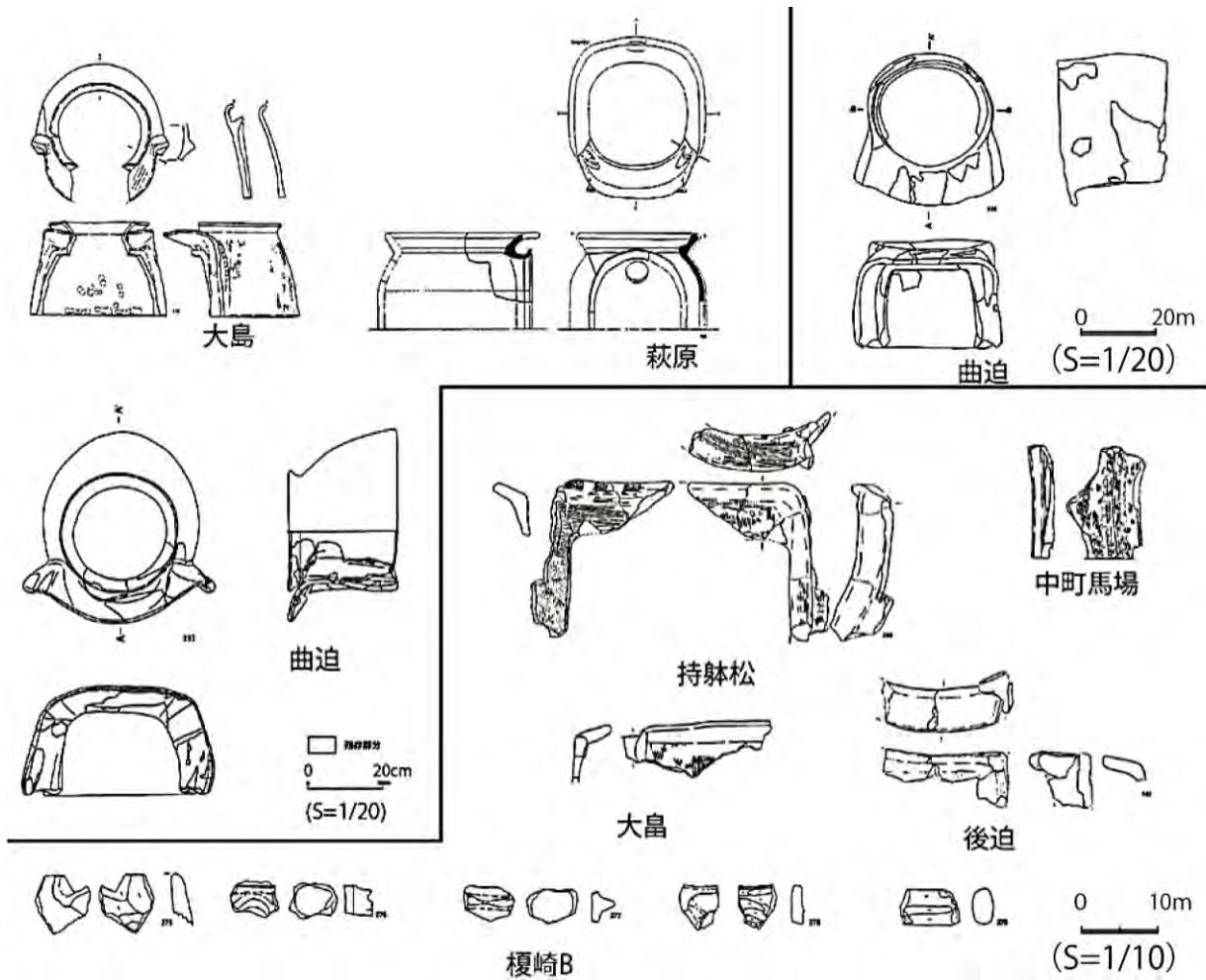


図1 移動式カマド

第1表 カマド関係遺跡一覧表（その1）

カマド形土器					
No.	遺跡名	所在地	遺物名	備考	文献
1	萩原	始良市平松原萩原	移動式カマド	県内初の事例。完形に復元。	町(1)1978
2	後迫	曾於郡大崎町横瀬字後迫			埋セ(66)2003
3	曲迫	霧島市溝辺町麓字曲迫		2点が完形品	埋セ(64)2004
4	大島	薩摩川内市東大小路町			埋セ(80)2005
5	中町馬場	薩摩川内市里町村西字中町馬場		離島では唯一の事例	村(2)2004
6	安茶ヶ原	いちき串木野市市来町川上字南安茶ヶ原中			埋セ(118)2007
7	大島	出水市野田町下名字大島			町(1)2006
8	持鉢松	南さつま市金峰町宮崎字持鉢松		現状での薩摩における最南端例。	埋セ(120)2007
9	榎崎B	鹿屋市郷之原町字榎崎	不明遺物	不明遺物として記載。現状での大隅における最南端例。	埋セ(4)1993
軽石集積					
No.	遺跡名	所在地	遺構名	備考	文献
1	踊場	曾於市財部町南俣字踊場	軽石集積	1基 被熱なし(他に「礫集積」が2基あり)	埋セ(71)2004
2	高篠	曾於市財部町南俣字高篠	軽石集積遺構 1~5	5基 土器器が出土 4・5は掘立柱建物内。軽石集積5から鍛造剥片検出。	埋セ(71)2004
3	宮尾	鹿児島市石谷町字宮尾	土器集中遺構	大小の土器器壺2点・礫出土。被熱。	埋セ(73)2004
4	下永迫A	日置市伊集院町下谷口字下永迫		隣接して堅穴遺構あり	埋セ(72)2004
5	上ノ平	日置市伊集院町下神殿字上ノ平		ピット内と地面に積んだものあり 被熱なし	埋セ(70)2004
6	桐木	曾於市末吉町通山字桐木		4号建物中に軽石を伴う焼土あり	埋セ(90)2005
7	常磐原	鹿児島市(郡山町)郡山字常磐原	焼土遺構	焼土粒子・赤色に焼けた軽石が散布。土器器片を伴う。	町(3)2003
8	建山	曾於市大隅町中之内字建山	軽石集積	8号掘立柱建物内にあり、軽石製品(支脚)	埋セ(152)2010
9	唐尾	曾於市末吉町諏訪方字唐尾	軽石集積	掘立柱建物内にあり、軽石製品(支脚)	埋セ(127)2008
鍛冶炉					
No.	遺跡名	所在地	遺構名	備考	文献
1	鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町字鍛冶屋馬場	鍛冶炉 1~5	古代(10世紀中頃)	埋セ(39)2002
2	持鉢松	南さつま市金峰町宮崎字持鉢松	土坑2	鍛冶炉の可能性あり	町(10)1998 ・埋セ(120)2007
3	橋牟礼川	指宿市十二町字下里・橋牟礼		8世紀。堅穴住居内	市(21)1996
4	犬ヶ原	日置市東市来町伊崎田字犬ヶ原		11~12世紀	埋セ(50)2003
5	高篠	曾於市財部町南俣字高篠	焼土・軽石集積遺構	9世紀	埋セ(71)2004

しかし、鹿児島県で発見される古代の堅穴住居跡には「カマド」が設置されている場合はほとんどなく、地床炉すら確認されないものも少なくない。

「カマド」が設置された例は、大坪遺跡（出水市）・大島遺跡（薩摩川内市）の2か所に過ぎない（県埋セ 2005 ①・②）。ただし、「移動式カマド」と呼ばれる遺物は数か所での発見例があり、近年の発掘調査数の増加に伴って事例が増加している。

## 2 研究略史

以下にそれぞれの鹿児島県内の資料を中心とした研究の略史を述べる<sup>3)</sup>。

### ① 発掘調査・報告書

カマドは、上ノ城跡（南さつま市）で中世のものがまず最初に確認され（加世田市教委 1980），続いて加栗山遺跡（鹿児島市）（県教委 1981），平泉城跡（伊佐市）（大口市教委 1982），上加世田遺跡（南さつま市）（加世田市教委 1985）などの城郭関連遺跡において、数年のうちに各地で中世のカマドが発見された。

その後も、中世以降のカマドが確認される中、古代のカマドが確認されない状況が続いた。このような状況の中、1999年度の調査で、大島遺跡（薩摩川内市）と大坪遺跡（出水市）の両遺跡において古代のカマド付堅穴住居が確認され、注目を浴びた。ただし、これ以降、新たな確認例は現在のところみられない。

第2表 カマド関係遺跡一覧表（その2）

カマド・炉等の遺構					
No.	遺跡名	所在地	遺構名	備考	文献
1	大坪	出水市美原町・黄金町字大坪ほか	造りつけカマド	カマド付き竪穴住居。8世紀後半	埋セ(79)2005
2	大島	薩摩川内市東大小路町字大島		カマド付き竪穴住居。8世紀代のもの2軒	埋セ(80)2005
3	大島	薩摩川内市東大小路町字大島	住居跡3号・6号	地床炉(3号:9世紀中葉・6号:9世紀後葉)	埋セ(80)2005
4	仁田尾中B	鹿児島市石谷町字仁田尾中	配石炉2基・焼土	石組み炉2基・地床炉(モモ核出土)	埋セ(110)2007
5	常盤原	鹿児島市郡山町字常盤原	焼土遺構	地床炉	町(3)1995
6	川上城(県調査分)	鹿児島市川上町字加栗山	方形土坑 5・6・8・9	方形土坑 5・6 は炭化物。方形土坑 8・9 は弱被熱痕(地床炉か)	埋セ(176)2013
7	堀之内	薩摩川内市青山町字堀之内	竪穴状遺構	地床炉・10世紀前半	県・公財(2)2014
8	柵城跡	いちき串木野市上名字門前	土器集中遺構8	地床炉。竪穴遺構内。9世紀前葉。	埋セ(155)2010
9	市ノ原(第3地点)	日置市東市来町湯田字市ノ原・下市ノ原・瀬戸ノ口	焼土跡7	土師器鉢・甕、黒色土器碗。石組炉か?。10世紀前半	埋セ(140)2009
10	西原	日置市伊集院町郡字西原	焼土土坑	礫・土師器	埋セ(58)2003
11	山神	霧島市溝辺町麓字山神	炉跡	地床炉・掘立柱建物内。9世紀中葉	県(7)1977
12	北麓原D	霧島市溝辺町麓字横大道	焼土	地床炉・焼土1は掘立柱建物内検出で炉壁あり。カマドか	埋セ2011(168)
13	外園	始良市船津字外園	土坑	竪穴状遺構S11(Ⅶ区)に隣接。8世紀後葉～9世紀初頭	市(3)2012
14	石打	始良郡湧水町川西字石打	2地点4基 ・3地点4基	炉内上部から土師器甕・安山岩礫など出土。被熱。	町(4)1999
15	猪ノ丸	始良郡湧水町恒次字猪ノ丸	配石遺構	砂岩礫十数個。被熱	町(3)2003
16	中尾立	霧島市福山町福沢字中尾立		4号建物内にカマド状遺構あり・他は地床炉。10世紀前半	町(2)1994
17	柵木原	霧島市隼人町内字柵木原	第1号住居址	地床炉。9世紀中頃	町2000
18	橋牟礼川	指宿市十二町字下里・橋牟礼		地床炉・掘立柱建物内。9世紀前葉。	市(16)1994
19	橋牟礼川	指宿市十二町字下里・橋牟礼	竪穴住居1・2・4	竪穴住居1に地床炉、竪穴住居2・4に鍛冶炉。8世紀後半	市(16)1994
20	敷領	指宿市十町字弥次ヶ湯	竪穴住居	地床炉。8世紀後半	市(25)1997
21	小中原	南さつま市金峰町大字新山小字小中原・入木田堀・町之迫	方形竪穴	地床炉。8世紀代	埋セ(142)2009
22	拾石畑(松木園)	南さつま市金峰町大字尾下字拾石畑	竪穴遺構	地床炉・10世紀前半	上床2000・2015
23	小園	南さつま市金峰町浦之名字小園	地床炉1	古代 礫・被熱・土師碗・土師甕	町(11)2000
24	持鉢松	南さつま市金峰町宮崎字持鉢松	土坑2	鍛冶炉の可能性あり	町(10)1998・埋セ(120)2007
25	芝原	南さつま市金峰町宮崎字芝原	炉跡	地床炉・不定形	埋セ(170)2012
26	建山	曾於市大隅町中之内字建山	軽石集積	8号掘立柱建物内にあり、軽石製品(支脚)	埋セ(152)2010
27	高古塚	曾於市大隅町岩川字高古塚	焼土・灰土	掘立柱建物内にあり、「焼土」と「灰土」がほぼセット	埋セ(73)2004
28	上ノ原	曾於市末吉町諏訪方字田方	焼土	竪穴遺構に隣接	町(9)1994
29	桐木・耳取	曾於市末吉町諏訪方字桐木	掘り込みのある焼土域	4号掘立柱建物跡のほぼ中央に位置。東側に軽石集積を伴う。	埋セ(91)2005
30	踊場	曾於市財部町南俣字踊場	1～5号焼土	1号掘立柱建物:1号焼土、7号掘立柱建物:3～5号焼土	埋セ(71)2004
31	高篠	曾於市財部町南俣字高篠	焼土1～28	集積1・掘り込みの上面に角礫が集中・被熱なし・甕出土	埋セ(71)2004
32	唐尾	曾於市末吉町諏訪方字唐尾	軽石集積	掘立柱建物内にあり、軽石製品(支脚)	埋セ(127)2008
33	天神段	曾於郡大崎町野方字天神段	炉跡1基・焼土跡2基	炉跡からは土壁塊と軽石加工品破片が出土	県・公財(3)2015
34	中野西(根木原A)	鹿屋市根木原町字中野西	11号土坑	古代のかまどの可能性あり	埋セ(76)2004
35	榎崎A	鹿屋市郷之原町榎崎	円形土坑	焼土のある(集石状)円形土坑(礫・土師器・粘土・焼土あり)	県(63)1992
36	鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町中平房字鳥居ヶ段	竪穴状遺構	地床炉・10世紀前半	町(1)1998
37	大島	薩摩川内市東大小路町字大島	炉	配石を持つ屋外炉。時期は検出層からの判断。	埋セ(80)2005
38	柵城跡	いちき串木野市上名字門前・柵鼻・大堂庵	炉状遺構	山腹部で6基、1～5が中世で6が古代か。L地区で1基。底部部Q区13基。	埋セ(155)2010

移動式カマドについては萩原遺跡（始良市）で確認されたのが最初である（始良町教委 1978）。その後、2000年代になって、後迫遺跡（大崎町）（県埋セ 2003）、曲迫遺跡（霧島市）（県埋セ 2003）、中町馬場遺跡（薩摩川内市）（里村教委 2004）、大島遺跡（薩摩川内市）（県埋セ 2005②）などでも確認されるようになり、県内にも点在することが明らかとなった。

古代の炉については、山神遺跡（霧島市）での例（県教委 1977）が最初であったが、その後しばらくは確認されなかった。1990年代に入ると、榎崎 A 遺跡（鹿屋市）（県教委 1992）、中尾立遺跡（霧島市）（福山町教委 1994）、橋牟礼川遺跡（指宿市）（指宿市教委 1994）などで再び確認されるようになった。

軽石集積は、2000年代に入って東九州自動車道関連調査（踊場・高篠・桐木遺跡【曾於市】等）で発見され、注目されるようになった（県埋セ 2004・2005 など）。

## ② 研究

古代のカマドは、長らく発見されなかったこともあって注目されることがなかった<sup>4)</sup>。

そのような状況の中で、中世のカマド遺構については研究の蓄積がなされてきた。以下にその内容を列挙する。

出口浩は、川上城跡の炉跡について平面形から A（円形）と B（長楕円形）の 2 タイプに分類した（出口 1994）。

今村敏照と中村守男は、馬場 A・辻町 2 遺跡（大口市）の調査成果をもとに、県内発見のカマド遺構について集成を行って概観した。また、カマド遺構の構造について、

燃烧室・焚口・灰溜めの 3 部分に区別している。ここでは特に、建物内か否かについて関心が持たれており、それに伴って性格付け（煮炊きされたものの種類・炉との判別等）などについて課題であるとした（今村・中村 1994）。

佐藤亜聖は、日輪城跡（曾於市）で検出されたカマド遺構を「炉状遺構」とし、この遺構が、城郭遺跡に集中する傾向のあることを指摘した。また、炉状遺構を、①居住空間とは一線を画する「鍛冶炉」の機能を持つもの②居住空間と密接に関連する「カマド」的なものに大別した（佐藤 2000）。

有川孝行は、柚須木城跡（鹿児島市）発見のカマド遺構について、出口氏の分類に従って A タイプ（円形）と B タイプ（長楕円形）に分類を行い、その相違点について指摘している（有川 2004）。

一方、古代の炉・カマド等については、2000 年以降に研究がみられるようになる<sup>5)</sup>。

川口雅之は、古代の鍛冶炉について形態分類を行ったうえで検討を行い、「公的な性格を持つ遺跡とそれ以外の集落では鍛冶技術に格差があった」ことを指摘している（川口 2004）。

上床は、カマド・炉等の集成を行って一覧表を作成し、若干の検討を行った。この際に、中世及び近世についても合わせて集成し検討している（上床 2007）。

藤井大祐は、成川式土器の煮炊形態の実情を探る目的で、「甑・造り付け竈・移動式竈」の集成を行って検討

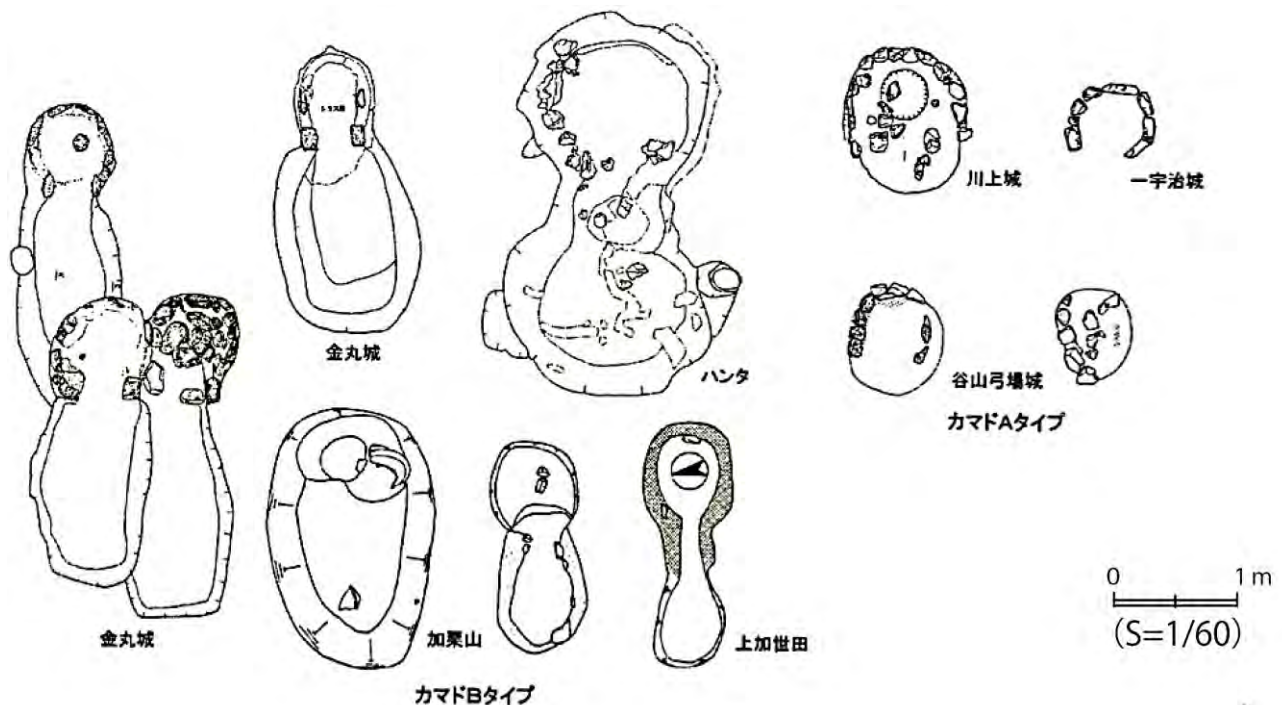
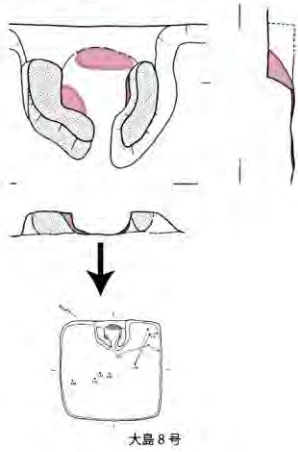
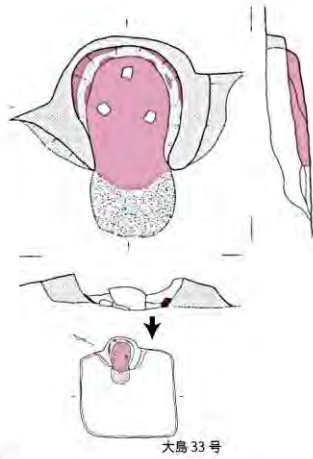


図 2 中世・近世のカマド

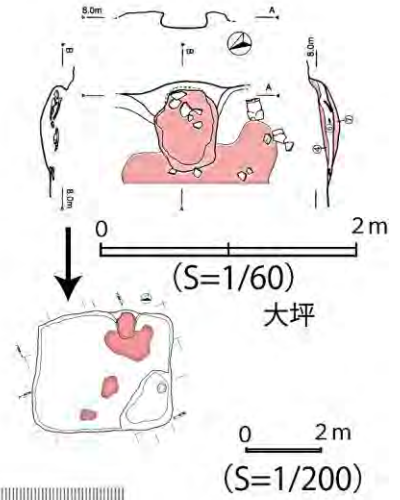
つくりつけカマド



大島 8号



大島 33号



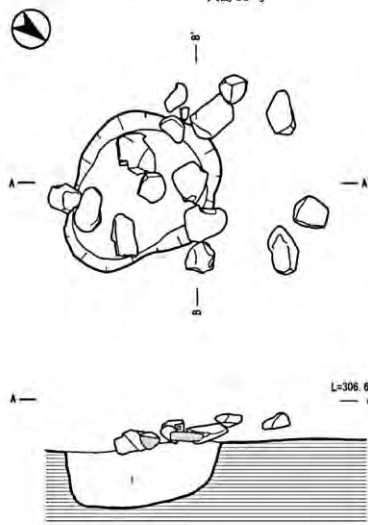
大坪

0 2m  
(S=1/200)

炉状遺構

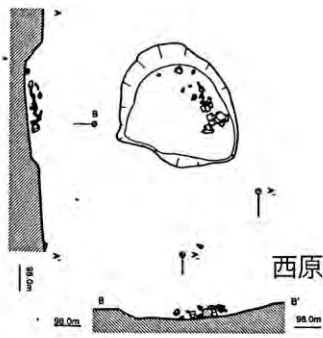


北麓原 D

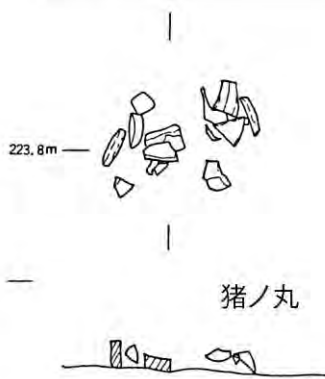


高篠

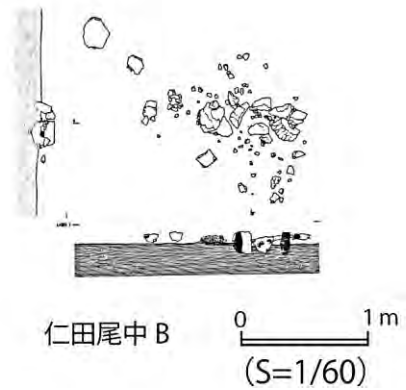
榎崎 A



西原



猪ノ丸



仁田尾中 B

0 1m  
(S=1/60)

図3 つくりかけカマド・炉

している(藤井 2012)。その結果、甑の流入形態の様相から、カマドについても「薩摩は8世紀頃に肥後から、肝属平野は7世紀頃に日向から」というそれぞれの流入形態を想定した。

3 カマド・移動式カマド・炉について

県内各地の遺跡から、「移動式カマド」と呼ばれる遺物が出土している。これまで県内では、数例しか発見されていないものである。

本県出土の「移動式カマド」は古代に該当するものであるが、全国的な視点からみると、カマド形土器は古墳時代から存在することになっている。さらにカマド遺構も

古墳時代に出現し、普及するという事になっている。翻って、鹿児島県内の事例をみると古墳時代にはカマドに関する遺構・遺物は発見されていない。そこで、ここでは県内において古代から散見されるようになるカマドに関する遺構（地床炉を含む）・遺物について状況をつかみその傾向を明らかにするために集成を行う。

集成の結果、カマド形土器については、現在のところ県内では9か所で発見されていることが明らかとなった。内訳は、薩摩国5か所、大隅国3か所、日向国1か所である<sup>6)</sup>。

古代の炉状遺構は、カマドの可能性のあるものを含めて34か所で発見されている。これらの中には、炉壁が存在した可能性があるもの（中尾立・北麓原D・中野西）や、礫が集中して検出されており「石組炉」の可能性のあるもの（仁田尾中B・市ノ原3・中尾立・榎崎A）が観察されている。

特に、焼土の周囲に礫が積まれているものは、カマドの可能性があるので前向きな検討も可能であろう。

建物との関係を見ると、竪穴住居に伴うものは12か所で、掘立柱建物に伴うもの8か所となっており、建物に伴わず単独で存在するもの14か所であった。特に、高古塚遺跡（曾於市）では掘立柱建物内で焼土とともに「灰土」が確認されており、その用途・性格等については注目される。

また、古代には軽石集積（焼土の周囲に軽石が存在するものや、軽石が集積された遺構）も存在する。近年になって、高篠遺跡で注目された遺構であるが、この遺構

もカマドもしくは鍛冶に関連する遺構との指摘がある。そこで、集成を行った結果9箇所となった。このうち5か所が曾於市内であり、この地域で顕著なことが想定されるが、薩摩地域においても4か所で発見されていることから、地域的な偏りではない可能性もある。ただし、軽石集積の中には、被熱痕跡のみられない遺構も存在するので、今後検討が必要である。また、高篠遺跡の軽石集積5から鍛造剥片が検出されているので、鍛冶関連遺構としての検討も今後必要であろう。

なお、鍛冶屋馬場遺跡（薩摩川内市）等では、古代の鍛冶炉が発見されているが、形態のみでは通常の炉と大きな違いはみられない。今後は、炉状遺構が発見された場合は必ず鍛造剥片の有無を確認するような準備が必要であろう。

遺構の遺物のありかたをみた場合、カマド形土器とカマド状遺構の両方が発見されている遺跡は大島遺跡（薩摩川内市）だけである。このことから、両者は共存するものでなく別個の性格を持つ可能性が考えられる。稲田孝司によれば、カマド形土器は『延喜式』などにみられる「韓竈」にあたるもので、実用よりも祭祀的な性格が強いという（稲田1978）<sup>7)</sup>。

例えば、曲迫遺跡（霧島市）のM14区ではカマド形土器が発見されている。このM14区からは、性格不明の6基の土坑も発見されている。これらの土坑のうち2基の遺構内から、土師器杯の完形品が出土していることから祭祀的な性格が想定される。また、遺跡の全体的な傾向としては、杯・碗は多いが甕は少ない。ただし、カマド

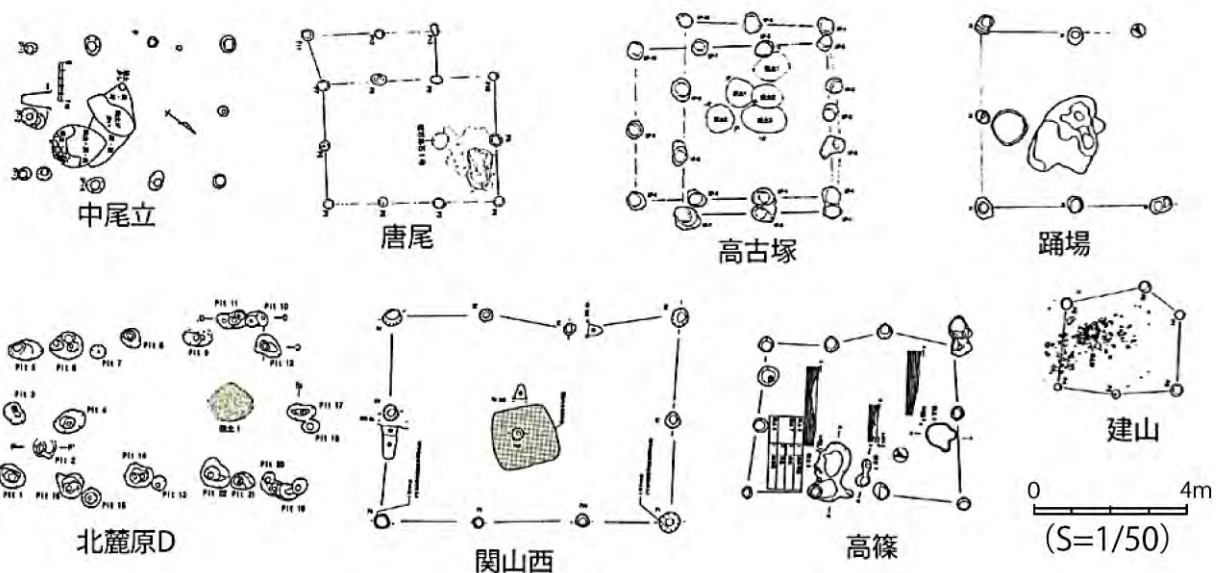


図4 炉を有する掘立柱建物

形土器とセットになる程度の量は存在する。さらに、甕に限定すると、包含層中からの出土量よりも土坑埋土内からの出土量の方が充実している。この事実は、カマド形土器の特殊な機能を想起させるものといえよう。

また、県内出土のカマド形土器の表面を観察すると、煮炊きの痕跡があまりなく、あったとしても煤・炭化物の付着が弱いという特徴があるので、日常用ではない可能性がある。

ところで、山口遺跡（薩摩川内市）では、カマド・炉が確認されていないため第2表中にはないが、「甗」が出土している。カマド・炉に伴って甗が出土している遺跡としては、大島遺跡（薩摩川内市）・仁田尾中B遺跡（鹿児島市）などがある。この現象は、単に「カマド・炉が存在したが検出することができなかった」のか「カマド・炉を用いずに甗を使用したのか」という問題<sup>8)</sup>があるが、現状では今後の課題としておきたい。

#### 4 おわりに

以上のように、カマド・炉などについて思いつくとこを記述した。

前稿（上床 2007）と変わるところは多くないが、新事例（榎崎 B 遺跡などの資料）を追加することができた。

今後は、集落に関する他の資料（焼塩土器・紡錘車・土錘）なども含め検討していく必要性を感じている。次回への課題としたい。

本稿を起こすのにあたって、以下の方々にお世話になった。ご芳名を記して、感謝の意を表したい。

有川孝行 池畑耕一 岩永勇亮 海老春樹沙 黒川忠広  
佐藤亜聖 重久淳一 関明恵 玉利浩実 堂込秀人  
徳永愛雄 永濱功治 中村有希 抜水茂樹 廣栄次  
藤井大祐 前迫亮一 真邊彩 宮下貴浩 宗岡克英  
湯場崎辰巳

#### 【 註 】

- 1) 「古代」の定義には様々なものがあるが、ここで取り扱う「古代」は、おおむね8世紀から10世紀を対象とする。
- 2) これまで「竪穴住居」とされていたが、近年になって「竪穴建物」とする例が増加している。例を挙げれば、『発掘調査のてびき』（文化庁・奈文研 2010）でも、「竪穴建物」としている。また、関和彦も竪穴「住居」という用語について疑問を投げかけている（関 1994・2000）。  
様々な意見もあるところではあるが、本稿においては現状での一般的な名称である「竪穴住居」を用いることとする。
- 3) 全国的な研究については、稲田（稲田 1978）や外山（外山 1992）によるものなどがあるが、紙幅の都合もあるので今回は触れない。

4) 古墳時代のカマド及び移動式カマドは現在のところ未確認である。

5) ここでは鍛冶炉についても、通常の炉の形状との類似性から、その研究史についても触れている。

なお、鍛冶・製鉄に関する「金属文化」に関しては、分析も含めると研究の蓄積がある程度はあるが、遺構に関してはほとんどない。また、鉄器を中心とした金属器そのものの考古学検討も川口によるもの（川口 2008）がある程度である。

6) 現在、鹿児島県となっている地域のうち、志布志市・曾於郡大崎町・曾於市の一部（末吉町・財部町・大隅町月野）を旧日向国として扱った。

7) 稲田孝司によると、以下の通りである。

「正倉院文書や延喜式にみられる『韓竈』あるいは「辛竈」がこれまで述べてきた竈形土器をさすものであることは、延喜主計寮式に『贄土師竈』、貞観儀式に『土師韓竈』『贄土師物韓竈』とあって、まずまちがいのないところである。韓竈がしばしば一具・二具とかぞえられ、あるいは竈・竈子・甗がつらねて記されることも、竈形土器とその専用釜および甗の組合せの実際とよく合致している。加えて延喜主計寮式の『贄土師……竈二口。高一尺五寸 竈子十口。受一斗 甗十口。受六升』という法量の記載も、竈形土器のそれにほぼ妥当なものである。」

8) 未使用の遺物としての甗が出土するのみという考え方もある。

#### 【参考文献・報告書】

- 始良町教育委員会 1978『萩原遺跡』始良町発掘調査報告書（2）  
有川孝行 2004「まとめ」『油須木城跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書（4） 郡山町教育委員会  
稲田孝司 1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25-1 考古学研究会  
今村敏照・中村守男 1994「大口市馬場A・辻町2遺跡におけるカマド跡」『大河』第5号 大河同人  
上床真 2000「薩摩・大隅の古代の竪穴遺構—竪穴式住居の終末に関する一考察—」『Fragments』第2号 さくら研究会  
上床真 2006「薩摩・大隅の掘立柱建物に関する若干の検討—古代掘立柱建物の集成・分類を中心として—」『Archaeology from the South』鹿児島大学考古学研究室 25周年記念論集 鹿児島大学考古学研究室 25周年記念論集刊行会  
上床真 2007「カマド・鍛冶関連の遺構・遺物について」『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)  
上床真 2009「鹿児島県の古代に関する覚え書き —ここ数年の成果を中心として—」『南の縄文・地域文化論考 南九州縄文通信』No.20 新東晃一代表還暦記念論文集 南九州縄文研究会  
上床真 2015「薩摩・大隅における古代竪穴遺構の再検討」『Archaeology from the South』III 本田道輝先生退職記念論文集 本田道輝先生退職記念事業会  
小田和利 1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2014『堀之内遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(2)

鹿児島県住宅供給公社1981『小田遺跡(隼人塚団地B地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター1993『榎崎B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『犬ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『東免遺跡・曲迫遺跡・山神遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(64)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『後迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(66)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(70)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『下永迫A遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(72)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『中野西遺跡・松山田西遺跡(根木原遺跡A地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(76)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『仁田尾中A・B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(110)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『唐尾遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡・高古塚遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(127)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2009『市ノ原遺跡第3地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(140)

加世田市教育委員会1980『上ノ城跡』加世田市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

加世田市教育委員会198『上加世田遺跡-1』加世田市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

狩野敏次2004『かまど』ものと人間の文化史117 法政大学出版局

川口雅之2004「鹿児島県における古代の鍛冶遺構について」『研究紀要・年報 縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

川口雅之2008「鹿児島県における古代・中世鉄器の基礎的研究」愛媛大学法文学部考古学研究室編『下條信行先生愛媛大学退任記念献呈論文集 地域・文化の考古学』下條信行先生

退任記念事業会

栗野町教育委員会1995『猪ノ丸遺跡』栗野町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

郡山町教育委員会2003『常磐原遺跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

佐藤重聖2000「炉状遺構についての一試論」『日輪城(恒吉城)跡』大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 大隅町教育委員会・(財)元興寺文化財研究所

杉井健1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』40-1 考古学研究会

関和彦1994『日本古代社会生活史の研究』校倉書房

関和彦2000「古代びとの建物仕様-堅穴「住居」論批判-」『住まいと住まい方-遺跡・遺物から何を読み取るか』帝京大学山梨文化財研究所 研究集会報告集3 岩田書院

田中昌樹2003「北陸地域の『竈形土製品』について」『富山考古学研究』第6号 財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査室事務所

近澤豊明1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会

出口浩1994「配石炉について」『川上城跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 鹿児島市教育委員会

外山政子1992「炉かカマドか-もう一つのカマド構造について-」『研究紀要』10 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団福山町教育委員会1994「中尾立遺跡」『福山町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)

藤井大祐2012「大隅・薩摩の諸勢力と対外交渉」第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』

文化庁記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編2010『発掘調査の手引き』-集落遺跡発掘編- 同成社

#### 【追記】

脱稿後に、敷領遺跡(指宿市)において、平地建物内から「カマド」及び「石組炉」が検出されていることを知った。この遺構は、紫コラ(貞観16【874】年の開聞岳噴火による火山堆積物)によって埋没した被災住居である。また、驚くべきことに「成川式土器」の甕も共伴している。つまり、①9世紀第3四半期 ②カマドの南限 ③成川式土器の下限 という3つの重要な点が指摘される事例であり、本稿で述べた内容について再検討を要する情報である。今後の課題としておきたい。

(報告書)

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(55)2015『敷領遺跡』指宿市教育委員会

平成 26 年度  
年報

平成26年度 発掘調査・整理作業・報告書作成を行った遺跡

県立埋蔵文化財センター 県事業関係

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者
1	春日堀ほか3遺跡	大崎町志布志市南九州市	文化財課	県内遺跡事前調査	確認	1,000	5月(知覧) 11月～1月(東九所)	旧石器		フレーク(川久保)	辻光永高
								縄文早期	集石遺構(小牧古墳群, 川久保) 土坑(春日堀)	・平格式土器, 破砕礫(小牧古墳群)・刻目突帯文土器, 石坂式土器, 礫, 敲石, (川久保)・前平式土器, 石坂式土器, 礫(春日堀)	
								縄文前期	集石遺構(川久保)	土器(川久保)	
								縄文晩期		土器(川久保)	
								弥生～古代	竪穴住居跡2基, 溝状遺構(春日堀)	土器(小牧古墳群)	
								古代～中世	土坑, ビット(川久保)	土師器(川久保)	
								古代～近世	遺跡4条, ビット(川久保)		
近代	飛行場造成痕(硬化面・造成面)・排水路跡(知覧飛行場跡)										
2	下原	志布志福山線(有明道路)改築	志布志福山線(有明道路)改築	本調査	4,400	9月～2月	旧石器	礫群3基(X層)	敲石, ナイフ形石器, チップ, フレーク	岡本吉元 眞邊	
							縄文早期	集石1基(VI層)	石坂式土器・下剝峯式土器・貝殻炭痕文土器・打製石鏃・磨石・被熱破砕礫・砥石・チップ(0B)		
							縄文後期～晩期		中岳Ⅱ式・御領式土器片・打製石斧・石匙・磨石・剥片(0B・チャート)		
							弥生		土器片		
							時期不明		打製石斧・剥片・陶磁器類		
				整理	5,600	H24 H25	旧石器	ブロック2	スクレイバー, 剥片, マイクロブレード	福永大久保 眞邊	
							縄文早期	竪穴状遺構2, 土坑12, 集石16	前平式, 吉田式, 石坂式, 下剝峯式, 押型文土器, 塞ノ神式, 石鏃, 磨石, 叩石, 石皿, 礫器, 剥片		
							縄文後期		指宿式, 中岳Ⅱ式		
							弥生	竪穴住居跡2	突帯文土器, 入来Ⅱ式, 磨製石鏃, 石匙, 石斧, 石錘, 磨石, 砥石, 山ノ口式, 石匙, 砥石, 石錘		
							近世・近代	街道跡, 道路状遺構12, 大型道路状遺構1, 溝状遺構4, 土坑2	薩摩焼, 瓦, 蹄鉄		
時期不明		掘立柱建物跡2	石斧								
3	山ノ口	志布志市	道路建設課(発掘)	本調査	10,500	4月～8月	旧石器		剥片(黒曜石, 硬質頁岩)	岡本吉元	
							縄文早期	集石2基(VII層) 土器集中(塞ノ神式土器)(VII層)	押型文土器・下剝峯式土器・塞ノ神式土器・打製石鏃・石皿・磨石・フレーク・チップ		
							縄文後期～晩期		中岳Ⅱ式土器・丸尾式土器, 土器片, 打製石斧, 石匙, 打製石鏃, チップ		
							縄文晩期～弥生早期		刻目突帯文土器		
							時期不明	硬化面(Ⅲc層) 硬化面(Ⅲa層) 計4条			
							旧石器		剥片・チップ		浦吉元
	縄文早期	集石2基, 土器集中(苦湊式土器)	前平式土器, 下剝峯式土器, 橋内押型文土器, 塞ノ神式土器, 石皿, 石鏃, 黒曜石								
	縄文後期	土坑29基	中岳Ⅱ式土器, 敲石・剥片・打製石鏃・打製石斧・石匙・黒曜石								
	縄文晩期		精製浅鉢形土器								
	弥生		入来式土器								
	古墳		成川式土器								
	中世	不明遺構多数									
	近世	溝状遺構2条									
時期不明	帯状硬化面10条										
4	鞍曲	南九州市	顕徒川辺線(知覧道路)改築	本調査	2,000	5月～8月	旧石器	礫群 XⅡb層上面26基 XⅢ層上面8基 頁岩ブロック XⅡb層2基	XⅡa層 ナイフ形石器, 剥片尖頭器, 台形椀石器, 頁岩フレーク, 石核, 0Bフレーク・チップ	有馬立神	

県立埋蔵文化財センター 県事業関係

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者
5	鍛冶園	南九州市	道路建設課(発掘)	額娃川辺線(箱出道路)道路改築	本調査	1,800	9月～1月	弥生	竪穴住居跡3基	土器片、中津野式土器	有馬立神
								古墳		成川式土器	
								中世		青磁	
								近世		染付	
								近代		銃弾	
時期不明	かまど遺構3基、焼土跡2基、帯状硬化面1基、ピット、井戸跡										
6	牧野	南九州市	額娃川辺線(知覧道路)改築	本調査	3,000	7月～3月	旧石器	礫群9基	黒曜石剥片、尖頭器	福永永濱	
							縄文草創期	集石3基	隆帯文土器片、細石刃、石鏃、剥片、黒曜石、チャート、頁岩		
							縄文早期	土坑1基、集石遺構35基、石器製作跡3か所	土器(竊A式、石坂式、下刺釜式、平椀式、押形文、桑ノ丸式、円筒形条痕文)、石鏃、石匙、石斧、黒曜石・チャート鉄石英、剥片、頁岩剥片、磨石、石皿		
							古墳	溝跡古道跡1条	成川式		
7	金山水車跡	南九州市	額娃川辺線(知覧道路)改築	本調査	3,000	7月～3月	中世		青磁碗	有馬立神	
							近世～昭和		染付碗、搦鉢、白薩摩、煙管、古銭(道光通宝1821～清)、ガラス製品(薬、DIMPONBREWERY、酒瓶等)		
							明治～昭和	宮内精錬所関連施設(水車跡、石垣、石列、水路跡・古道、建物跡等)			
8	知覧飛行場跡	南九州市	道路建設課(発掘)	額娃川辺線(知覧道路)改築	本調査	10,000	1月～2月	近代	硬化面、造成痕、誘導路痕		有馬立神
9	高付	南九州市	道路建設課(発掘)	額娃川辺線(知覧道路)改築	本調査	600	11月	古墳	土坑1基	成川式土器(東原段階)	辻
								中世		陶磁器、土師器	
								時期不詳	土坑1基、溝状遺構2基、ピット34基		
					整理	1,500	H25 H26	縄文後期	土坑6	指宿式土器、市来式土器、石斧、石鏃、石皿	辻西園
								弥生		入来式土器	
								古墳	土器集中土坑1	成川式土器	
中世		掘立柱建物跡1	土師器、青磁、白磁、東播磨系須恵器、輸入陶磁器								
近世			薩摩焼								
時期不詳			ピット73、溝状遺構1、土坑2								
10	中津野	南さつま市	国道270号(宮崎ハイパス)道路改築	本調査	790	8月～12月	縄文		土器片(指宿式)、石器(チップ)	尾川西野	
							古墳?		建築部材?		
							中世		青磁(龍泉窯系)、銅銭(元祐通宝)		
							近世	水路跡(素堀)・土手2本、杭列3条、暗渠遺構、足跡状遺構	陶磁器(染付、搦鉢、壺、甕片)、銅銭(寛永通宝(古寛永・文銭・新寛永))、種子(松かさなど)、暗渠に使用された竹、木製農耕具(下駄、犁)		
				近代		水路跡(コンクリート)1本	陶磁器(染付)、ガラス瓶(大日本麦酒、蜂印香嵐葡萄酒)、馬具(鍔バックル)				
				整理	約30,000	H18～H21・H25	縄文後期	集石1	市来式土器、指宿式土器、石鏃、石斧	尾川今村(敏)	
							縄文晩期		黒色磨研土器、石鏃、石斧、磨石、石		
弥生	溝状遺構1、土坑6	高橋式土器、入来式土器、中津野式									
古墳			成川式土器								
中世		溝状遺構1、大型円形土坑1	土師器、青磁、白磁								
近世		掘立柱建物跡6、かまど遺構2、溝状遺構5、大型土坑2、ピット群	薩摩焼、染付								
時期不詳			ピット群(弥生～中世)								

県立埋蔵文化財センター 県事業関係

番号	遺跡名	所在地	事業主体	起回事業名	調査の種類	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	時代	遺構	遺物	担当者
11	里町	伊佐市	道路建設課 (発掘)	国道267号線 道路改築	本調査	1,039	4月 ～ 6月	縄文		晚期土器、石鏃(CH)、剥片(OB)	今村(結) 真達
								古墳		成川式土器(中津野式?)	
								古代	土坑6基、大型土坑1基、溝状遺構1条	土師器坏・埴・甕・小壺、須恵器甕・坏、土鏃、越州窯系青磁碗、紡錘車、内黒土師器埴	
								古代～中世	柱穴46基		
								中世	溝状遺構1条、土坑1基	土師器坏、青磁、白磁、備前焼播鉢、滑石製石鍋	
								近世		薩摩焼壺・土瓶・播鉢、肥前系磁器碗、瀬戸・美濃系磁器碗、洪武通宝(加治木銭)	
								近現代		陶磁器・ガラス瓶	
時期不明	炭化物集中土坑1基										
12	合戦田陣跡	肝付町	都市計画課	高山停車場線 改築	本調査	1,500	6月 ～ 7月	古代	紫コラ集中域3か所、道跡1条	土師器・須恵器	光永 本高
								近世	炉跡3基、大型土坑1基、硬化面5か所、溝状遺構3条	薩摩焼、肥前陶器、初期伊万里、韃の羽口、瓦、鉄滓、鉄製品、古銭	
					報告書	1,500	H26	古代	紫コラ集中域、道跡1条	土師器・須恵器・成川式土器	
								近世	溝を伴う大型土坑1基、円形炉跡2基、大型土坑2基、硬化面4条、道跡1条、カマド2基、ピット2基	薩摩焼、韃の羽口、土師器、成川式土器、瓦、鉄滓、須恵器、釘	
近代	カマド1基、硬化面4条、方形炉跡1基	薩摩焼等、瓦、肥前陶器、初期伊万里焼、鉄滓、韃の羽口									
13	虎居城跡	さつま町		北薩広域公園 整備	確認	1,800	10月 ～ 12月	縄文		押型文土器、黒曜石剥片	永瀧 浦
								中世	土墓、堀、虎口、炉跡、溝状遺構、集石遺構(石塔含む)8基、土坑、土師器埋設土坑	青磁(碗・皿)、白磁(坏)、青花、染付、天目碗?、土師器(坏)、播鉢、土鏃、煙管、鉄製品、滑石製品、磁石、鉄滓	
14	鹿児島(鶴丸)城跡	鹿児島市	生活文化課	石垣修復	確認	660	1月 ～ 3月	近世	排水溝(昭和53・54年調査分)、石垣(上面に柄孔)、瓦積塼状遺構、排水溝(調査区3)、水槽?状遺構、礎石	瓦(平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・伏間瓦、大筒瓦一部に墨書・刻書・スタンプ)、陶磁器(碗など)、ガラス瓶(瓶・プラスチック・プレバート等)	永瀧 今村(結) 西野
								近・現代	コンクリート基礎・銅管		
15	加治木堀	大崎町	道路建設課 (発掘)	県道大崎輝北改築	報告書	4,950	H24 H25	縄文早期		打製石鏃6、土器小片	大久保
								縄文中期	P7で検出した土坑2(1基は落とし穴状遺構)		
								時代	遺構	遺物	
								弥生	竪穴住居跡1件、円形周溝2基	山ノ口式土器、凹線文土器、打製石鏃1、磁石	
								古墳		成川式土器、鉄蒺	
								中世	硬化面(古道)		
								時代不明	掘立柱建物跡1棟(1×1)、ピット		
16	弥十山	南さつま市		県道阿多川辺線 整備	報告書	433	H25	縄文後期		納骨式、辛川式、北久根山式、磨消縄文系、石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿	今村(敏)
								時代不明	溝状遺構1条		

市町村支援関係(市町村による発掘調査)

No	市町村名	遺跡名	支援要件	時代	注目される成果	市町村担当	センター担当者	
1	阿久根市	菟野遺跡	確認調査	縄文～中世	遺構・遺物なし	大野勝一 川原陽介	大久保浩二 馬籠亮道	
2	大崎町	高久田A遺跡	報告書	縄文～近世	中津野～東原式期の竪穴住居跡を7基確認	内村憲和	今村結記	
3	東串良町	唐仁古墳群	測量 確認調査	古墳	唐仁古墳群の測量調査の実施 県道拡幅に伴う試掘調査で119号墳周溝を確認	吉留潤一郎 大崎彩	馬籠亮道 今村結記	
4	肝付町	塚崎古墳群	確認調査	古墳	地下式横穴墓玄室陥没に伴う緊急発掘調査	松山幹生	前迫亮一 福永修一	
5	中種子町	立切遺跡	確認調査	旧石器 ～縄文	細石刃や平橋式の出土	田平祐一郎 野田直志 高橋俊幸	前迫亮一 馬籠亮道	
		平松B遺跡	確認調査	縄文	草創期の土器が出土			
6	喜界町	川寺遺跡ほか	本調査 整理	縄文～中世	中世の掘立柱建物跡・土壙墓、鍛冶杵を確認 嘉徳1式～仲原式期の竪穴住居跡の検出	澁田直敏 早田晴樹 安梧祐樹 照屋真澄	野崎拓司 岩元さつき 安武憲史	大久保浩二 今村結記 眞邊 彩
		城久遺跡群	報告書	中世	総括報告書の作成	松原信之	馬籠亮道	
7	天城町	戸森の線刻 面塔原遺跡	報告書	不明	時期特定のためのトレンチ調査の実施	具志堅亮	馬籠亮道	
8	伊仙町	前当遺跡	本調査	中世	中世(11～12世紀)の掘立柱建物跡・土壙墓を確認	新里亮人 安田未来	馬籠亮道	
		面縄貝塚	史跡指定関係現地調査	縄文	史跡指定範囲の確定に向けた最終調整	新里亮人	前迫亮一	
9	錦江町	荒田原遺跡	試掘調査	古代	古代の遺物の出土	高崎満広	前迫亮一	
10	志布志市	志布志城	史跡整備検討委員会	中世	発掘調査を行っている「曲輪」の検討	大窪祥晃	前迫亮一	

平成26年度 発掘調査・整理作業・報告書作成を行った遺跡

(公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

No	遺跡名	所在地	起回事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者
1	木森	志布志市有明町 野井倉5282 ほか	東九州自動車道建設	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	本調査	3,230	5月～7月	縄文早期 集石21基	土器(前平式、吉田式、加葉山式、下剥釜式、押型文)、磨石、敲石、石鏃、石匙	平木場大岩本下田代稲垣勝田	
	中世	掘立柱建物跡5軒、ピット多数					土師器、須恵器、白磁、青磁、鉄滓、鉄製品、滑石製石鍋片				
2	平良上C	曾於郡大崎町 井俣				5,680	11月～3月	縄文早期	竪穴住居跡2棟、連穴土坑3基、集石51基、土器集中5か所、土坑18基、石皿・磨石遺構1基	土器(吉田式、石坂式、下剥釜式、押型文、平栴式)、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿、礫石器、剥片、チップ	平木場大岩本下田代稲垣勝田
3	荒園	曾於郡大崎町 仮宿3483-1 ほか				6,290	5月～1月	旧石器		細石刃核(畦原型)・細石刃、チップ、敲石	井手上中村(耕) 新和技術コンサルタント(株)
	縄文早期	石材剥片(頁岩)集積遺構2基、集石22基、チップ・剥片集中区7か所	土器(前平式、加葉山式、下剥釜式、手向山式、平栴式、塞ノ神式、苦浜式)、耳栓、石鏃、石匙、砥石、磨石、石皿、チップ、スクレイパー、打製石斧								
	弥生	竪穴住居跡2軒	土器(吉ヶ崎式、山ノ口式)								
	古墳	竪穴住居跡4軒	土器(笹貫式)、砥石								
	中～近世	溝状遺構2条	東播系須恵器、備前焼、苗代川焼								
	近世以降	帯状硬化面2条									
	時期検討中	溝状遺構1条(開闢岳起源火山灰堆積)、溝状硬化面5条、土坑4基									
4	永吉天神段	曾於郡大崎町 永吉34-5 ほか	東九州自動車道建設	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所	本調査	10,400	5月～1月	旧石器	剥片	湯場崎彌栄隈元 バスコ(株)	
	縄文早期	集石13基、埋設土器1基					土器(桑ノ丸式、下剥釜式、平栴式、塞ノ神B式)、磨石、敲石、石皿、磨製石鏃				
	縄文前期						土器(轟系-Ⅲb層出土)				
	縄文後期						土器(三方田式)				
	縄文晩期	竪穴住居跡1棟、埋設土器1基、土坑2基					土器(入佐式、黒川式、刻目突帯文)				
	弥生	土器集中4か所(山ノ口Ⅱ式)、土坑65基、竪穴住居跡9基、掘立柱建物跡7棟					土器(入来式、吉ヶ崎式、黒髪式、山ノ口式、朝鮮系無紋)、磨製石製品、管玉、磨製石鏃、鉄製品(鉄鏃)、砥石				
	古墳	土坑6基、花卉形住居跡1基					土器(成川式)、ベンガラ				
	中世	溝状遺構6条、土坑27基(Va層)、掘立柱建物跡13棟、かまど関連遺構1基、火葬土坑3基、大型土坑3基、土坑21基(播鉢をかぶせた土坑1基)、土坑墓5基					土師器、白磁、青磁(稜花皿ほか)、東播系須恵器、滑石製品、滑石製石鍋、備前焼、石塔、茶臼、鞆の羽口、鉄滓、中国陶器、水晶、播鉢、古鉢、薩摩焼、肥前系磁器、人骨5体、六道銭				
	近世										
	時期不明	溝状遺構(C地点2条、E地点2条)、ピット群(E地点)、土坑3基					打製石斧(Ⅱa層)、敲石(Ⅱa層)、椀形鉄滓、石鏃、軽石製品				

(公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

No	遺跡名	所在地	起因事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者
5	京の塚	曾於郡大崎町 西持留茶木 1441ほか	東九州自動車道建設	国土交通省 九州地方 整備局 大隅河川 国道事務所	本調査	2,130	5月 ～ 2月	縄文早期	集石3基	土器(中原式, 山方押型文, 楕円形押型文, 枝回転文(通称イチゴ), 石坂式, 手向山式, 下剥峯式, 桑ノ丸式(辻タイプ), 平橋式, 塞ノ神式), 打製石鏃, 石核, チップ, 破砕礫, 異形石器,	三垣 黒木 深川 下田代
								縄文前期		土器(曾畑式)	
								縄文前期末～ 中期初頭	土坑150基以上, 土器集中9か所, 剥片集中2か所	土器(深溝式, 大蔵山式), 打製石鏃, 石鏃未製品, 石匙, 石鏃, スクレイバー, 異形石器, 球状耳飾, 二次加工剥片, 打製石斧, 磨石, 敲石, 石皿, 有溝砥石, 砥石, 石核, フレーク, チップ, 原石, 炭化種子, 炭化物	
								縄文中期		土器(鹿島式, 船元式(I～III), 阿高式)	
								縄文後期	土器集中1か所	土器(辛川式, 丸尾式, 西平式, 中岳式)	
								縄文晩期		土器(入佐式, 黒川式), 打製石鏃, 打製石斧	
								近世?	溝状遺構3条(硬化面あり)		
								時期検討中	古道8条	トトロ石器	
								時期不明	ピット		
									旧石器		
縄文早期	集石3基	土器(中原式, 山方押型文, 楕円形押型文, 枝回転文(通称イチゴ), 石坂式, 手向山式, 下剥峯式, 桑ノ丸式(辻タイプ), 平橋式, 塞ノ神式), 打製石鏃, 石核, チップ, 破砕礫, 異形石器,									
縄文前期		土器(曾畑式)									
縄文前期末～ 中期(IIb層, IV層)	土器集中23か所, チップ・フレイク 集中域, 石核(黒曜石), 集積1 基, 土坑約20基	土器(深溝式, 大蔵山式, 船元I・II式, 条痕文), 打製石鏃, 石匙, スクレイバー, 石核, フレーク, チップ, 原石, ハンマーストーン, 打製石斧, 磨製石斧, 石皿, 磨石, 砥石, 異形石器									
縄文後期	土坑2基	土器(西平式, 辛川式, 中岳式)									
縄文晩期		土器(入佐式, 黒川式), 打製石鏃, 打製石斧									
弥生前期		土器(高橋式)									
古墳		土器(成川式-表土内)									
近世		苗代川焼, 笠野原焼?, 染付(備前系)									
時代不明	ピット5基	翡翠, 小玉									
6	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 4390-21 ほか	東九州自動車道建設	国土交通省 九州地方 整備局 大隅河川 国道事務所	本調査	3,300	8月 ～ 10月	縄文早期	集石1基	土器(平橋式・下剥峯式など), 打製石斧, 石器	平木場 大岩本 下田代 稲垣 勝田
								縄文後期	竪穴住居跡2棟, 土坑, ピット多数, 埋設土器4基	土器(中岳II式など), 扁平打製石斧, 打製石斧, 剥片石器, 磨石, チップ, 管玉	
								弥生	竪穴住居跡2棟, 竪立柱建物跡1軒, 集石1基, 土坑, ピット多数	土器(高付式・山ノ口式など), 土製勾玉, 磨製石鏃, 磨石, 石皿	
								古墳		土器(辻堂原式)	
								時期検討中	竪立柱建物跡5棟 (柱穴に中岳式を伴う)		
					整理	11,600	H25	縄文後期	竪穴住居跡3軒, 埋設土器12基, 土坑, 落とし穴, ピット群	土器(中岳式), 垂飾, 丸玉, 勾玉, 管玉, 石鏃, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 石皿, 石刀	切通 埋蔵文化 財サポート システム (株)
								縄文晩期		土器(黒川式, 刻目突帯文)	
								弥生	竪穴住居跡3軒	土器(高橋式, 入来式, 山ノ口式)	
								古墳	地下式横穴墓88基(円形周溝及び 弧状遺構含む), 溝状遺構3条	土師器(壺・甗・高杯), 鉄器(剣・鉄鏃・大型異形鉄器・貝釧), 赤色顔料, 人骨	
								古代	焼土跡2基	甕, 杯, 墨書土器	

(公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

No	遺跡名	所在地	起回事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者
7	川久保	鹿屋市串良町 細山田				5,150	5月 ~ 1月	縄文前期	集石6基	土器(轟B式、管畑式)、黒曜石、磨製石斧	岩永 大福コン サルタント
								縄文晩期		黒川式土器、鐘飾品1点	
								縄文前~晩期		石鏃・打製石斧・石匙	
								弥生	竪穴住居跡1基	土器(刻目突帯文、下城式)、石皿、磨石	
								古墳	竪穴住居跡17基	成川式土器(辻堂原、笹貫)、勾玉1点、垂飾品2点、管玉2点、鉄製品、鉄滓、砥石、輪の羽口(約20点、転用品2点)、鍛造剥片、粒状滓、金床石	
								古代	掘立柱建物跡1棟	土師器、須恵器	
								中世	掘立柱建物跡36棟、竪穴建物跡2基、土坑墓1基、集石のある土坑3基、溝跡7条、土坑溝状遺構6条	白磁(12c後半~14c)、青磁、瓦器碗(楠葉型)、東播系須恵器、墨書土器、土師器、滑石製石鍋、砥石、鉄滓	
								中世~近世	古道跡5条・溝状遺構6条		
								近世	土坑	寛永通宝	
								近代		ガラス瓶、古銭	
8	牧山	鹿屋市串良町 細山田		国土交通省 九州地方 整備局 大隅河川 国道事務所	本調査	4,193	5月 ~ 1月	旧石器		剥片	徳永 イビソク
								縄文早期	集石8基、石器集中部7基、土坑4基、ピット20基、石器製作跡1箇所	土器(前平式、加栗山式、吉田式、押型文、下剥峯式、桑ノ丸式、平栴式)、打製石鏃、礫器、磨石、敲石、石皿、剥片、チップ	
								縄文後期	土坑3基、石器集中部10基	土器(西平式、市来式、丸尾式)、石鏃、打製石斧、石匙、磨石、敲石、石皿、剥片、チップ	
								縄文晩期	土坑4基、ピット69基	土器(入佐式)、打製石斧、剥片	
								弥生	ピット28基	土器(山ノ口式、弥生土器)、磨製石斧、磨石、敲石、剥片、チップ	
								縄文後期~弥生	土坑8基、ピット92基		
								古墳		成川式土器、須恵器	
								中世	古道跡2条、硬化面1箇所	青磁	
								時期不明	土坑1基、集石1基、集積1基、石器集中部1基、硬化面1箇所		
								縄文早期	竪穴住居跡6基、連結土坑19基、集石25基	土器(石坂式、下剥峯式、押型文、手向山式)、石鏃、磨石、敲石、石皿、剥片	
縄文後期	礫集積3基	土器(指宿式、市来式、磨消縄文)、石鏃、磨石、敲石									
縄文晩期		黒川式土器									
弥生中期	掘立柱建物跡1棟	山ノ口式土器									
時期不明	大型土坑、溝状遺構、帯状硬化面										
9	田原迫ノ上	鹿屋市串良町 細山田字 田原迫ノ上 ほか			整理	20,878	H22 ~	縄文早期	竪穴住居跡15軒、連結土坑21基、落とし穴9基、集石166基、石器製作跡4基、土坑87基	土器(吉田式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神B式、条痕文)、打製石鏃、磨製石鏃、石槍、トトロ石器、異形石器、石匙、磨石、敲石、石皿、石斧、炭化木材	寺原 繁昌
								縄文後期		土器(市来式、指宿式、鐘ヶ崎式)、磨石、敲石、打製石鏃、打製石斧、蛤刃形磨製石斧、石皿、砥石	
								縄文晩期		刻目突帯文土器、黒川式磨石、敲石、打製石鏃、打製石斧、蛤刃形磨製石斧、石皿、砥石	
								弥生中期	竪穴住居跡31軒、掘立柱建物跡40棟、円形・方形周溝12基、柱穴6列、ピット(柱穴)440基、集積遺構5基、溝状遺構5条	土器(山ノ口式、中溝式)、土製勾玉、磨製石鏃、有肩石斧、棒状敲石、砥石、鉄器片、炭化木材	
								古墳以降	溝状遺構15条、畝状遺構群3か所、硬化面	土師器壘・壺、陶器、磁器	

(公財)埋蔵文化財調査センター 東九州自動車道関係

No	遺跡名	所在地	起回事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者
10	立小野堀	鹿屋市串良町 細山田字 立小野堀			記録保存 調査	4,827	5月 ～ 9月	縄文後期		市来式土器、石鏃、磨石	藤島 花園 新屋敷
								古墳	土坑墓1基、地下式横穴墓37基、溝状遺構1条	成川式土器、須恵器、鉄刀、鉄剣、蛇行剣、刀子、鉄鏃、人骨	
								縄文前～後期	土坑1基	土器(深浦式、指宿式、市来式)、石鏃、磨石	
								弥生中期		山之口式土器	
					整理			古墳	土坑墓6基、地下式横穴墓189基、溝状遺構2条	成川式土器、須恵器、鉄刀、鉄剣、蛇行剣、刀子、鉄鏃、人骨	
11	天神段	曾於郡大崎町 野方7233ほか	東九州自動車道建設	国土交通省 九州地方 整備局  大隅河川 国道事務所	整理 報告書 調セ (3)	19,042	H19 ～ H25	旧石器(ナイフ型石器文化期)	礫群2基、炭化物集中部1か所		松下 長野
								旧石器(小型ナイフ型石器文化期)	礫群10基、石核集積1基、ブロック15か所以上	小型ナイフ形石器、小型台形石器、尖頭器、石核、ハンマー	
								旧石器(細石刃文化期)	ブロック30か所以上	細石刃、細石刃核、剥片、ハンマー	
								縄文草創期		土器片、石鏃	
								縄文早期(前半)	竪穴状遺構9基、落とし穴3基、連穴土坑33基、集石遺構152基、土器埋納遺構6基、土坑136基、土器集中区2か所、チップ集中区1か所	土器(前平式、志風頭式、加栗山式、石坂式、倉園B式、中原式、円筒条痕文)、種子炭化物、鱗茎状炭化物、石器(石鏃、石斧、礫器、石錘、磨石、石皿、軽石製品)	
								縄文早期(後半)	集石176基、土坑38基、チップ集中区2か所、石器集積遺構2基、土器埋納遺構1基	土器(下剥釜式、辻タイプ、桑ノ丸式、押型文、変形燃糸文、手向山式、妙見・天童ケ尾式、平裕式、塞ノ神式、苦浜式、早期末条痕文、耳栓状土製品、土製加工品(メンコ))、石器(石鏃、尖頭状石器、石匙、楔形石器、トロトロ石器、石斧、磨石、石皿、礫器、軽石製品)	
								縄文前・中期	落とし穴2基、集石遺構23基、土坑15基、石斧集積遺構1基	土器(管畑式、深浦式、船元式、春日式)、石器(石鏃、石匙、石剣、石斧、磨石、石皿、削器、装飾品、楔形石器)	
								縄文後・晩期	竪穴住居跡1軒、落とし穴6基、集石遺構22基、土坑157基、チップ集中区1か所、ビット4基	土器(入佐式、黒川式、干河原段階)、石鏃、扁平打製石斧、削器、楔形石器	
								弥生	竪穴住居跡2軒	土器(刻目突帯文、入佐式、松木蘭式)、石器(磨製石鏃、磨石、軽石加工品)	
								古代	竪穴住居状遺構2基、掘立柱建物跡7棟、土坑90基、ビット663基、焼土跡1か所、炉跡1か所、土器集中2か所	土師器、土師甕、墨書土器、刻書土器、須恵器、焼塩土器、紡錘車、鑄造剥片、砥石、軽石加工品	
中世	掘立柱建物跡49棟、土坑墓8基、溝・古道40条、鍛冶炉1基、ビット765基	青磁、白磁、青白磁、土師器、東播系須恵器、黒色土器、陶器、瓦器、鏡、鉄製品、鉄片、古銭、滑石製石鍋、滑石製品									
近世	土坑7基、ビット1基、畝状遺構1	陶器、磁器、煙管									
12	春日堀	志布志市 有明町蓬原			記録保存 調査	3,000	2月	縄文早期	石坂式土器 磨石、石鏃	藤島 上村	

(公財)埋蔵文化財調査センター 南九州西回り自動車道・国道220号関係

No	遺跡名	所在地	起回事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積(m <sup>2</sup> )	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者	パ ン 箱 の 数
1	前原	出水市 福ノ江町	南九州 西回り 自動車道 建設	国土交通省 九州地方 整備局  鹿児島 国道事務所	本調査	3,850	5月 ～ 10月	縄文早期		中原式土器	吉岡 中村 (有) 江神	46
								縄文中期		土器(阿高式, 船元式, 北 裏CII式)		
								縄文後期		土器(磨消縄文系, 南福寺 式, 市来式, 西平式, 北久 根山式)		
								縄文後晩期	集石1基, 土坑1基	磨石, 磨製石斧, 黒曜石剥 片		
								縄文晩期		土器(入佐式, 黒川式)		
								弥生中期前半		土器(入来II式, 松木園 式)		
								古墳		成川式土器		
								古代・中世	土坑墓1基	土師器(甕, 鍋, 皿, 杯, 碗), 須恵器, 青磁, 白磁, 瓦質土器, 刻書		
								近世		陶磁器, 薩摩焼焙烙		
					時期不明	溝状遺構6条, 土坑2基, 掘立柱建物跡1軒, ビット 44基						
					整理	3,850	H25 H26	縄文早期		中原式土器	吉岡 中村 (有) 江神	-
								縄文中期		土器(阿高式, 船元式, 北 裏CII式)		
								縄文後期		土器(磨消縄文系, 南福寺 式, 市来式, 西平式, 北久 根山式)		
								縄文後晩期	集石1基, 土坑1基	磨石, 磨製石斧, 黒曜石剥 片		
								縄文晩期		土器(入佐式, 黒川式)		
								弥生中期前半		土器(入来II式, 松木園 式)		
								古墳		成川式土器		
古代・中世	土坑墓1基	土師器(甕, 鍋, 皿, 杯, 碗), 須恵器, 青磁, 白磁, 瓦質土器, 刻書										
近世		陶磁器, 薩摩焼焙烙										
時期不明	溝状遺構6条, 土坑2基, 掘立柱建物跡1軒, ビット 44基											
2	中郡	出水市 野田町下名			本調査	245	7月	中世	溝状遺構3条 土坑2基 ビット3基, 硬化面	土師器, 青磁, 白磁	宗岡 倉元	1

(公財)埋蔵文化財調査センター 南九州西回り自動車道・国道220号関係

No	遺跡名	所在地	起因事業	事業主体	調査の種類	調査対象 表面積(m <sup>2</sup> )	調査 期間	時代	遺構	遺物	担当者	パン箱 の数
3	白水B ほか	鹿屋市白水町 107番地ほか	一般国道 220号古江 バイパス 建設	国土交通省 九州地方 整備局  大隅河川 国道事務所	本調査	15,700	5月 ～ 2月	旧石器・ナイフ 形石器文化期 (VIIc層・VIIa層)	礫群2基	ナイフ形石器, フレーク, チップ	長崎 田畑 川侯	
								旧石器・細石器 文化期(VIIb 層)		細石刃, フレーク, チップ, コア, 倒木		
								旧石器・細石器 文化期(VIIa層)	土坑1基	フレーク, チップ		
								縄文早期(V層)	土坑1基	磨石, 敲石, 磨製石斧		
								縄文晩期(III層)		黒川式土器, 打製石斧, 敲 石		
								時期不明	土坑1基			
3	白水B ほか	鹿屋市白水町 107番地ほか	一般国道 220号古江 バイパス 建設	国土交通省 九州地方 整備局  大隅河川 国道事務所	整理	6900	H5 H6	旧石器		ナイフ形石器, 細石器	宗岡 倉元	14
								縄文早期	集石2基 集石	下剝峯式土器, 石鏃, 石 斧, 磨石 押型文土器		
								縄文後期		市来式土器, 打製石斧		
								縄文晩期		土器(組織痕文, 刻目突帯 文), 石鏃 黒川式土器, 土製品		
								古墳	住居跡, 古道	成川式土器, 打製石斧		
								時期不明	ピット200基程度, 土坑10 基, 古道(部分的な検出)			
4	岩本麓	指宿市	一般国道 226号岩本 交差点改良	整理 報告書 調セ (4)	440	H25 8月	縄文後晩期		土器(上加世田式, 入佐 式, 黒川式), 磨石, 敲石, 石皿, 打製石鏃	吉岡 中村 (有) 江神	-	
							弥生		土器(刻目突帯文, 高橋 式, 入来II式)			
							古墳		土製品			
							古代・中世		須恵器, 土師器, 陶磁器, 瓦質土器			
							時期不明	溝状遺構1条 ピット22基				

## 1 資料調査・貸出等

### 資料調査受け入れ数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	合計(件)	調査遺跡数	調査遺物数
19	25	10	8	2	3	67	231	3,800

### 写真・図版貸出数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	合計(件)	遺跡数	点数
283	53	6	11	2	3	358	56	357

### 遺物・剥ぎ取り資料貸出数

博物館等	行政	大学	出版社	新聞社	企業	合計(件)	主な貸出先
2,264	608	566	5	0	0	3,443	国立歴史民族博物館, 九州国立博物館, 九州歴史資料館, 西都原考古博物館, 黎明館, 鹿児島国際大学, 各教育委員会等

### まいぶんキット貸出事業

貸出内容	貸出対象数
本物の遺物(土器や石器などをセットにしたものを学校等に貸出し, 授業で本物に触れる機会を提供)	対象校13校中, 38クラス, 931人

## 2 ホームページ(<http://www.jomon-no-mori.jp>)アクセス数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
アクセス数	2,342	5,419	3,087	2,946	3,488	3,931	3,922	2,812	2,539	2,689	2,834	3,373	39,382

## 3 データベース登録数(ホームページにて検索可能)

No	登録遺跡名	登録遺物		登録遺構		
		登録実測図	登録写真	登録実測図	登録写真	
1	船迫・高吉B	0	0	0	0	
2	前原和田	450	231	17	11	
3	カメコ	0	0	0	0	
4	中郡	0	0	0	0	
5	堀之内	0	0	0	0	
6						
7		※ 平成26年度は, システム更新と遺跡GIS修正作業のため, データベースの登録作業が実施できず。				
8						
9						
10						
平成26年度合計		遺跡数: 1	450	231	17	11
累計		遺跡数: 407	533, 171			

## 4 分析・保存処理点数(平成26年度中に処理が完了した遺物数)

No	処理名	処理点数	遺跡名
1	金属器処理	30	中郡遺跡, 堀之内遺跡, 鍛冶木堀遺跡
2	木器処理	60	虎居城跡, 梶城跡, JT跡地
3	分析(赤色顔料等)	99	立小野堀遺跡, 強の塚遺跡, 永吉天神段遺跡

## 5 研修等

### 埋蔵文化財専門職員養成講座

No	講座名	実施日	参加者数
1	初級講座(考古学講座と体験学習)	平成26年8月18日～8月19日	5町村12人
2	中級講座(長研者フォローアップ研修講座)	平成26年8月4日～8月5日	6市町村13人
3	上級講座(技術研修講座)	平成27年1月22日～1月23日	13市町村のべ29人, (公財)のべ3人

### 教員の研修講座

No	講座名	実施日	参+W52:AE53加者数
1	フレッシュ研修「鹿児島考古体験講座」	平成26年8月18日～8月19日	3人
2	パワーアップ研修(10年経験者研修) 「見て触って活用する埋蔵文化財」	平成26年7月31日～8月1日 平成26年8月7日～8月8日	小・特・養・栄:7人 中・高:4人
3	県総合教育センター短期研修講座	平成26年10月2日	小・中・高・特13人

6 普及・啓発関係

鹿児島県立埋蔵文化財センター遺跡フォーラム2014

開催日	会場	参加者数	内容
平成26年10月26日	鹿児島県 歴史資料センター 黎明館	160人	かごしま遺跡フォーラム2014「発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま」 (鹿児島県歴史資料センター黎明館企画特別展 「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」連携事業)

遺跡公開

遺跡名	所在地	開催日	内容	参加者数
金山水車跡	南九州市	平成26年11月22日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	640 人

(公財)埋蔵文化財調査センター実施分

遺跡名	所在地	開催日	内容	参加者数
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年9月13日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	210 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年9月14日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	370 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年11月8日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	212 人
川久保遺跡	鹿屋市	平成26年12月20日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	220 人
京の塚遺跡	大崎町	平成26年2月11日	遺跡概要説明, 遺跡見学(遺構・出土品の説明・見学)	480 人
合計				1,492 人

発掘体験等

遺跡名	所在地	開催日	内容	参加者数
中津野遺跡	南さつま市	平成26年8月18日	発掘体験	和田小学校教諭 1 人
牧野遺跡	南九州市	平成26年8月20日	発掘体験	南九州市こども学芸員 16 人
金山水車跡	南九州市	平成26年8月26日	発掘体験	南九州市こども学芸員 8 人
中津野遺跡	南さつま市	平成26年8月27日	発掘体験	和田小学校社会科 フィールドワーク 15 人
合計				40 人

(公財)埋蔵文化財調査センター実施分

遺跡名	所在地	開催日	内容	参加者数
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年6月13日	遺跡見学	個人(鹿屋市) 3 人
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年7月7日	遺跡見学	鹿屋市教 教育次長他 4 人
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年7月16日	遺跡見学	九州国立博物館 福岡大学生 4 人
川久保遺跡	鹿屋市	平成26年7月17日	遺跡見学	鹿児島教育事務所 発掘調査現場等調査 4 人
京の塚遺跡	大崎町	平成26年7月17日	遺跡見学・発掘体験	大崎町立持留小学校 14 人
京の塚遺跡	大崎町	平成26年7月22日	遺跡見学・発掘体験	大崎町立持留小学校職員 6 名
牧山遺跡	鹿屋市	平成26年7月28日	遺跡見学・発掘体験	鹿屋市文化財ウォッチング 16 人
京の塚遺跡	大崎町	平成26年8月5日	遺跡見学・発掘体験	霧島市文化財少年団 30 人
川久保遺跡	鹿屋市	平成26年8月5日	遺跡見学	個人(神奈川県・鹿屋市) 2 人
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年8月6日	遺跡見学	個人(神奈川県横浜市) 1 人
京の塚遺跡	大崎町	平成26年8月7日	遺跡見学・発掘体験	大崎町立持留小学校(個人) 4 人
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年8月11日	遺跡見学	個人(霧島市) 1 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年8月20日	遺跡見学・発掘体験	大崎町「おおさきっ子 歴史探検隊」 16 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年8月20日	遺跡見学・発掘体験	志布志市立宇都中学校職員 2 人
立小野堀遺跡	鹿屋市	平成26年9月3日	遺跡見学	鹿屋市笠ヶ原婦人学級 (鹿屋市文化財 出前講座) 10 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年9月4日	遺跡見学	大崎町ひまわり女性講座 23 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年10月3日	遺跡見学	平成26年度 全国埋蔵文化財法人 連絡協議会中国・四国・ 九州ブロック会議 22 人
田原迫ノ上遺跡	鹿屋市	平成26年10月8日	遺跡見学	県高規格新幹線道路 現場研修会 60 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年10月17日	遺跡見学	個人 4 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年10月23日	遺跡見学	大崎町立菱田小学校 遺跡見学及び地層学習 17 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年11月8日	遺跡見学	現地説明会及び 第4回考古学講座 「遺跡を見学しよう」 212 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年11月11日	遺跡見学	平成26年度埋蔵文化財 発掘調査現地研修会 (大隅教育事務所主催) 14 人
永吉天神段遺跡	大崎町	平成26年11月13日	遺跡見学	大崎町立中沖小学校 遺跡見学及び地層学習 20 人
合計				569 人

職場体験学習・インターンシップ等

期日	体験者等	内容	参加者数
平成26年6月17～6月19	志布志市立宇都中学校	職場体験学習(山ノ口遺跡発掘作業)	1人
平成26年10月1日～10月3日	国分南中学校	職場体験学習(埋蔵文化財センター整理作業)	4人

まいぶんキット貸出事業

	貸出期間	学校等名	市町村名	対象			内容
				学年	学級数	児童・生徒数	
1	4/11～4/11	清和小	鹿児島	6	5	170	縄文・弥生土器・石器セット
2	4/11～4/11	下水流小	出水	6	2	45	大坪遺跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
3	4/18～4/18	生福小	いちき串木野	6	1	17	袴城跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
4	4/23～4/23	米ノ津東小	出水	6	2	83	大坪遺跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
5	4/23～4/30	日当山小	霧島	6	3	110	建山遺跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
6	5/19～5/30	陵南小	霧島	6	2	53	芝原遺跡出土品など、古代～近世セット
7	6/4～6/11	柳迫小	曾於	6	1	3	土器セット(縄文～近世)
8	6/23～7/11	伊集院中	日置	1	4	133	永迫平遺跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
9	6/26～6/26	宇宿小	鹿児島	6	3	93	縄文・弥生土器・石器セット
10	7/4～7/4	細山田中	鹿屋	1	2	51	縄文・弥生土器・石器セット
11	7/8～7/8	江内中	出水	1～3	3	75	大坪遺跡出土品など、縄文・弥生土器・石器セット
12	7/28～8/25	古仁屋高	大島郡 瀬戸内町	2・3	4	51	縄文～古代 土器・石器セット
13	11/4～12/20	西野小	南種子町	1～6	6	47	縄文～古代 土器・石器セット施文具

おでかけ体験隊支援

番号	期日	学校名	所在地	対象学年等	人数	時間
1	4月11日(金)	清和小	鹿児島	6年5クラス	170	2コマ
2	4月11日(金)	下水流小	出水	6年2クラス	45	2コマ
3	4月18日(金)	生福小	いちき串木野	6年1クラス	17	2コマ
4	4月23日(金)	米ノ津東小	出水	6年2クラス	83	2コマ
5	6月26日(木)	宇宿小	鹿児島	6年3クラス	93	3コマ
6	7月4日(金)	細山田中	鹿屋	1年2クラス	51	2コマ
7	7月8日(金)	江内中	出水	1～3年3クラス	75	2コマ
合計					534	15コマ

7 刊行物等

発掘調査報告書

No	シリーズ番号	発掘調査報告書名	所在地	執筆担当	発行月
1	セ183	加治木堀遺跡	曾於郡大崎町	大久保浩二, 相美郁恵	平成27年1月
2	セ184	弥十山遺跡	南さつま市金峰町	有馬孝一	平成27年3月
3	セ185	合戦田陣跡	肝属郡肝付町	光永誠, 本高謙治	平成27年3月
4	セ財3	天神段遺跡1(弥生時代～近世編)	曾於郡大崎町	平本場秀男, 木内敏生, 佐藤真人	平成27年2月
5	財4	岩本麓遺跡	指宿市岩本	山方直幸, 八木澤一郎, 宗岡克英	平成27年3月

埋文だより(各2,400部発行)

No	シリーズ番号	内容	発行日
1	64号	文様入りの石刀出土(町田堀遺跡), 平成25年度かごしまの遺跡情報, 本物で学ぼう! ～きてみてさわって埋文センター～, 平成26年度発掘調査予定遺跡	平成26年6月13日
2	65号	新たな営みの始まり(鞍曲遺跡), 発見! 発掘速報, かごしま遺跡フォーラム2014～発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま～, 新たな企画展始まる～百聞は一見に如かず, 遺跡公開! 現地説明会開催	平成26年12月15日
3	66号	近代鉱業の先駆け(金山水車跡), 遺跡詳解, 発見! 発掘速報, 遺跡公開! 現地説明会開催, 縄文の森企画展好評開催中, 埋蔵文化財専門職員養成講座	平成27年2月13日

かごしま遺跡フォーラム2014資料集「発掘踏査の成果からみえてきた中世のかごしま」

内容	発行日
① 文献から見た中世のかごしま 歴史資料センター黎明館 栗林文夫	平成26年10月26日
② 発掘調査成果からみえてきた中世の薩摩半島～万之瀬川下流域遺跡群を中心に～ 県立埋蔵文化財センター 関 明恵	
③ 発掘調査からみえてきた中世の大隅半島 (公財)埋蔵文化財調査センター 中村 和美	
④ 南から見る中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～ 歴史資料センター黎明館 中原 一成	

8 鹿児島県立埋蔵文化財センター来所者数(平成26年度)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
個人	小学生	22	10	4	38	232	1	11	6	5	3	4	20	356	
	中学生	0	4	0	5	7	0	1	1	0	0	0	0	18	
	高校生	21	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	23	
	一般	355	213	166	250	399	188	272	217	214	182	209	324	2,989	
	その他	0	0	0	0	48	0	29	0	0	27	16	0	120	
	計	398	227	170	293	686	189	315	224	219	212	229	344	3,506	
団体	小学生	人員	0	361	0	45	100	0	22	50	0	0	85	0	663
		団体	0	4	0	1	1	0	2	2	0	0	1	0	11
	中学生	人員	0	4	0	0	0	0	5	0	0	0	0	105	114
		団体	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3
	高校生	人員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		団体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般	人員	0	23	0	26	33	95	19	113	19	0	68	28	424
		団体	0	0	0	0	1	4	1	4	1	0	1	1	13
	計	人員	0	388	0	71	133	95	46	163	19	0	153	133	1,201
		団体	0	5	0	1	2	4	4	6	1	0	2	2	27
	計	小学生	22	371	4	83	332	1	33	56	5	3	89	20	1,019
		中学生	0	8	0	5	7	0	6	1	0	0	0	105	132
高校生		21	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	23	
一般		355	236	166	276	432	283	291	330	233	182	277	352	3,413	
その他		0	0	0	0	48	0	29	0	0	27	16	0	120	
計		398	615	170	364	819	284	361	387	238	212	382	477	4,707	

9 (公財)鹿児島県上野原縄文の森との連携

企画展・特別展関係

No	開催期間	企画展テーマ	講演会日	職名・講師	講演会テーマ	会場	講演会参加者数	総来園数
第39回企画展	平成26年4月18日 ～7月6日	明らかになった 郷土の歴史と文化	H26.5.10	鹿児島国際大学 教授大西智和	モノから探る他地域との関係ー「甕島」と「須恵器」を事例として	多目的ホール	36名	36名
第40回企画展	平成26年7月18日 ～11月16日	新発見!かごしまの遺跡2014 ～発掘速報展～	H26.8.16	埋蔵文化財センター文化財主事 関明恵	堅野(冷水)窯跡及び鹿児島(鶴丸)城跡出土の白薩摩	多目的ホール	21名	60名
				調査センター文化財専門員 大岩本博之	町田堀遺跡出土の石刀			
			H26.11.1	埋蔵文化財センター文化財主事辻 明啓	「南薩縦貫道(知覧道路)に伴う最近の発掘調査から」			
				調査センター文化財専門員 松下建生	「中世墓から見える天神段遺跡」	39名		
第41回企画展	平成26年12月22日 ～3月31日	「古墳時代の鹿児島」	H27.1.24	国立歴史民俗博物館 名誉教授広瀬和雄	大隅の古墳時代ー中央政権の対外対策をめぐってー	多目的ホール	55名	55名

考古学講座「なるほど感動!発掘調査からわかる郷土かごしまの歴史」

No	開催期間	タイトル	講師	場所	参加者数
第1回	平成26年5月24日	発掘調査から見える北と南のくらし	県立埋蔵文化財センター文化財主事 西園勝彦 (公財)埋蔵文化財調査センター文化財専門員 平 美典	縄文の森展示館 多目的ルーム	41名
第2回	平成26年7月5日	発掘調査の跡を訪ねて	—	—	39名
第3回	平成26年8月30日	発掘調査から見る戦いの跡	県立埋蔵文化財センター 調査課長 前迫亮一	縄文の森展示館 多目的ルーム	44名
第4回	平成26年11月8日	遺跡を見学しよう	—	永吉天神段遺跡	31名
第5回	平成26年12月20日	世界文化遺産登録に向けて	県企画部世界文化遺産課 総括監 中堂蘭哲郎	縄文の森展示館 多目的ルーム	26名
第6回	平成27年2月7日	古墳時代	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 准教授 中村直子	縄文の森展示館 多目的ルーム	37名

Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

## No.8 CONTENTS

---

### 《Study Note》

Ironware excavated from Underground Carridor-style Brial Chambers in the Kofun jar, Kimotsuki Plain  
Shinyashiki Kumiko

X-ray fluorescence analysis of Medieval pottery in Southern Kyusyu, Japan  
Kuroki Rie

Ancient South Kyusyu considered from vegetable matters with focus on Tenjindan Site  
Fukagawa Yuko

Validity and Problems of All Dot Excavation  
Tategami Michifumi

Miyanoue site' s pottery group in the first half of the end of the Jomon  
Nagano Shinichi

The Ritural site to Be Affected Tumulus In Osumi Aria  
Nakamura Kouji

Education for local patriotism and archeology  
Yoshimoto Teruyuki

### 《Materials of Archaeological Research》

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream  
Uwatoko Makoto

---

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 26th year in Heisei

---

Kagoshima Prefectural Archaeological Center  
October 2015

研究紀要・年報

縄文の森から

第8号

二〇一五年  
鹿児島県立埋蔵文化財センター